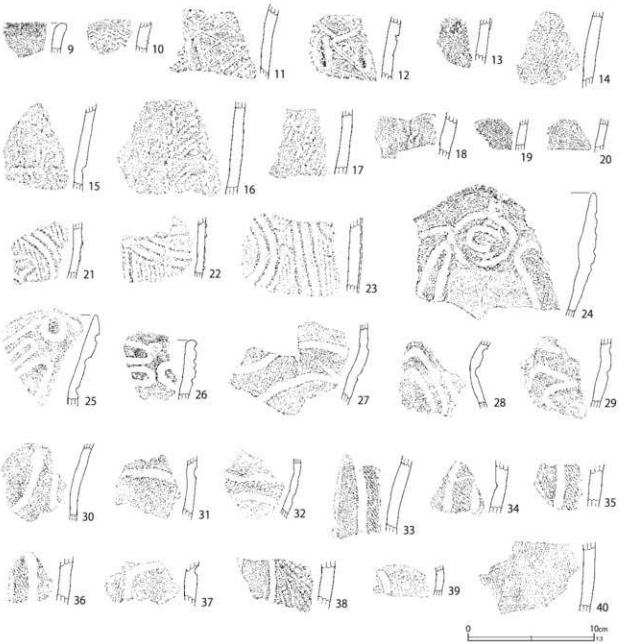


第636図　グリッド出土遺物（2）

第232表　グリッド出土復元土器観察表（第635図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
635-3	[9.8]	(32.3)	－	－	10%
4	31.5	(21.0)	－	11.2	30%
635-5	[25.2]	(26.8)	－	－	60%
6	[7.8]	(11.8)	－	－	30%

ル文区画は長方形区画の端部に渦巻文を有している。区画内は集合斜線を施文し、波状沈線文を施文する構成になっている。以上は、藤内式の古段階に並行する土器群と思われ、勝坂式中段階としたものである。

6は口縁部が受け口状を呈し、胴部の張る小形土器で、単節ＬＲ縄文の地文上に低平隆帯で弧線文を連結するモチーフを描いている。隆帯上には２列の円形刺突文を施し、隆帯脇に２列の押引刺突文を沿わせている。この弧線文は、サンショウウオ文からの変形と捉えられよう。

7、8は特異な形状の把手で、眼鏡状把手と蛇

体及び動物抽象文を併施文しているものと思われる。隆帯脇には角押文等を施文している。以上もおよそ藤内式の古段階辺りに位置付けられるものであろう。

第636図15～20は縄文原体の結節による綾繰文を垂下する土器群である。15は段状成形により文様帯を区分しているようにも見える。1段Lの結節回転文を2本垂下する。18～19は結節回転文のみ垂下する破片で、18は2段の原体、19、20は1段の原体を結節するものである。

16、17は一見すると綾繰文のようであるが、押引沈線を鋸歯状に施文することで同様の効果を表わしたものであると思われる。この2本の押引沈線文間には無節L縄文を縦位施文しており、明らかに帯状効果を狙っているものと思われる。同種の綾繰文や縄文を施文する土器は、第63号住居跡の炉体土器に埋設されていることから、およそ新道式の新しい段階の土器群であると思われる。

21～23は撚糸地文上に隆起線状の細い隆帯3本単位で渦巻文等のモチーフを描く土器群である。同種の手法は、第39号住居跡の炉体土器と共通することから、勝坂式終末期から加曽利EⅠ式への移行期に位置付けられるものと思われる、大木8a式系の土器である。

中期末から後期初頭の土器群（第636図24～39）

内面に凹凸ができる様な太く深い沈線でモチーフを描く中津式系の土器群である。24は緩い波状口縁で、胴部が括れる器形を呈し、波頂部に沈線の円形モチーフを施文して、胴部にカニ挟み状の磨消縄文モチーフを施文する。口縁部の円形モチーフ内には沈線の渦巻文を施文しており、円形区画文が渦巻文からの変形であることを示唆している。区画内にはRL縄文を充填施文する。器面には指頭整形痕が残り、ざらついている。25、26は同一個体の波頂部と波底部と思われ、口縁部に太く深い沈線で円形区画や縁帯文を区画しているようである。27～39は胴部破片で、沈線に枠取られた帯縄文で曲線文等を施文する。器形変化の大きい部分があり、内外面の整形に指頭圧痕が残るものが多い。沈線は器肉の半分くらいまで深く施文されており、裏面への突出も明瞭である。本遺跡では、この段階に対応する土器群が存在していない。搬入品としても珍しいが、加曽利EⅣ式もしくはEⅤ式に対応するものと思われる。

後期前葉の土器群（第636図40）

1点のみの出土であるが沈線の斜格子目文土器である。比較的鋭い沈線で描いており、堀之内2式辺りに比定されようか。

b）土製品

ミニチュア土器（第637図）

ミニチュア土器は、忠実に模倣したもの、デフォルメしたもの、手捏ね状のものに大きく分類される。

1、6～8は忠実に模倣しているもので、1は深鉢、7は壺形、8は浅鉢の小形版である。角押文を施文するなど勝坂式古～中段階の土器が多い。

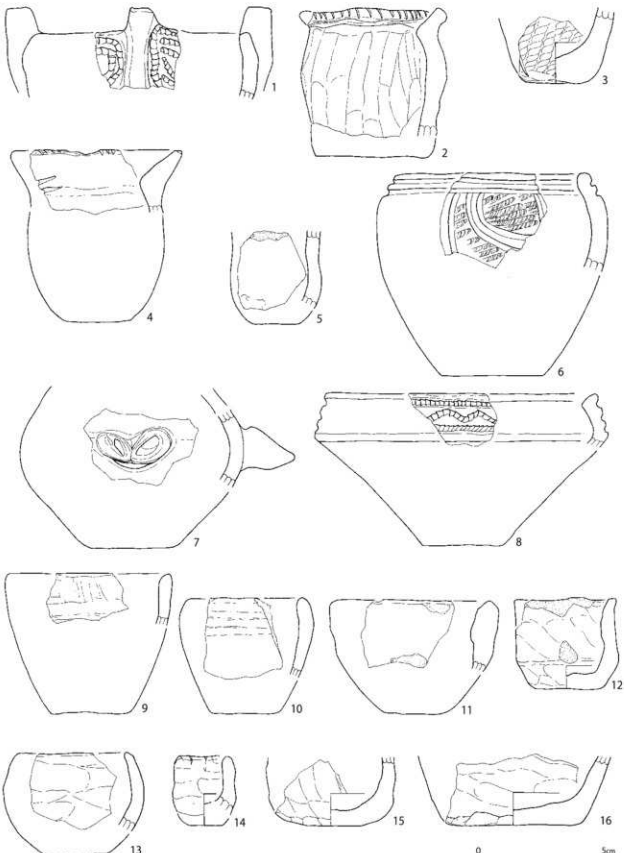
2、4は口縁部を強調してデフォルメしているものと思われ、勝坂式期に位置付けられるものであろう。

9～19は手捏ね状のもので、小形の鉢状のものが多いが、12～16は指頭の成形痕が明瞭である。

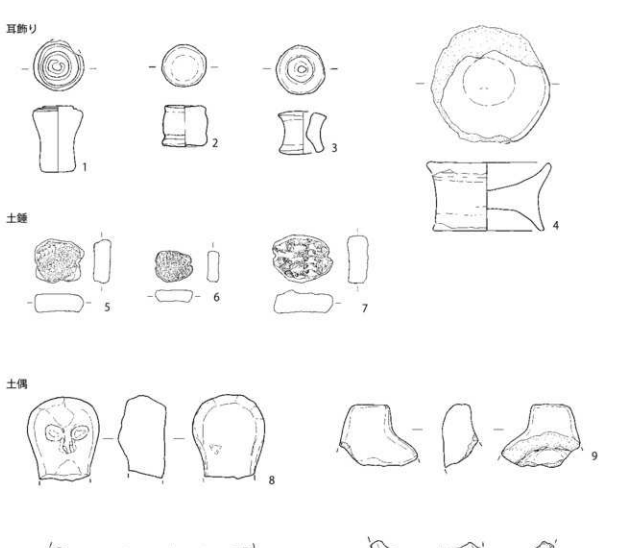
大半は勝坂式に比定されるものと思われるが、3は単節RL縄文上に沈線文を垂下することから、加曽利E式期のものと判断される。

耳飾り（第638図1～4）

1はキノコ形の軸の長い耳飾りで、片面のみに沈線の渦巻文の装飾を施す耳飾りである。2は胴部が樽形を呈し、両面に装飾を施さない無文の耳飾りである。3は鼓形の耳飾りで、中央部に穴が空く。4は大形の臼形の耳飾りで、縁辺部が欠損する。



第637図　グリッド出土遺物（3）



第638図　グリッド出土遺物（4）

土錘（第638図5～7）

5～7はいずれも土器片を利用し、長軸上に糸掛けの抉りを施した土錘である。比較的軽量で、数も少ない。

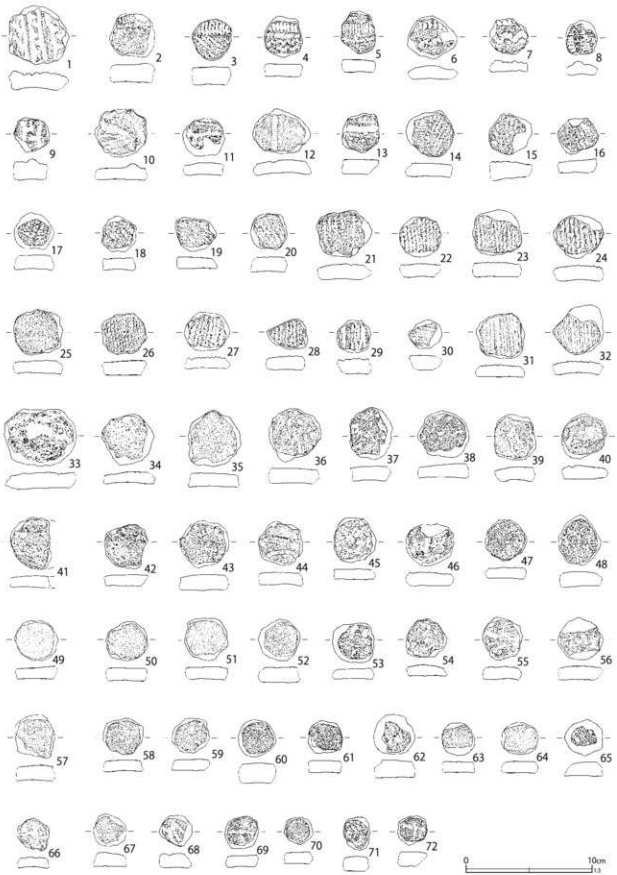
土偶（第638図8～11）

可能性があるものを含めて、グリッドからは8～11の4点が出土した。

1は頭部で、目鼻の表現が浅い刺突文等で行われている。9は頭部の可能性のあるもので、台形状の無文の頭部が剥落したものと思われる。10、11は脚部と思われるものであるが、時期の判断が難しい。あるいは土偶から外れる可能性もある。

土製円盤（第638図）

土器片を利用した土製円盤で、周縁を打ち欠いたままのものや、研磨しているものがある。形状や研磨の有無については一覧表で示した。無文部の破片を使用したものが約半数ほどある。



第639図　グリッド出土遺物（5）

c）石器

出土した石器の分類についてまとめる。グリッドから出土した石器に含まれないものもある。

個々の分類については、石器の計測表に表した。記入については、形状、残存、被熱（分類に無いものもある）の順で、Ⅰ①アなどと表記した。

（1）石鏃（第640図1～9）

形状

Ⅰ類　無茎
1　基部が平坦
2　基部に抉りが入る
3　基部が突出する
Ⅱ類　有茎
1　茎部が平坦
2　茎部に抉りが入る
3　基部が突出する
Ⅲ類　未成品
Ⅳ類　破損のため分類不明

残存

①　完形　②　破損

（2）石錐（第640図11）

形状

Ⅰ類　つまみを有する
Ⅱ類　つまみが無い
Ⅲ類　未成品
Ⅳ類　破損のため分類不明

残存

①　完形　②　破損

（3）スクレイパー（第640図10、12～15）

形状

Ⅰ類　つまみを有する
1　刃部が軸に直交して横長
2　刃部が軸に平行して縦長
Ⅱ類　つまみが無い
1　刃部が軸に直交して横長
2　刃部が軸に平行して縦長
Ⅲ類　未成品
Ⅳ類　破損のため分類不明

残存

①　完形　②　破損

（4）使用痕のある剥片

形状

Ⅰ類　横長剥片
Ⅱ類　縦長剥片

残存

①　完形　②　破損

（5）磨製石斧（第640図16～第642図33）

形状

Ⅰ類　乳棒状
Ⅱ類　定角状
Ⅲ類　局部磨製
Ⅳ類　未成品
Ⅴ類　破損のため分類不明

残存

①　完形　②　破損

被熱

ア　有　イ　無

（6）打製石斧（第642図33～第643図35）

形状

Ⅰ類　尖頭状
Ⅱ類　短冊形
1　側縁に抉りが入る
2　側縁に抉りが入らない
Ⅲ類　撥形
1　側縁に抉りが入る
2　側縁に抉りが入らない
Ⅳ類　分銅形
Ⅴ類　破損のため分類不明

残存

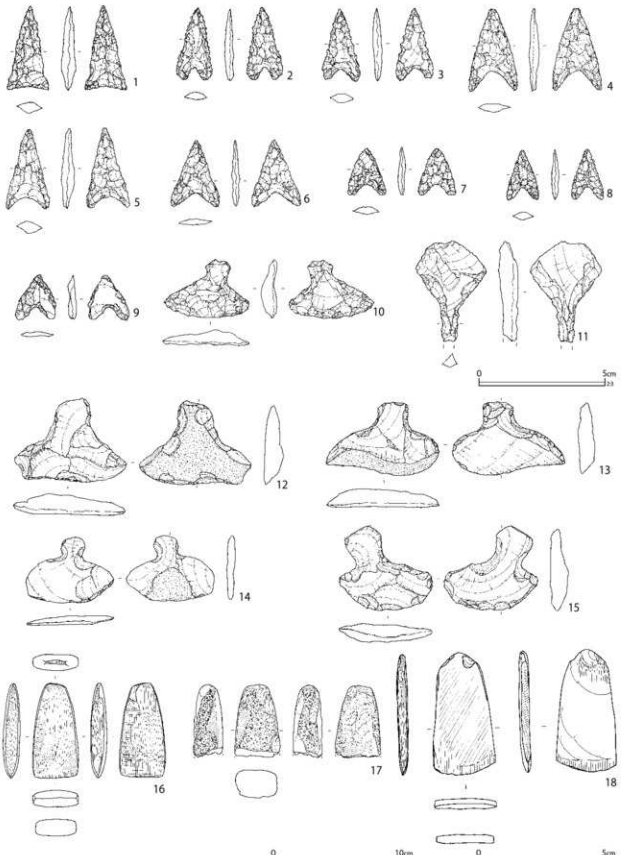
①　完形　②　破損

被熱

ア　有　イ　無

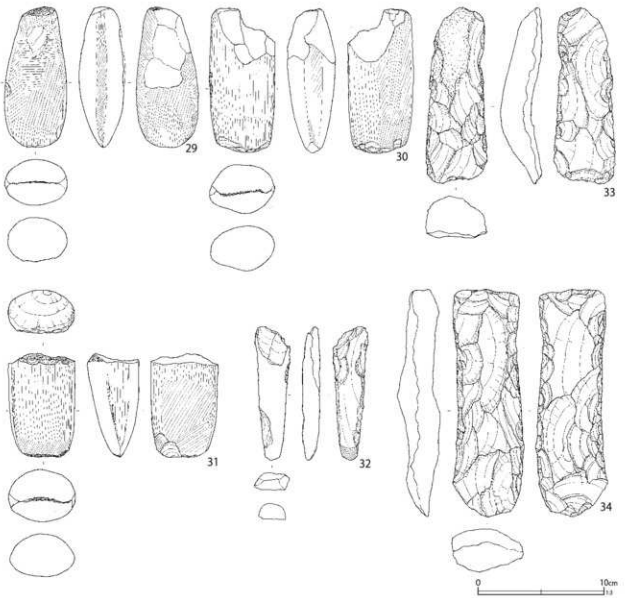
（7）礫器

残存



第640図　グリッド出土遺物（6）

第641図　グリッド出土遺物（7）



第642図　グリッド出土遺物（8）

①　完形　②　破損

（8）砥石

形状

Ⅰ類　無溝

Ⅱ類　有溝

Ⅲ類　破損のため分類不明

残存

①　完形　②　破損

被熱

ア　有　イ　無

（9）磨石類

磨面、凹部、敲打痕のいずれかを有するものを一括した。複数の使用痕を有するものについては、Ⅰ1－2－3①アなどと表記した。

形状

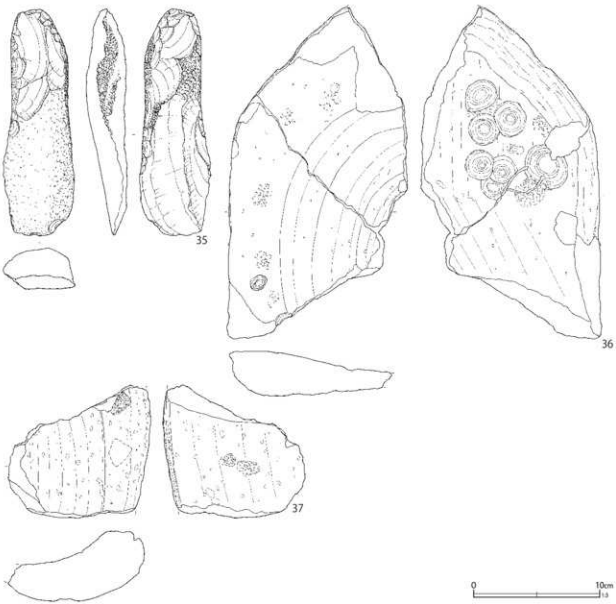
Ⅰ類　円形

1　磨面を有する

2　凹部を有する

3　敲打痕を有する

Ⅱ類　楕円形



第643図　グリッド出土遺物（9）

1　磨面を有する
2　凹部を有する
3　敲打痕を有する

Ⅲ類　棒状
1　磨面を有する
2　凹部を有する
3　敲打痕を有する

Ⅳ類　不定形
1　磨面を有する
2　凹部を有する
3　敲打痕を有する

Ⅴ類　破損のため分類不明

残存

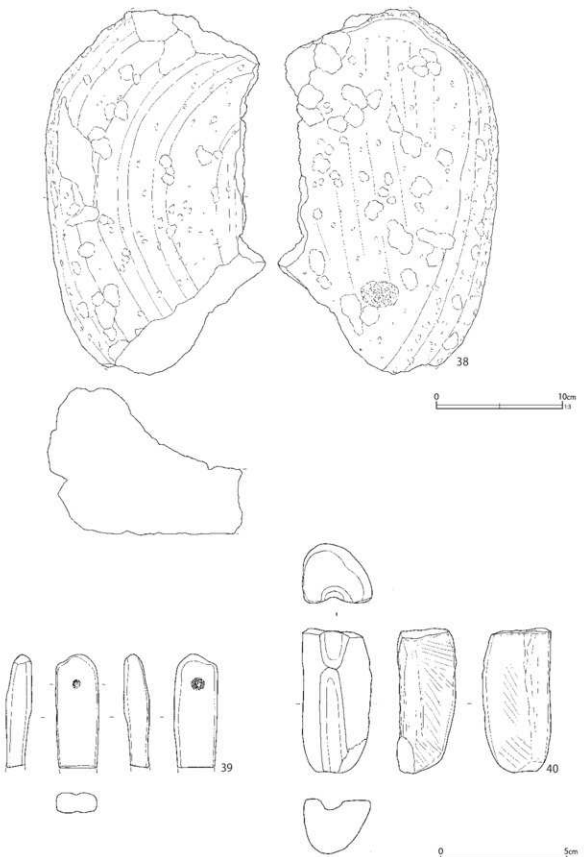
①　完形　②　破損

被熱

ア　有　イ　無

(10) 敲石

明確に敲石として使用されたものとした。分類内容は、磨石類に準拠する。



第644図　グリッド出土遺物（10）

(11) 石皿（第643図36～第644図38）

形状

Ⅰ類　円形

1　縁を付けるなど加工痕があるもの

2　凹部を有する

Ⅱ類　楕円形

1　縁を付けるなど加工痕があるもの

2　凹部を有する

Ⅲ類　不定形

1　縁を付けるなど加工痕があるもの

2　凹部を有する

Ⅳ類　破損のため分類不明

残存

①　完形　②　破損

第233表　芦苅場遺跡出土ミニチュア土器計測表

番号	出土位置	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	重さ(g)	備考
94-84	SJ4	2.7	1.3	－	7.0	
108-72	SJ5	4.1	1.6	－	16.0	
114-23	SJ6	1.7	1.5	7.0	7.0	
132-48	SJ7	(5.0)	(4.5)	(2.0)	7.0	
144-28	SJ10	(5.0)	(4.3)	(3.0)	11.0	
149-28	SJ11	－	(2.5)	2.6	23.0	
367-68	SJ22	(3.5)	(1.7)	－	2.0	
233-34	SJ32	5.0	4.0	2.6	49.0	
397-80	SJ52	5.7	7.0	5.2	108.0	
478-41	SJ60	－	(6.4)	2.8	45.0	
491-63	SJ62	(7.0)	(7.5)	(3.2)	35.0	
637-1	表採	(8.4)	3.2	－	13.0	
637-2	J-20	(5.6)	5.1	－	34.0	
637-3	S-12	－	3.0	(2.3)	18.0	
637-4	I-22	(6.7)	2.0	－	12.0	
637-5	R-18	－	3.1	2.0	6.0	
637-6	R-9	(7.8)	3.9	－	15.0	
637-7	H-16	横(9.0)	縦3.1	－	13.0	
637-8	H-16	10.8	2.1	－	5.0	
637-9	H-16	(6.4)	2.0	－	4.0	
637-10	P-10	(4.6)	3.1	－	7.0	
637-11	H-16	(1.6)	2.9	－	11.0	
637-12	試掘	(4.0)	3.6	(2.7)	25.0	
637-13	P-10	(4.4)	3.0	－	7.0	
637-14	Q-10	(2.0)	2.4	－	5.0	
637-15	L-19	－	2.7	4.0	12.0	
637-16	P-10・11	－	2.9	5.0	40.0	

被熱

ア　有　イ　無

(12) 石核

石核については、残存のみ分類を行った。

残存

①完形　②破損

（d）石製品（第644図39、40）

装飾品や石棒などの石製品については、残存と被熱のみ分類を行った。

残存

①完形　②破損

被熱

ア　有　イ　無

第234表　芦苅場遺跡出土耳飾り計測表

番号	出土位置	径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	備考
94-85	SJ4	2.4	1.9	8.0	
132-49	SJ7	2.2	1.7	10.0	
161-59	SJ12	3.4	1.8	12.0	
184-28	SJ16	(2.6)	1.7	8.0	
207-91	SJ25	1.6	1.6	4.0	
207-92	SJ25	1.7	1.6	5.0	
226-36	SJ31	2.6	2.0	9.0	
367-69	SJ22	1.5	1.3	3.0	
416-84	SJ53	1.4	1.1	2.0	
544-53	SJ68	2.4	1.5	6.0	
638-1	SE1	20.0	26.0	8.0	
638-2	P-13	17.0	16.0	6.0	
638-3	K-20	19.0	17.0	5.0	
638-4	P-9	(47.0)	27.0	39.0	

第235表　芦苅場遺跡出土土錘計測表

番号	出土位置	縦(cm)	横(cm)	重さ(g)	備考
638-5	M-11	3.9	3.5	22.0	
638-6	N-11	2.9	2.5	8.0	
638-7	表採	4.8	3.8	33.0	

第236表　芦苅場遺跡出土土偶計測表

番号	出土位置	縦(cm)	横(cm)	重さ(g)	備考
149-29	SJ11	3.3	1.3	6.0	
178-68	SJ15	6.0	4.2	33.0	
440-12	SJ57	6.2	7.3	71.0	
638-08	Q-17	3.2	2.9	18.0	
638-09	Q-17	2.5	2.5	8.0	
638-10	Q-13	2.5	2.0	13.0	
638-11	表採	3.0	1.6	9.0	

第237表　芦苅場遺跡出土土製円盤計測表

番号	出土位置	長径(cm)	短径(cm)	重さ(g)	研磨
94-86	SJ4	3.6	3.5	19.0	
94-87	SJ4	3.9	3.8	11.0	
94-88	SJ4	3.6	3.6	20.0	
94-89	SJ4	3.0	2.9	11.0	
94-90	SJ4	3.3	3.1	15.0	
108-73	SJ5	3.5	3.1	15.0	
108-74	SJ5	3.5	3.4	16.0	○
108-75	SJ5	3.3	3.2	13.0	○
108-76	SJ5	3.7	3.2	19.0	○
108-77	SJ5	4.1	(2.9)	13.0	
108-78	SJ5	4.2	(2.1)	10.0	○
114-24	SJ6	3.3	3.1	13.0	○
132-50	SJ7	4.2	4.0	20.0	
132-51	SJ7	4.2	4.0	18.0	
132-52	SJ7	2.8	2.5	9.0	
132-53	SJ7	2.1	2.1	4.0	
132-63	SJ8	3.1	3.0	13.0	
132-64	SJ8	3.2	2.9	10.0	○
144-29	SJ10	3.8	3.7	18.0	○
149-30	SJ11	4.6	4.5	28.0	○
149-31	SJ11	3.2	2.9	14.0	○
149-32	SJ11	2.5	2.4	4.0	○
161-60	SJ12	3.1	3.0	8.0	○
161-61	SJ12	3.1	3.0	11.0	
178-69	SJ15	6.0	5.8	57.0	
178-70	SJ15	4.8	4.6	47.0	
178-71	SJ15	4.0	4.0	28.0	
178-72	SJ15	4.4	4.5	26.0	○
178-73	SJ15	3.6	3.8	17.0	
178-74	SJ15	4.7	3.8	21.0	
178-75	SJ15	3.9	3.7	15.0	
120-57	SJ20	4.3	4.1	22.0	
120-58	SJ20	3.6	3.3	14.0	○
120-59	SJ20	2.8	2.3	8.0	○
120-60	SJ20	4.0	2.9	10.0	○
367-70	SJ22	4.6	4.9	31.0	
367-71	SJ22	3.2	3.1	14.0	
367-72	SJ22	3.6	3.4	14.0	○
367-73	SJ22	3.0	3.0	11.0	
367-74	SJ22	2.6	2.4	8.0	○
207-93	SJ25	3.4	(2.3)	12.0	○
207-94	SJ25	3.1	3.0	10.0	○
207-95	SJ25	3.4	3.2	12.0	○
207-96	SJ25	2.7	2.5	9.0	○
207-97	SJ25	3.2	2.9	13.0	○
207-98	SJ25	3.1	2.7	11.0	
207-99	SJ25	2.7	2.6	8.0	
207-100	SJ25	2.7	2.4	8.0	○
207-101	SJ25	3.2	2.7	14.0	
212-29	SJ27	4.4	4.0	26.0	
212-30	SJ27	3.3	3.1	13.0	○
217-58	SJ29	2.7	2.6	9.0	○
217-59	SJ29	2.2	2.2	5.0	○
233-35	SJ32	3.0	2.8	11.0	
233-36	SJ32	3.9	3.6	21.0	○
248-68	SJ33	4.8	4.8	27.0	○
270-44	SJ37	2.6	2.4	6.0	○
274-34	SJ38	3.2	3.1	12.0	
274-35	SJ38	3.1	(1.6)	7.0	
288-105	SJ39	4.9	4.8		
288-106	SJ39	4.9	4.6	32.0	○
288-107	SJ39	4.2	4.0	20.0	
288-108	SJ39	4.1	3.6	24.0	○
288-109	SJ39	3.9	3.4	16.0	
288-110	SJ39	3.1	3.1	11.0	
288-111	SJ39	4.0	3.7	18.0	
288-112	SJ39	3.6	3.4	11.0	
288-113	SJ39	3.7	3.6	15.0	
309-84	SJ42	3.3	3.3	13.0	○
309-85	SJ42	2.6	2.5	7.0	○
321-86	SJ44	3.7	3.7	18.0	○
321-87	SJ44	3.2	2.8	15.0	○
321-88	SJ44	2.8	2.7	9.0	
321-89	SJ44	2.6	2.3	6.0	
338-109	SJ46	4.4	4.0	20.0	
338-110	SJ46	4.0	4.0	14.0	○
338-111	SJ46	2.9	2.8	7.0	
338-112	SJ46	2.5	2.4	8.0	○
397-81	SJ52	3.8	3.5	16.0	○
397-82	SJ52	3.5	3.3	18.0	○
397-83	SJ52	2.7	2.6	8.0	○
397-84	SJ52	2.2	2.2	6.0	
397-85	SJ52	1.8	1.5	3.0	○
416-85	SJ53	3.3	3.2	13.0	
416-86	SJ53	2.9	2.8	12.0	○
416-87	SJ53	2.6	2.5	9.0	
416-88	SJ53	2.3	2.0	5.0	○
423-45	SJ54	3.9	3.8	23.0	○
423-46	SJ54	3.9	2.9	10.0	
423-47	SJ54	2.7	2.5	6.0	○
427-19	SJ55	3.6	3.2	14.0	○
462-105	SJ58	3.3	3.2	10.0	
462-106	SJ58	3.0	2.8	10.0	○
462-107	SJ58	2.8	2.6	10.0	
462-108	SJ58	2.4	2.4	6.0	
478-42	SJ60	3.1	3.0	14.0	
478-43	SJ60	3.1	2.8	7.0	○
478-44	SJ60	3.5	2.8	15.0	
484-60	SJ61	3.9	3.7	17.0	○
484-61	SJ61	4.0	3.7	20.0	○

番号	出土位置	長径(cm)	短径(cm)	重さ(g)	研磨
484-62	SJ61	3.8	3.6	22.0	○
484-63	SJ61	3.0	2.9	12.0	○
484-64	SJ61	2.8	2.3	8.0	○
484-65	SJ61	3.6	3.4	12.0	
484-66	SJ61	3.0	2.9	12.0	○
484-67	SJ61	3.0	3.0	12.0	
484-68	SJ61	2.7	2.5	10.0	○
484-69	SJ61	2.7	2.2	7.0	
484-70	SJ61	2.8	2.6	8.0	○
484-71	SJ61	2.7	2.3	7.0	
491-64	SJ62	3.8	3.3	14.0	○
502-103	SJ63	4.0	3.8	16.0	
502-104	SJ63	3.5	3.4	14.0	○
502-105	SJ63	3.1	3.0	12.0	○
502-106	SJ63	3.8	3.2	12.0	
502-107	SJ63	2.8	2.7	8.0	○
502-108	SJ63	3.0	2.6	9.0	○
502-109	SJ63	3.5	2.6	9.0	
502-110	SJ63	2.7	2.4	6.0	
502-111	SJ63	2.1	1.9	5.0	○
530-57	SJ67	3.3	3.0	15.0	○
554-72	SJ77	3.6	3.6	15.0	
554-73	SJ77	4.3	3.6	18.0	
554-74	SJ77	3.1	3.1	8.0	
554-75	SJ77	3.2	3.1	10.0	
554-76	SJ77	3.0	2.9	11.0	
554-77	SJ77	3.0	2.8	10.0	
564-30	SJ80	3.2	3.1	16.0	
564-31	SJ80	3.5	3.2	12.0	
639-1	試掘	4.9	4.8	32.0	
639-2	J-19	3.6	3.3	18.0	
639-3	G-17	3.2	3.1	16.0	○
639-4	H-17	3.2	2.9	10.0	○
639-5	P-10	3.4	2.7	10.0	○
639-6	I-16	3.9	3.4	13.0	○
639-7	H-17	3.0	2.8	8.0	
639-8	I-16	2.7	2.5	7.0	○
639-9	P-11	2.9	2.6	11.0	
639-10	表採	4.2	3.8	19.0	
639-11	M-11	3.2	2.9	11.0	
639-12	P-10	4.6	3.5	18.0	
639-13	G-18	3.1	2.9	12.0	
639-14	H-17	3.8	3.4	16.0	○
639-15	P-10	3.6	3.2	11.0	○
639-16	H-15	3.2	2.8	9.0	
639-17	I-16	3.2	2.9	11.0	
639-18	P-10	2.8	2.6	8.0	
639-19	P-10	3.2	2.6	7.0	○
639-20	試掘	3.2	2.9	12.0	○
639-21	P-10	4.3	3.7	20.0	
639-22	Q-9	3.2	3.2	13.0	○

番号	出土位置	長径(cm)	短径(cm)	重さ(g)	研磨
639-23	O-13	4.1	3.9	18.0	○
639-24	P-10	4.0	3.4	15.0	
639-25	P-10	3.9	3.5	16.0	○
639-26	P-10	3.5	3.2	15.0	
639-27	I-23	3.6	3.1	11.0	○
639-28	P-9	3.3	2.5	8.0	
639-29	K-20	2.7	2.5	9.0	○
639-30	SD1	2.5	2.1	7.0	○
639-31	R-11	3.9	3.8	16.0	○
639-32	Q-12	4.1	3.5	16.0	
639-33	K-20	5.7	4.5	35.0	
639-34	Q-11	4.1	3.9	14.0	○
639-35	P-10	4.4	4.1	19.0	
639-36	P-11	4.3	4.0	20.0	
639-37	I-17	4.1	3.2	18.0	
639-38	I-17	4.1	3.6	18.0	
639-39	Q-13	3.6	3.2	15.0	
639-40	Q-14	3.8	3.2	15.0	手捏
639-41	I-17	4.0	(3.1)	14.0	
639-42	I-16	3.6	3.2	13.0	
639-43	P-8	3.9	3.6	19.0	
639-44	I-17	3.5	3.4	14.0	○
639-45	H-16	3.5	3.3	11.0	
639-46	I-22	3.8	3.2	15.0	○
639-47	I-17	3.3	3.2	10.0	○
639-48	H-20	3.9	3.3	13.0	
639-49	表採	3.4	3.1	13.0	○
639-50	試掘	3.3	3.1	12.0	○
639-51	試掘	3.7	3.5	12.0	
639-52	P-10	3.3	3.3	14.0	○
639-53	H-17	3.2	3.1	10.0	○
639-54	P-10	3.2	3.0	8.0	
639-55	P-10	3.4	3.2	11.0	
639-56	表採	3.6	3.4	12.0	
639-57	試掘	3.6	3.3	15.0	
639-58	P-10	3.2	2.9	10.0	
639-59	P-12	3.0	2.6	9.0	
639-60	N-10	3.0	2.9	15.0	○
639-61	H-15	2.7	2.5	8.0	
639-62	表採	3.3	3.2	15.0	○
639-63	試掘	2.5	2.5	7.0	
639-64	O-9	2.9	2.0	8.0	○
639-65	H-17	3.0	2.8	9.0	
639-66	表採	2.7	2.2	6.0	
639-67	表採	2.7	2.6	8.0	○
639-68	SD1	2.6	2.5	7.0	○
639-69	P-10	2.8	2.6	8.0	○
639-70	P-10	2.2	2.2	5.0	
639-71	H-14	2.6	2.1	5.0	
639-72	P-10	2.3	2.3	6.0	○

第238表　向原遺跡出土耳飾り計測表

番号	出土位置	径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	備考
30-43	SJ3	2.3	1.5	6.0	

第239表　向原遺跡出土土製円盤計測表

番号	出土位置	長径(cm)	短径(cm)	重さ(g)	研磨
19-20	SJ1	3.3	3.2	12.0	○
22-22	SJ2	6.9	6.1	77.8	○
30-45	SJ3	3.1	3.0	12.0	○
30-44	SJ3	3.6	3.6	14.0	

第240表　芦苅場遺跡グリッド出土石器観察表（第640～644図）

図番号	出土位置	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
640-1	H-16	石鏃	I 2①	チャート	3.3	1.6	0.6	1.8	
2	R-13	石鏃	I 2①	チャート	2.9	1.4	0.4	1.2	
3	J-20	石鏃	I 2①	頁岩	2.9	1.5	0.4	1.2	
4	M-11	石鏃	I 2①	チャート	3.3	1.9	0.4	1.9	
5	H-19	石鏃	I 2①	チャート	3.1	1.7	0.5	1.8	
6	E-19	石鏃	I 2①	チャート	2.6	1.9	0.3	0.9	
7	I-17	石鏃	I 2①	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.6	
8	K-22	石鏃	I 2①	黒曜石	2.0	1.3	0.3	0.5	
9	G-20	石鏃	I 2①	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.5	
10	L-21	石匙	I 1①	頁岩	2.3	3.4	0.6	3.2	
11	P-10	石錐	I ②	チャート	[4.0]	2.8	0.8	6.8	
12	O-11	スクレイパー	I 1①イ	ホルンフェルス	6.7	8.9	1.6	79.2	
13	I-18	スクレイパー	I 1①イ	黒色頁岩	5.9	8.9	1.5	64.5	
14	H-22	スクレイパー	I 1①イ	ホルンフェルス	5.2	6.9	0.7	22.6	
15	シ-3	スクレイパー	I 1②ア	ホルンフェルス	[6.7]	7.4	1.5	57.5	
16	I-18	磨製石斧	II①イ	トウセン石岩	7.5	3.6	1.3	60.0	
17	Q-13	磨製石斧	II②イ	緑色岩	[5.7]	3.6	2.3	83.2	
18	Q-10	磨製石斧	II①イ	シルト岩	4.8	2.5	0.4	8.8	
641-19	T-8	磨製石斧	I ②ア	安山岩	[10.2]	4.9	3.9	211.9	
20	H-19	磨製石斧	I ②イ	トウセン石岩	[7.7]	[3.8]	[2.9]	92.4	
21	K-20	磨製石斧	I ②イ	砂岩	[12.8]	[5.7]	[4.5]	448.5	
22	P-10	磨製石斧	I ②イ	砂岩	[6.4]	[4.3]	3.6	128.8	
23	Q-11	磨製石斧	I ②イ	砂岩	[6.9]	[3.9]	[3.7]	122.2	
24	H-19	磨製石斧	I ②ア	砂岩	[4.7]	[4.1]	[2.9]	62.8	
25	J-19	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	[14.6]	5.6	4.0	490.4	
26	L-20	磨製石斧	I ①イ	緑色岩	13.0	5.4	3.5	372.3	
27	R-9	磨製石斧	I ②イ	砂岩	[7.9]	[5.4]	[3.6]	199.9	
28	O-13	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	[9.5]	5.0	3.7	151.5	
642-29	シ-3	磨製石斧	I ①ア	安山岩	11.1	4.9	3.6	267.6	被熱剥落
30	I-17	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	11.4	5.2	3.9	341.9	
31	K-20	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	[8.3]	[5.3]	[4.1]	246.2	
32	P-12	磨製石斧	III②イ	緑色岩	[10.6]	2.8	1.4	49.4	
33	K-18	打製石斧	II 2①イ	砂岩	14.0	4.8	3.3	195.1	
34	L-11	打製石斧	II 2①イ	ホルンフェルス	18.0	5.7	3.4	368.8	
643-35	K-19	打製石斧	II 2①イ	砂岩	18.0	5.7	3.2	344.5	
36	G-19	石皿	II 2②	緑泥片岩	[26.4]	[14.4]	4.8	1601.0	
37	H-20	石皿	II 2②ア	安山岩	[10.6]	[11.3]	6.1	624.8	表裏面全部赤色・黒色化
644-38	J-19	石皿	II 2②ア	安山岩	[29.1]	[17.5]	12.0	6500.0	表裏面全部黒色化
39	P-10	垂飾	②イ	砂岩	[4.5]	1.7	1.0	12.3	
40	K-20	垂飾	②イ	緑色凝灰岩	5.8	2.8	2.4	17.5	

3　中・近世の遺構と遺物

（1）地下式坑

芦苅場遺跡は南小畔川右岸の台地上に立地するが、飯能市域においても関東ローム層が厚く堆積する地域に立地している。そのため、市域ではあまり検出例のない中世の貯蔵施設と思われる地下式坑が構築されている。地下式坑は調査区の南東側で北東方向へ延びる市道沿いの、Ⅱ区南西端から向原A遺跡の南東側にかけての地点にのみ点在している。今回の調査では地下式坑３基が発見されたが、隣接する向原A遺跡でも３基検出されている。なお、地下式坑も土壙としての統一番号で調査を行っているため、報告は順不同となる。

a）Ⅱ区

第11号土壙（第645図、第647図1～第648図10）

Ｔ－11区に位置する。平面形は不整形で、規模は長径3.45m、短径3.30m、深さ2.00mである。南東側に第12号土壙が存在する。入り口部の竪坑は地下室の南東側に位置し、両壁が崩れており、大きく３段の階段状を呈する。調査時点では不整形の掘り込みのみが確認された。

地下室は南北方向に細長い長方形状の楕円形を呈するもので、北側の奥壁部は丸く立ち上がる。覆土は崩落のロームをブロック状に含む土が互層に堆積しており、覆土下層から瓦質土器や陶器、茶臼などが出土した。

遺物は第647図１～第648図10が出土した。

第647図１～３までは石製品である。１は粘板岩製の砥石である。砥面に刃ならし状の傷が認められる。２、３は茶臼の下臼である。２は砂岩製で、上面に刻まれた目は８分画と思われる。上面の径は28.7cm、受皿端部での径（最大径）は39.4cmに復元される。下面の接地する部分は調整の擦痕がみられ平坦だが、中央部は大きく抉られて、先端の尖った工具による「ツキ」痕跡が認められる。３は安山岩製で、上面の直径は20.9cmに復元される。受皿の欠損により最大径は不明だが、36cm前後と推定される。上面に刻まれた目は８分画と思われる。下面の整形痕は２と共通する。

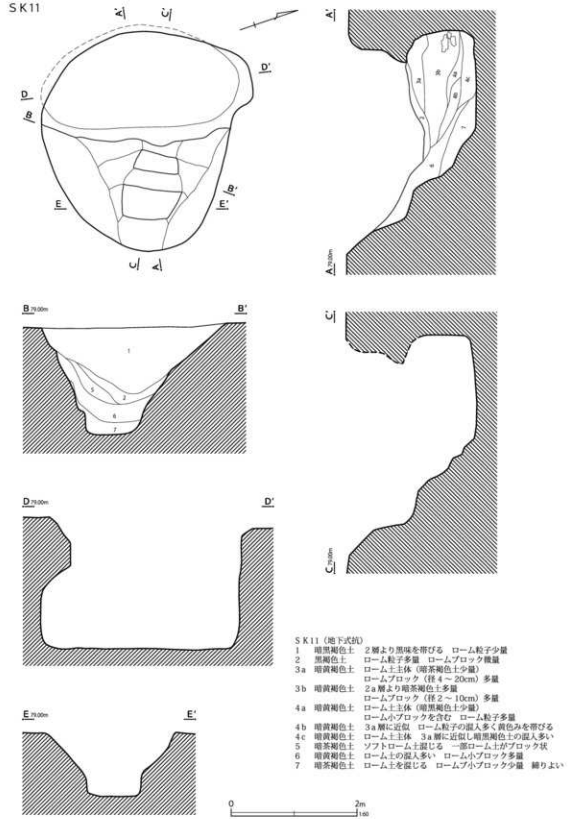
第648図４～９は瓦質土器である。粉っぽい軟質の胎土に、長石・石英が多く含まれるものが主体である。４、５は内耳鍋である。口縁部は短く屈曲して、口唇部が玉縁状に丸まる。５の体部外面下位にはミガキ状のヘラナデが縦方向に施される。６、７は鉢である。６は直接接点の無い口縁部と体部破片を同一個体として図示した。口唇部平坦面は若干摩耗しているが、内側に短く折り返されている。７は底部から体部の破片で底面に静止糸切とみられる糸切痕が残る。８は釜の体部破片と考えられる。外面にはミガキに近い丁寧なヘラナデが施される。９は全体の形状に不安が残るが甕類として図化した。外面上位は丁寧な横～斜方向のナデ、下位は縦方向のナデが施される。内面は剥離して調整は観察できない。以上の瓦質土器は15～16世紀の所産である。10は陶器の所謂「腰錆碗」である。18世紀前葉の所産であり天井崩落の時期を示唆する遺物である。

第12号土壙（第646図、第648図11、12）

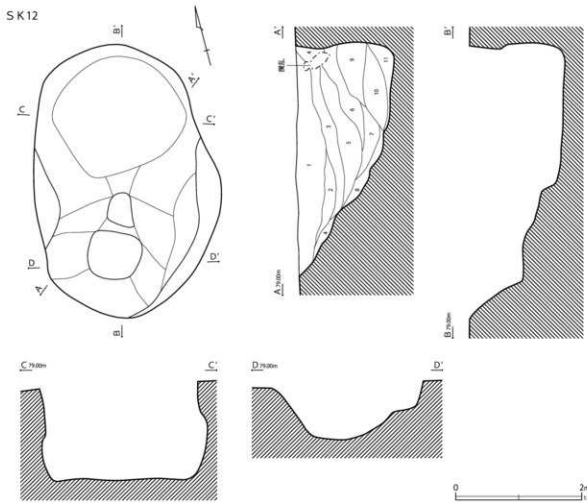
Ｕ－10区に位置する。北東側に第11号土壙、南西側に少し離れて第10号土壙が存在する。平面形は楕円形で、規模は長径4.32m、短径2.98m、深さ1.55mである。入り口部の竪坑は地下室の南西側に位置し、１段目が深く、２、３段目が低い階段状を呈する。調査時点では不整形の掘り込みとして調査したが、約半分程の天井部分が残っているため、崩落を防ぎながら調査を進めた。

遺物は第648図11、12が出土した。

第648図11、12はいずれも常滑焼の甕である。11は肩部以下の破片で上位に焼成時の降灰が若干認められる。12は胴部の破片である。いずれも中世の所産である。


SK11
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
A 79.00m
B 79.00m
C 79.00m
D 79.00m
E 79.00m
SK11（地下式坑）
1　暗黒褐色土　2層より黒味を帯びる　ローム粒子少量
2　黒褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック微量
3a　暗黄褐色土　ローム土主体（暗茶褐色土少量）
ロームブロック（径4～20cm）多量
3b　暗黄褐色土　2a層より暗茶褐色土多量
ロームブロック（径2～10cm）多量
4a　暗黄褐色土　ローム土主体（暗黒褐色土少量）
ローム小ブロックを含む　ローム粒子多量
4b　暗黄褐色土　3a層に近似　ローム粒子の混入多く黄色みを帯びる
4c　暗黄褐色土　ローム土主体　3a層に近似し暗黒褐色土の混入多い
5　暗茶褐色土　ソフトローム土混じる　一部ローム土がブロック状
6　暗黄褐色土　ローム土の混入多い　ローム小ブロック多量
7　暗茶褐色土　ローム土を混じる　ローム小ブロック少量　締りよい
0
2m
1:60

第645図　地下式坑（1）



SK12（地下式坑）
1　暗黒褐色土　均質な層　ローム粒子少量　しまり非常に良い
2　暗黒褐色土　ソフトローム土混じる　ローム粒子微量　しまり非常に良い
3　暗黒褐色土　ローム粒子・ホプロック多量　炭化粒子微量
4　暗黄褐色土　ローム土主体（黒褐色土少量）
5　暗黒褐色土　3層に近似する　ソフトローム土多く黄色みを帯びる
6　暗黄褐色土　ローム土主体（暗黒褐色土少量）　炭化粒子微量
7　暗黄褐色土　6層に近似する　ローム土の割合が多く黄色みを帯びる
8　暗黄褐色土　7・8層より黒みを帯びる　ローム土主体
9　黄褐色土　ローム土主体　しまりやや良い
10　暗黄褐色土　ローム土主体　9層より黒味を帯びる　しまり悪い
11　暗黄褐色土　10層に近似する　やや黒みを帯びる

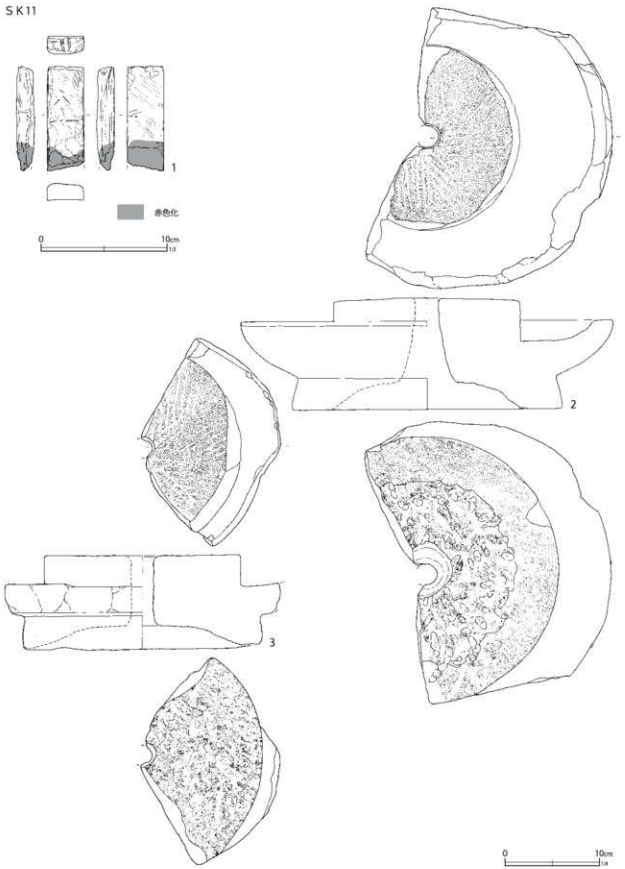
第646図　地下式坑（2）

第13号土壙（第649図、第650図１～第651図19）

Ｓ・Ｔ－９区に位置する。他の地下式坑とは離れた位置に存在する。当初竪坑付近でごみを焼却した跡が見つかり、埋没した竪坑でごみを燃やしたものと思われた。残滓を処理するうちに、竪坑が明らかになり、地下式室の存在が明らかとなった。平面は不整形で、規模は長径3.93m、短径2.90m、深さ1.90mである。竪坑は南側に付き、地下室は南北に細長い長方形を呈するものと思われる。また、西側の壁に階段状の抉れ部が存在したことから、入り口部の竪坑を付け直した可能性がある。

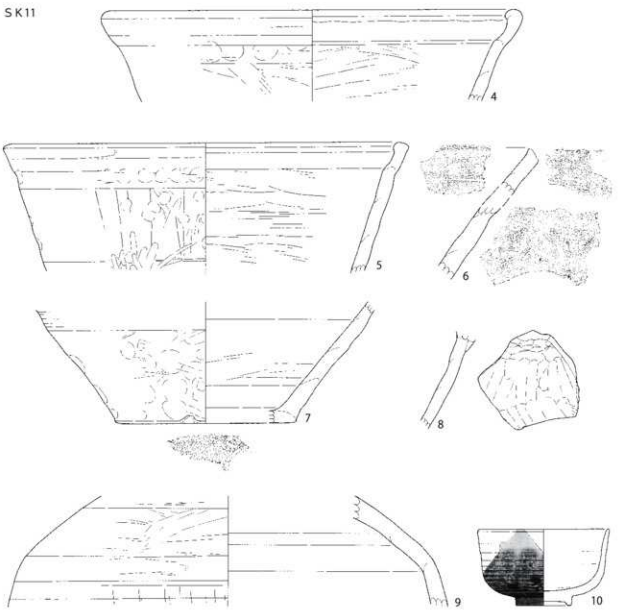
遺物は第650図１～第651図19が出土した。

第650図１～３までは瓦質土器である。１は内耳鍋で、胎土は粗くザラザラした印象のものである。片岩細片や、径10㎜弱の長石・石英が含まれる。外面には縦方向の弱い稜が見られ、ヘラナデが施されているようである。その後、指頭による圧痕・ナデが加えられている。内面には横方向に強いナデが施される。２は釜の口縁部から胴部上位の破片である。胎土は１と共通し、径５㎜強の石英角礫が含まれる。外面は上位に指頭圧痕が加えられた後、丁寧なナデが施される。内面に

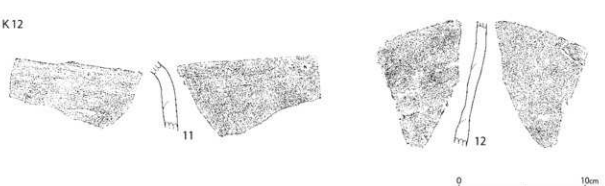


第647図　地下式坑出土遺物（1）

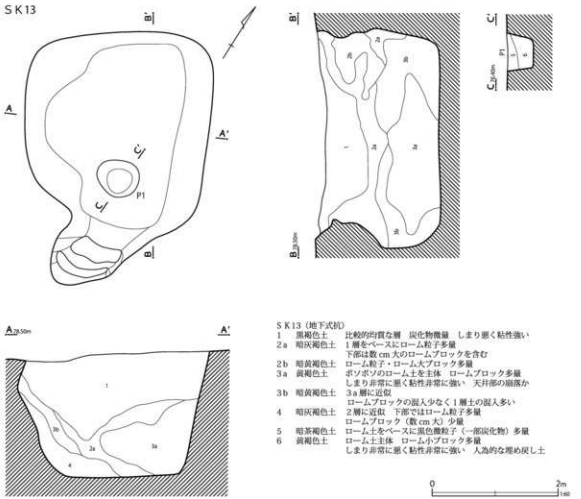
SK11



SK12



第648図　地下式坑出土遺物（2）



第649図　地下式坑（3）

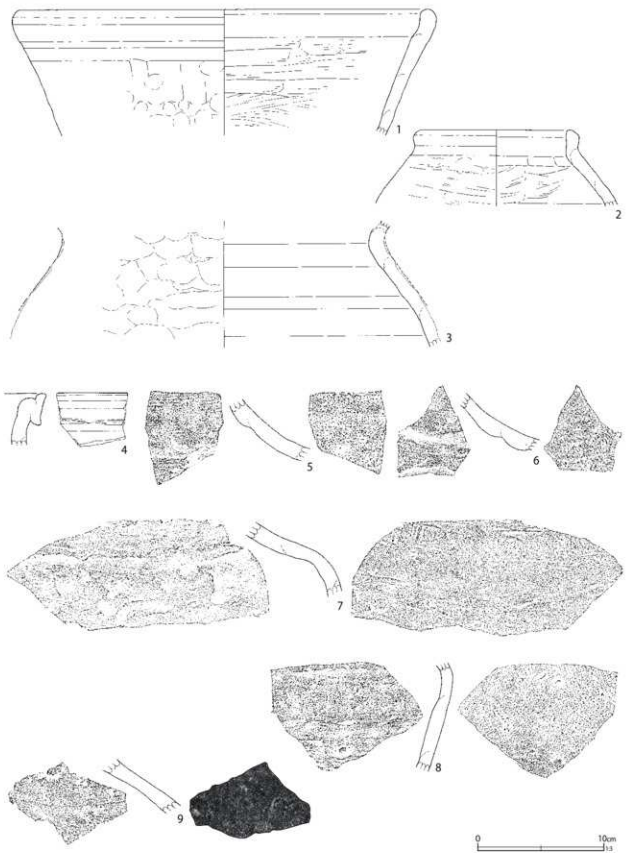
は曲線状の強いナデが認められ、ヘラナデの痕跡と考えられる。3は甕である。全体的に酸化炎焼成ぎみで橙色味を帯びている。胎土には径10㎜弱の長石・石英が多量に含まれる。外面は器面全体が剥落しており、調整等は観察できない。内面には強いヨコナデが施される。

4～16までは陶器で、全て中世の常滑焼甕の破片である。4は唯一、口縁部が残るもので、典型的なN字状口縁のものである。常滑編年の6b～7型式（13世紀末～14世紀前葉）に相当する。5～7、9は肩部の破片であり、7には押印文が認められる。5、6、9には窯内での降灰の痕跡があり、特に9では全面が自然釉状になっている。8は肩部直下の破片で、外面には縦方向のヘラナデ痕跡が明瞭である。10～16は胴部の破片で、いずれも外面は縦方向のヘラナデで調整される。

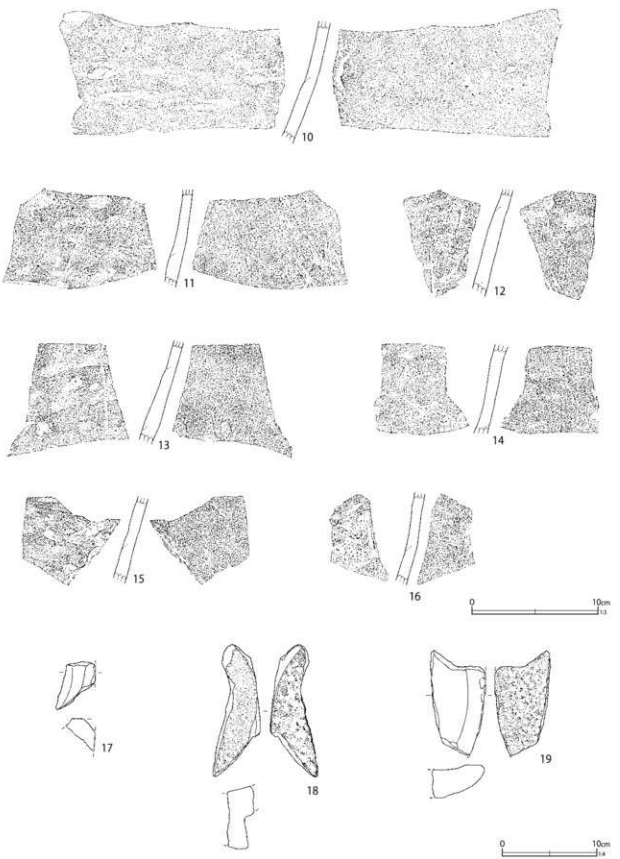
17～19は石臼類の破片である。17は粉挽き臼の上臼で、煤の付着が認められる。石材は安山岩である。18、19は茶臼の下臼である。18は安山岩製で脚部から受皿部の破片である。受皿部内面には調整痕である擦痕が明瞭に残り、外面には工具による「ツキ」状の加工痕が残る。19は砂岩製で、受皿の縁部の破片である。外面には工具による「ツキ」状の加工痕が明瞭である。

以上のように本跡の遺物には常滑焼の破片が多く含まれるが、瓦質土器と茶臼が含まれる様相は第11号土坑と共通しており、ほぼ同時期の所産と想定される。

SK13



第650図　地下式坑出土遺物（3）



第651図　地下式坑出土遺物（4）

（2）土壙

中・近世の土壙は、Ⅰ区７基、Ⅱ区23基、Ⅲ区７基の合計37基である。

a）Ⅰ区

第１号土壙（第652図）

Ｕ－６区に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長径2.38m、短径1.09m、深さ0.22mである。

第２号土壙（第652図）

Ｕ－７区に位置する。第２号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は長楕円形で、規模は長径2.10m、短径0.88m、深さ0.15mである。

第３号土壙（第652図）

Ｔ・Ｕ－４区に位置する。平面形は方形で、規模は長径1.33m、短径0.95m、深さ0.20mである。

第４号土壙（第652図）

Ｔ－６・７区に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長径2.40m、短径1.09m、深さ0.11mである。

第５号土壙（第652図）

Ｓ－５区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.85m、短径0.80m、深さ0.50mである。

第６号土壙（第652図）

Ｔ－６区に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長径2.58m、短径1.26m、深さ0.23mである。

第７号土壙（第652図）

Ｔ－５区に位置する。第１号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。壙底の北壁中央部付近にピットが存在するが、第１号住居跡の柱穴である。平面形は隅丸長方形で、規模は長径3.83m、短径2.05m、深さ0.53mである。

b）Ⅱ区

第８号土壙（第653図）

Ｕ－10区に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長径2.16m、短径（1.35）m、深さ0.33mである。

第９号土壙（第653図、第657図１～11）

Ｖ－９・10区に位置する。遺構の約半分が調査区域外にあり、全体形は不明であるが、平面形はほぼ円形を呈するものと思われ、規模は長径（3.03）m、短径4.65m、深さ0.82mである。

遺物は第657図１～11が出土した。１～５は瓦質土器の鉢・内耳鍋・釜である。胎土は粉っぽく軟質のものが多いが、５はやや硬質である。６、７は器形が想定できないもので同一個体の可能性もある。土師質土器としたが、粉っぽい胎土は前出の瓦質土器と共通する。薄手の釜の可能性がある。８～11は陶器の常滑焼で、８が片口鉢、他は甕である。

第10号土壙（第653図）

Ｕ－８区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径4.05m、短径3.11m、深さ0.21mである。

第14号土壙（第653図）

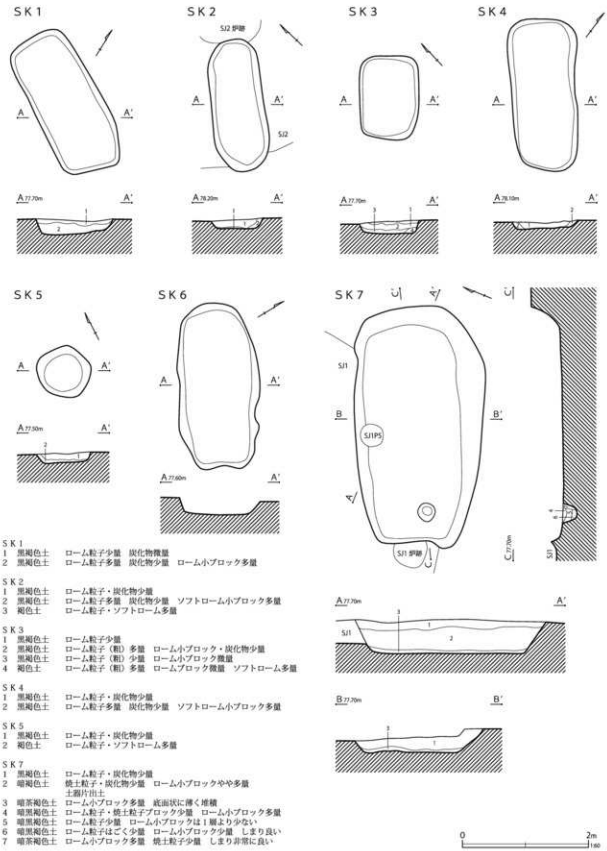
Ｓ－10区に位置する。第７号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は円形で、規模は直径0.96m、深さ0.65mである。

第15号土壙（第654図）

Ｓ－13区に位置する。第５号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は方形で、規模は長径0.94m、短径0.80m、深さ（0.34）mである。

第17号土壙（第654図）

Ｒ－９区に位置する。第９、14号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は隅丸方形で、規模は長径1.07m、短径0.72m、深さ0.30mである。壙底から大形礫２点が据えられていた



SK1
1 黒褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
2 黒褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック多量

SK2
1 黒褐色土　ローム粒子・炭化物少量
2 黒褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム小ブロック多量
3 褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量

SK3
1 黒褐色土　ローム粒子少量
2 黒褐色土　ローム粒子（粗）多量　ローム小ブロック・炭化物少量
3 黒褐色土　ローム粒子（粗）少量　ローム小ブロック微量
4 褐色土　ローム粒子（粗）多量　ロームブロック微量　ソフトローム多量

SK4
1 黒褐色土　ローム粒子・炭化物少量
2 黒褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム小ブロック多量

SK5
1 黒褐色土　ローム粒子・炭化物少量
2 褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量

SK7
1 黒褐色土　ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量　ローム小ブロックやや多量
　土器片出土
3 暗茶褐色土　ローム小ブロック多量　底面状に薄く堆積
4 暗黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子ブロック少量　ローム小ブロック多量
5 暗黒褐色土　ローム粒子少量　ローム小ブロックは1層より少ない
6 暗黒褐色土　ローム粒子はごく少量　ローム小ブロック少量　しまり良い
7 暗茶褐色土　ローム小ブロック多量　焼土粒子少量　しまり非常に良い

第652図　中・近世Ⅰ区土壙

ように出土した。

第18号土壙（第654図）
Q－8区に位置する。第15号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は方形で、長径1.25m、短径1.08m、深さ0.42mである。

第20号土壙（第654図）
P－9区に位置する。第16号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長径1.20m、短径0.65m、深さ0.50mである。

第28号土壙（第654図）
P－8・9、O－9区に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長径4.32m、短径0.95m、深さ0.15mである。

第31号土壙（第654図）
Q－6・7区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.85m、短径0.78m、深さ0.15mである。

第37号土壙（第654図）
T－11区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.34m、短径1.08m、深さ0.22mである。

第39号土壙（第654図）
O－9区に位置する。第36号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長径1.27m、短径0.84m、深さ0.33mである。

第40号土壙（第654図）
O－9区に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長径1.58m、短径0.60m、深さ0.09mである。

第42号土壙（第654図）
R－12区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.70m、短径0.60m、深さ0.26mである。

第44号土壙（第654図）
R－13区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.32m、短径1.24m、深さ0.40mである。

第46号土壙（第654図）
P－10区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.95m、短径0.75m、深さ0.15mである。

第55号土壙（第654図）
Q－11区に位置する。第46号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形で、規模は長径1.13m、短径1.00m、深さ0.33mである。

第63号土壙（第655図）
O－13区に位置する。平面形は不整形で、規模は長径2.51m、短径1.03m、深さ0.18mである。

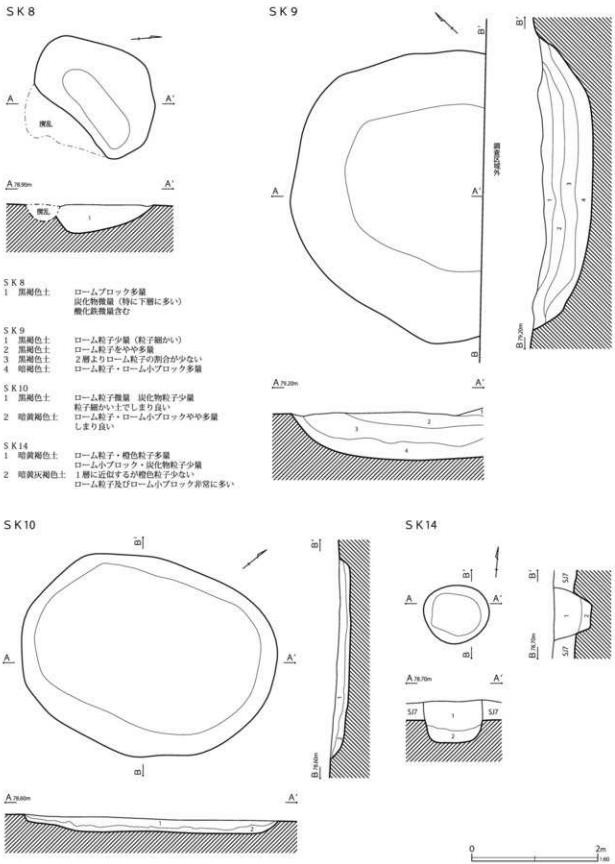
第66号土壙（第655図）
R－11区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.10m、短径0.85m、深さ0.15mである。

第67号土壙（第655図）
R－12区に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長径3.13m、短径0.78m、深さ0.22mである。

第68号土壙（第655図）
Q－14区に位置する。平面形は円形で、規模は直径0.90m、深さ0.17mである。

第69号土壙（第655図）
K・L－10区に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長径2.53m、短径0.93m、深さ0.08mである。

第70号土壙（第655図）
P－12区に位置する。平面形は円形で、規模は直径0.40m、深さ0.20mである。



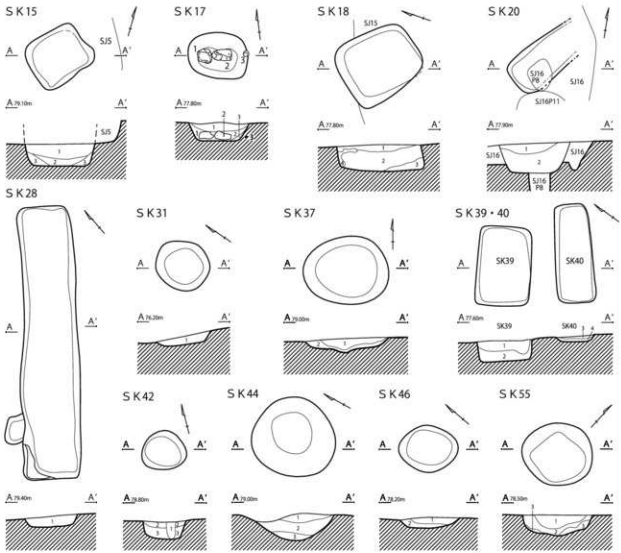
SK8
1　黒褐色土　ロームブロック多量
炭化物微量（特に下層に多い）
酸化鉄微量含む

SK9
1　黒褐色土　ローム粒子少量（粒子細かい）
2　黒褐色土　ローム粒子をやや多量
3　黒褐色土　2層よりローム粒子の割合が少ない
4　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量

SK10
1　黒褐色土　ローム粒子微量　炭化物粒子少量
粒子細かい土でしまり良い
2　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックやや多量
しまり良い

SK14
1　暗黄褐色土　ローム粒子・橙色粒子多量
ローム小ブロック・炭化物粒子少量
2　暗黄灰褐色土　1層に近似するが橙色粒子少ない
ローム粒子及びローム小ブロック非常に多い

第653図　中・近世Ⅱ区土壙（1）



SK15
1 暗褐色土　黒味を帯び、ソフトローム土混じる　ローム粒子少量
　焼化物粒子微量
2 暗茶褐色土　ローム粒子・ロームブロック含む
　ソフトローム土1層より多量
3 暗茶褐色土　ソフトローム土主体　ロームブロック多量

SK17
1 暗茶褐色土　ソフトローム混じる　炭化物粒子・焼土粒子微量
2 暗茶褐色土　ソフトローム土1層より多量　ローム小ブロック少量
3 暗茶褐色土　ソフトローム土2層より多量　ローム粒子多量

SK18
1 暗茶褐色土　ローム微粒子・炭化物多量　しまり良い
2 黒褐色土　3層ベースにローム土を混じる　ローム小ブロック少量
3 黒褐色土　比較的均質な層　しまり非常に悪い
4 黄褐色土　ローム土主体　撹乱か

SK20
1 黒褐色土　ローム粒子少量のみの均質な層
2 黒茶褐色土　1層をベースにローム土多量　炭化物・焼土粒子微量
　粘性強い

SK28
1 黒褐色土　黒色土と茶褐土との混土層で粒子類含まず　粘性強い

SK31
1 茶褐色土　ローム土との混土層　ロームの混入多い　粘性強い

SK37
1 黒褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子微量
2 暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量

SK39・40
SK39
1 暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
2 暗褐色土　1層に近似するがより黒味を帯びる
SK40
3 黒褐色土　ソフトローム土混じる
4 暗黄褐色土　ローム土を主体に3層混じる

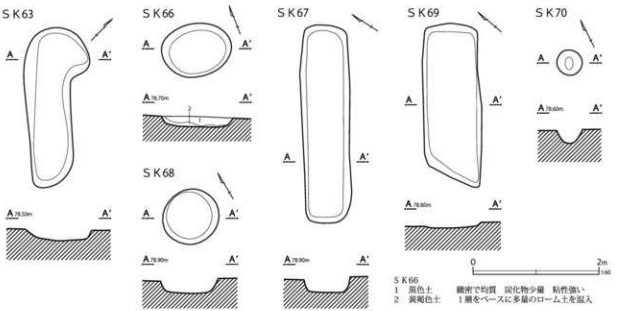
SK42
1 暗褐色土　炭微粒子微量のみの均質な層　しまり良い
2 黄褐色土　3層とローム土との混土層
3 灰褐色土　暗灰褐色土をベースにローム小ブロック多量
　粘性非常に強い

SK44
1 暗茶褐色土　しまりやや良く　粘性弱い　草根による攪乱著しい
2 暗灰褐色土　ローム土多量　炭微粒子微量
3 黄茶褐色土　2層をベースにローム土を小ブロック状に混ずる
　粘性強い

SK46
1 暗灰褐色土　ローム土混じり（粒子類は含まず）　しまり良い
2 黄褐色土　1層をベースにローム土多量

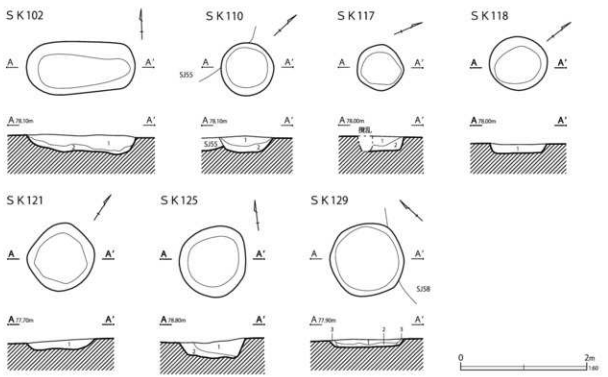
SK55
1 暗灰褐色土　炭化物少量のみで比較的均質な層
2 灰褐色土　灰褐色土とローム土の混土層　粒子類は少なく均質
3 黄褐色土　2層をベースに多量のローム土を混入

第654図　中・近世Ⅱ区土壙（2）



SK66
1　黒色土　　礫密で均質　炭化物少量　粘性強い
2　黄褐色土　1層をベースに多量のローム土を混入

第655図　中・近世Ⅱ区土壙（3）



SK102
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
2　褐色土　　ローム粒子・ソフトローム多量

K110
1　暗褐色土　　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量　黒色土微量
2　褐色土　　黒色土を斑に含む　ソフトローム多量

SK117
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック微量
2　にぶい黄褐色土　ソフトローム主体

SK118
1　褐色土　　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
　　ソフトローム多量

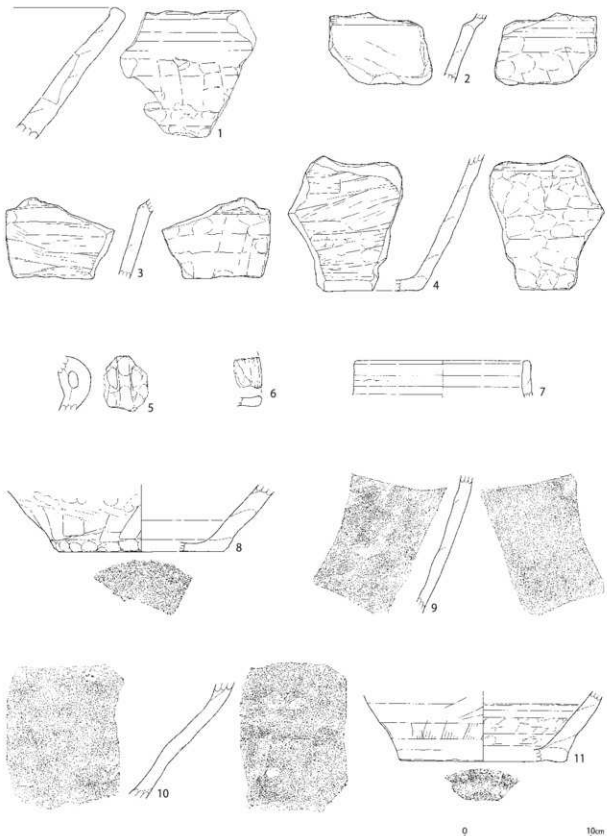
SK121
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量

SK125
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム斑に混入
2　鈍黄褐色土　ソフトローム主体

SK129
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物少量
　　ソフトロームを小ブロック状に少量
2　鈍黄褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム多量
3　鈍黄褐色土　ソフトローム主体

第656図　中・近世Ⅲ区土壙

SK9



第657図　中・近世Ⅱ区土壙出土遺物

c）Ⅲ区

第102号土壙（第656図）

Ｆ－24区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.72m、短径0.83m、深さ0.30mである。

第110号土壙（第656図）

Ｇ－21区に位置する。第55号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は円形で、規模は直径0.85m、深さ0.25mである。

第117号土壙（第656図）

Ｈ－19区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.73m、短径0.72m、深さ0.23mである。

第118号土壙（第656図）

Ｇ－19区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.92m、短径0.84m、深さ0.13mである。

第121号土壙（第656図）

Ｉ－16区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.17m、短径1.16m、深さ0.15mである。

第125号土壙（第656図）

Ｊ－21区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.15m、短径1.05m、深さ0.25mである。

第129号土壙（第656図）

Ｉ－17区に位置する。第58号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は円形で、規模は長径1.19m、短径1.17m、深さ0.13mである。

（3）井戸跡

a）Ⅱ区

第１号井戸跡（第658図１、２）

Ｕ－10区に位置する。第12号土壙の地下式坑と中世の第９号土壙との間にあり、開口部は東西方向にやや長い楕円形を呈し、長径1.57m、短径1.45mを測る。開口部から約0.5m付近で、幅0.72m程に窄まり、断面ロート状を呈して筒状に掘り込まれている。危険防止のため、深さ約1.8mまで調査した。深さ約0.8m付近から覆土が変わり、大形礫が重なるように出土することから、廃棄に伴い埋められた可能性が高い。時期は出土遺物から、中世の井戸と思われる。

出土した中世以降の遺物は第658図１、２に示した２点のみであった。いずれも中世の陶器である。

１は古瀬戸系陶器の折縁深皿で、口縁部破片である。内外面とも灰釉が施され細かい貫入があるが、釉の剥落が激しい。口縁部は受け口状で、古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ古期（15世紀中葉前後）の所産と考えられる。２は常滑焼甕の胴部上位の破片である。胎土は黄灰色を呈するが、外面はやや赤みを帯びる灰褐色である。外面上位には焼成時の降灰が認められる。

（4）溝跡

溝跡はⅡ区で２条、Ⅲ区で１条の合計３条が検出された。

a）Ⅱ区

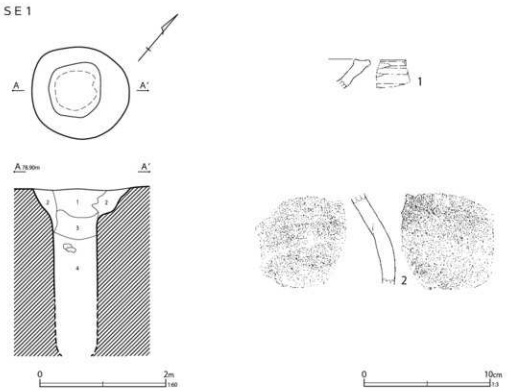
第１号溝跡（第659図）

Ｒ－14区からＴ－11区にかけて位置する。Ｓ－11区で第４号住居跡と重複し、Ｒ－13区で第20、30号住居跡と重複し、住居跡を壊している。Ｒ－14区から南西方向へ直線的に進み、Ｓ－11区で南東方向へ直角に折れ曲がり、Ｔ－11区で調査区域外へと続く。

溝の形状は崩れた箱状を呈し、幅が0.7m前後で、Ｒ－14区の調査区域外へ出る部分が一番深くて約80cm、Ｔ－11区では約40cmと浅くなる。地境的な溝であろうか。近世以降の所産と思われる。

第２号溝跡（第659図）

Ｒ－11区からＭ－12区にかけて位置する。Ｒ－11区付近で現れ、曲線的に曲がりながらも北



第658図　第１号井戸跡・出土遺物

上し、M－12区で調査区域外へと続く。非常に浅い溝で、遺構確認時には存在が明らかであったが、再度の確認では途切れてしまう部分があった。N－12区で第38号住居跡と、M－12区では第42号住居跡と重複するが、覆土の上部を一部削る程度であった。

溝跡の形状は浅い皿状を呈し、幅約0.5m、深さは深いところでも約18cm前後である。遺物が出土しておらず時期不詳であるが、近世以降の所産と思われる。

b）Ⅲ区

第３号溝跡（第660図）

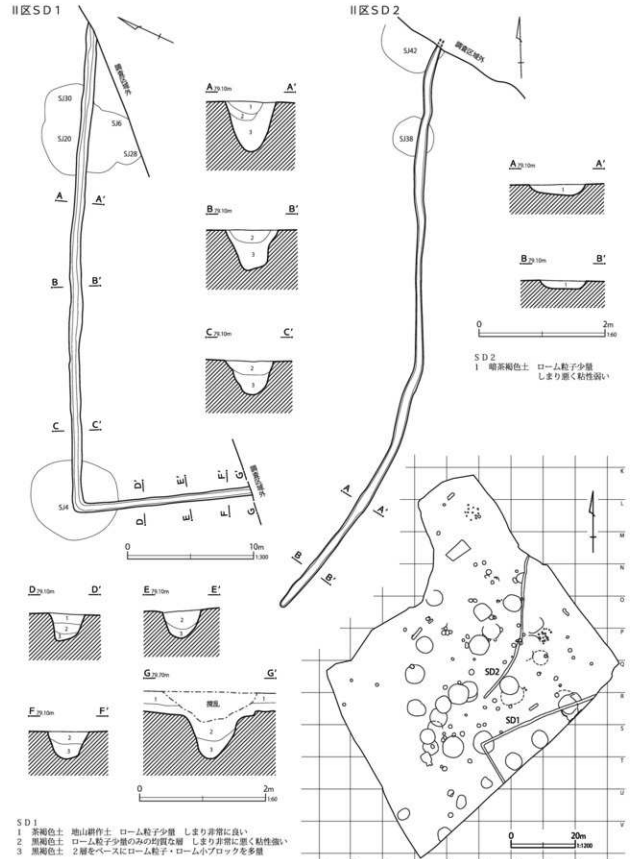
Ⅰ－23区からE－18区にかけて位置する。Ⅰ－23区の市道脇あたりから現れ、E－18区の台地縁辺にかけて存在する。Ⅲ区の中央付近を北西方向に、直線的に横切っており、台地の落ち際から谷に向かって存在していることから、排水用の溝の可能性がある。H－21区で第52号住居跡と重複しており、住居跡の壁の半分ほどに撹乱を与えている。

溝跡の形状は幅広の箱状を呈し、幅は広いところで約1.2m、狭いところで約0.7mを測り、深さは深いところで約25cm、浅いところで約12cmである。遺物は出土していないが、溝跡の形状等から近世以降の所産と思われる。

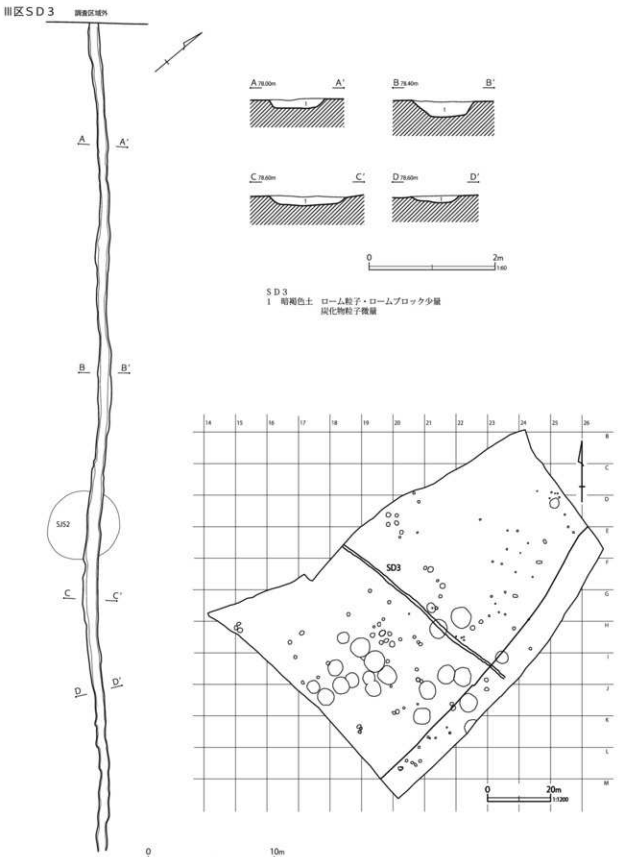
（５）ピット

調査区からは時期不詳で、組み合わせも不明な小ピットが多数検出されている（第15～17図）。縄文時代から中・近世のものまで混在していると思われるが、ここで一括して取り扱うことにする。

ピットは全体で109基が検出されていれる。内訳はⅠ区１基、Ⅱ区76基、Ⅲ区32基である。なお、ピットの規模等は一覧表にして示した。



第659図 第１・２号溝跡


Ⅲ区ＳＤ３
調査区域外
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
SJ52
A 78.00m
A'
B 78.40m
B'
C 78.60m
C'
D 78.60m
D'
0
2m
1:40
ＳＤ３
1　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
炭化物粒子微量
SD3
0
20m
1:200
0
10m
1:300

第660図　第３号溝跡

第241表　第11 ～ 13号地下式坑出土遺物観察表（第647・648・650・651図）

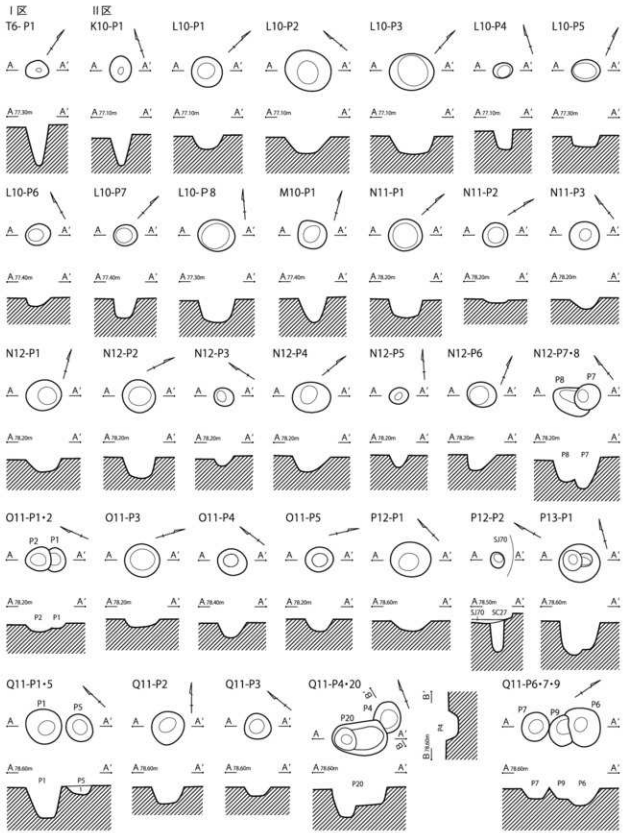
番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存	焼成	色調	備　考
647-1	SK11	石製品	砥石	長さ[8.2]cm　幅2.9cm　厚さ1.4cm　重さ57.1g							粘板岩
2		石製品	茶臼	長さ[29.7]cm　幅[26.0]cm　高さ11.7cm　重さ8570g							砂岩
3		石製品	茶臼	長さ[21.7]cm　幅[14.7]cm　高さ9.8cm　重さ2780g							安山岩
648-4		瓦質土器	内耳鍋	(32.0)	[7.3]	－	DEHI	15	普通	にぶい橙	グリッド-5と同一個体か
5		瓦質土器	内耳鍋	(30.3)	[10.4]	－	ADEHI	20	良好	にぶい黄橙	外面煤付着
6		瓦質土器	鉢	－	[10.5]	－	ABCEH	10	普通	黄灰	同一個体とみられる2破片　内面下位使用による摩耗　外面下位に指頭圧痕
7		瓦質土器	鉢	－	[9.7]	(14.4)	DE	5	普通	にぶい橙	底部糸切痕　内外面擦す
8		瓦質土器	釜	－	[7.7]	－	DE	5	普通	淡黄	外面磨き状ヘラナデ　煤付着　耳欠失
9		瓦質土器	甕か	－	[8.8]	－	EH	10	普通	にぶい黄橙	外面丁寧なナデ　内面剥落多い
10		陶器	碗	(10.2)	6.1	4.4	DI	40	普通	灰白	瀬戸美濃系　内外面灰釉　外面鉄釉掛分　18c前期
11	SK12	陶器	甕	－	[5.5]	－	DEH	5	良好	灰黄	常滑　外面上位降灰　ヘラナデ
12		陶器	甕	－	[9.9]	－	DEK	5	普通	にぶい黄橙	常滑　やや酸化炎焼成　外面ヘラナデ
650-1	SK13	瓦質土器	内耳鍋	(32.1)	[9.9]	－	BDE	15	普通	灰白	内外面擦す　外面煤付着
2		瓦質土器	釜	(12.0)	[6.0]	－	BDE	10	普通	黄灰	
3		瓦質土器	甕	－	[10.0]	－	DEHK	10	良好	橙	表面全体剥離　やや酸化炎焼成
4		陶器	甕	－	[4.1]	－	DE	5	良好	灰	常滑　6b ～ 7型式(13c末期～14c前期)
5		陶器	甕	－	[4.9]	－	DGI	5	良好	黄灰	常滑　外面降灰
6		陶器	甕	－	[4.5]	－	DEI	5	良好	黄灰	常滑　外面降灰
7		陶器	甕	－	[6.0]	－	DEGI	10	良好	黄灰	常滑　外面上位押印文
8		陶器	甕	－	[8.6]	－	DEG	5	良好	灰	常滑　外面自然釉　ヘラナデ
9		陶器	甕	－	[4.3]	－	DK	5	普通	黄灰	瀬美か　外面降灰
651-10		陶器	甕	－	[9.6]	－	DEG	10	良好	灰白	常滑　内外面ヘラナデ
11		陶器	甕	－	[7.8]	－	DGI	5	良好	黄灰	常滑　内外面ヘラナデ
12		陶器	甕	－	[8.5]	－	DEI	5	良好	黄灰	常滑　内外面ヘラナデ
13		陶器	甕	－	[8.3]	－	DEG	5	良好	灰黄	常滑　内外面ヘラナデ
14		陶器	甕	－	[7.0]	－	DEIK	5	普通	黄灰	常滑　外面ヘラナデ
15		陶器	甕	－	[6.9]	－	DEGI	5	良好	灰黄	常滑　内外面ヘラナデ
16		陶器	甕	－	[7.4]	－	DEI	5	良好	灰黄	常滑　外面ヘラナデ
17		石製品	茶臼	長さ[5.0]cm　幅[4.2]cm　高さ[3.6]cm　重さ34.2g							安山岩　炭付着
18		石製品	茶臼	長さ[14.0]cm　幅[5.1]cm　高さ 6.7cm　重さ328.4g							安山岩
19		石製品	茶臼	長さ[11.1]cm　幅[5.9]cm　高さ[3.6]cm　重さ246.0g							砂岩

第242表　中・近世Ⅱ区土壙出土遺物観察表（第657図）

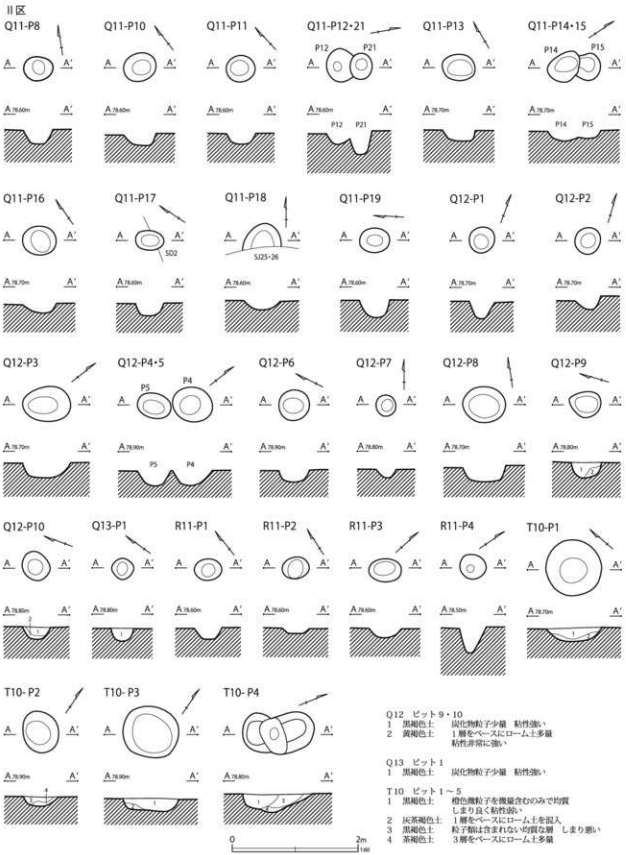
番号	遺構名	種別	器種(cm)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存	焼成	色調	備　考
656-1	SK9	瓦質土器	鉢	－	[10.3]	－	DE	10	普通	浅黄	内面剥離激しい　酸化炎焼成ぎみ
2		瓦質土器	内耳鍋	－	[5.5]	－	BDEH	5	普通	灰白	内外面擦す
3		瓦質土器	内耳鍋	－	[6.3]	－	BDEH	5	普通	灰白	内外面擦す
4		瓦質土器	内耳鍋	－	[10.6]	－	ABDEH	15	普通	灰黄	砂目底　内外面擦す
5		瓦質土器	釜	－	[4.3]	－	ACE	5	普通	淡黄	耳部破片　内外面擦す
6		土師質土器	不明	－	[0.8]	－	EHI	5	普通	灰黄	胎土粉質　やや還元炎焼成
7		土師質土器	不明	(13.4)	[2.9]	－	EHI	5	普通	灰黄	胎土粉質　やや還元炎焼成
8		陶器	片口鉢	－	[5.3]	(13.0)	DEG	20	良好	橙	常滑　砂目底　内面使用により摩耗
9		陶器	甕	－	[10.9]	－	DI	5	良好	黄灰	常滑　外面自然釉　降灰　ヘラナデ
10		陶器	甕	－	[9.1]	－	DE	5	普通	黄灰	常滑　内面降灰　外面ヘラナデ
11		陶器	甕	－	[5.7]	(13.2)	DE	5	良好	にぶい橙・灰	常滑　砂目底　内面自然降灰

第243表　井戸跡出土遺物観察表（第658図）

番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存	焼成	色調	備　考
658-1	SE1	陶器	折縁大皿	－	[2.2]	－	D	5	普通	灰白	古瀬戸　内外面灰釉　後Ⅲ-Ⅳ期
2		陶器	甕	－	[7.3]	－	DEI	5	普通	黄灰	常滑　外面上位降灰


Ⅰ区
Ⅱ区
T6-P1
K10-P1
L10-P1
L10-P2
L10-P3
L10-P4
L10-P5
L10-P6
L10-P7
L10-P8
M10-P1
N11-P1
N11-P2
N11-P3
N12-P1
N12-P2
N12-P3
N12-P4
N12-P5
N12-P6
N12-P7・8
O11-P1・2
O11-P3
O11-P4
O11-P5
P12-P1
P12-P2
P13-P1
Q11-P1・5
Q11-P2
Q11-P3
Q11-P4・20
Q11-P6・7・9
SJ70
SC27
Q11 ピット5
1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘性強い
0
2m
1:60

第661図 ピット（1）

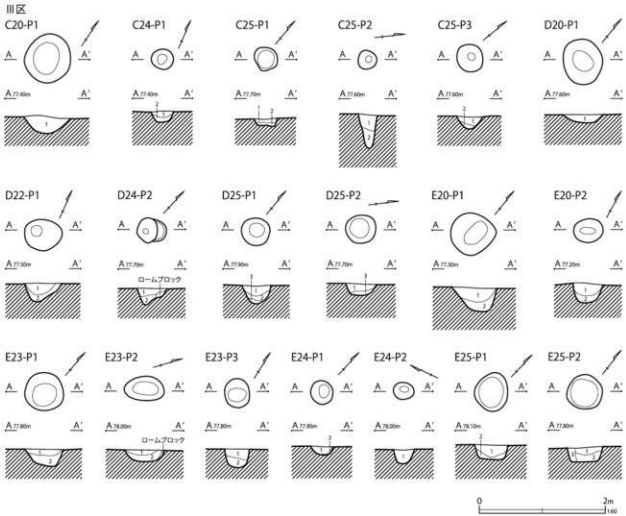


Q12 ピット9・10
1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘性強い
2 黄褐色土 1層をベースにローム土多量 粘性非常に強い

Q13 ピット1
1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘性強い

T10 ピット1～5
1 黒褐色土 橙色酸粒子を微量含むのみで均質 しまり良く粘性強い
2 灰茶褐色土 1層をベースにローム土を混入
3 黒褐色土 粒子粗は含まれない均質な層 しまり悪い
4 茶褐色土 3層をベースにローム土多量

第662図 ピット（2）



C20 P1
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量

C24 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック・炭化物少量
2 暗褐色土 炭化物少量 ローム小ブロック多量

C25 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 純黄褐色土 ローム小ブロック・ソフトロームが多量

C25 ピット2
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
2 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量

C25 ピット3
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量 炭化物少量

D20 ピット1
1 暗褐色土 ローム小ブロック少量 炭化物微量

D22 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 純黄褐色土 ソフトローム多量

D24 ピット2
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量 炭化物少量

D25 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物・ローム小ブロック微量
2 暗褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック少量
3 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量

D25 ピット2
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 純黄褐色土 ソフトローム・ローム小ブロック多量

E20 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
2 純黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量

E20 ピット2
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
2 純黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量

E23 ピット1～3
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 純黄褐色土 ローム小ブロック・炭化物・ソフトローム少量

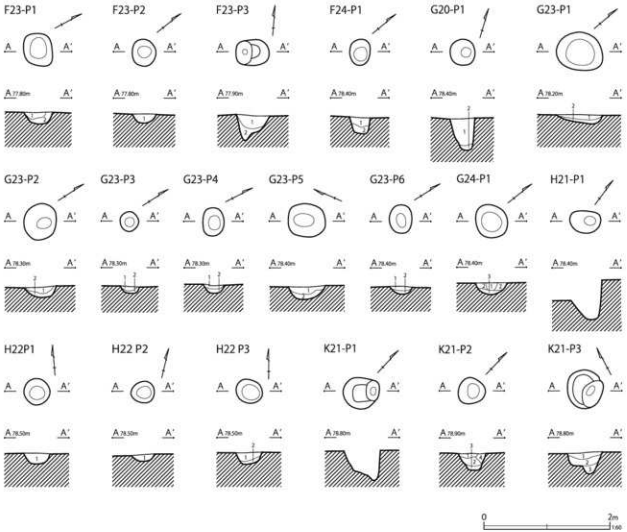
E24 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
2 純黄褐色土 ソフトローム主体

E24 ピット2
1 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物少量

E25 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量

E25 ピット2
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
2 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量
3 純黄褐色土 ソフトローム・ローム小ブロック多量

第663図 ピット（3）



F23 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 褐黄褐色土 ローム小ブロック多量 炭化物少量

F23 ピット2
1 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物少量

F23 ピット3
1 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物少量
2 暗褐色土 ローム小ブロック多量 炭化物少量

F24 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
2 暗褐色土 ローム小ブロック多量

G20 ピット1
1 黒褐色土 ローム粒子少量 暗褐色土ブロック状に微量混じる しまりなし
2 褐色土 ソフトローム主体

G23 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
2 褐黄褐色土 ソフトローム主体

G23 ピット2
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量 炭化物少量

G23 ピット3
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子少量 ローム小ブロック多量 炭化物少量

G23 ピット4
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
2 暗褐色土 ローム粒子少量 ローム小ブロック多量 炭化物少量

G23 ピット5
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 褐黄褐色土 ソフトローム・ローム小ブロック多量

G23 ピット6
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
2 褐黄褐色土 ソフトローム・ローム小ブロック多量

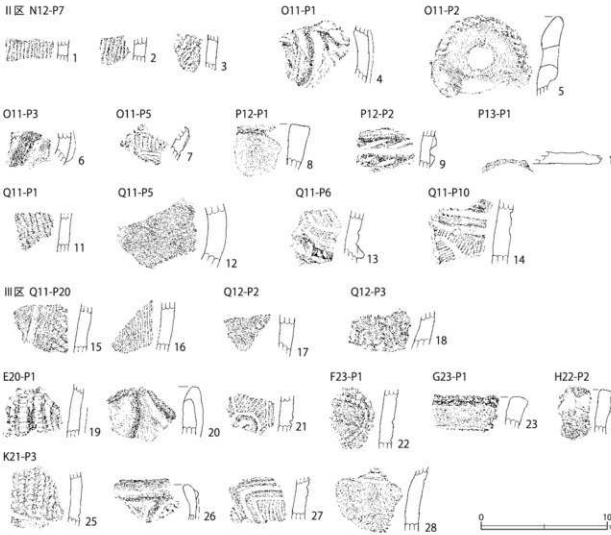
G24 ピット1
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
3 褐黄褐色土 ソフトローム多量

H22 ピット1～3
1 黒褐色土 ローム粒子少量 暗褐色土をブロック状に微量 しまり悪い
2 褐色土 ソフトローム主体

K21 ピット2
1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 黒褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック微量
3 褐黄褐色土 ソフトロームを主体
4 褐色土 ソフトローム多量

K21 ピット3
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 黄褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック極めて多量
3 暗褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック少量

第664図 ピット（4）



第665図　ピット出土遺物

ａ）Ⅰ区（第661図）

1基のみ検出された。底は細いが、深いピットである。中・近世の所産と思われる。

ｂ）Ⅱ区（第661図、第662図、第665図１～12）

Ⅱ区からは76基という多くのピットが検出された。その内の多くは縄文時代のピットと思われるが、縄文時代と確定しているわけでもなく、中近世の、またはそれ以降のピットが含まれているものと思われる。Ⅱ区の西側半分では、中世の遺構も検出されており、それらに伴うピットも多くあると思われる。

その中で、土器が出土しているピットは、１～３がN12－Ｐ７、４がO11－Ｐ１、５がO11－Ｐ２、６がO11－Ｐ３、７がO11－Ｐ５、８がP12－Ｐ１、９がP12－Ｐ２、10がP13－Ｐ１、11がQ11－Ｐ１、12がQ11－Ｐ５、13がQ11－Ｐ６、14がQ11－Ｐ10である。

ｃ）Ⅲ区

Ⅱ区と同様に、15、16はQ11－Ｐ20、17はQ12－Ｐ２、18はQ12－Ｐ３、19～21はE20－Ｐ１、22はF23－Ｐ１、23はG23－Ｐ１、24はH22－Ｐ２、25～28はK21－Ｐ３からの出土である。Ⅲ区は縄文時代の遺構を主体とするため、多くは縄文時代の所産と思われる。

第244表　ピット一覧表（第661～664図）

グリッド	No.	調査区	長径(m)	深さ(m)	図番
T-6	1	I	0.18	0.64	
K-10	1	II	0.34	0.50	
L-10	1	II	0.49	0.23	
	2	II	0.74	0.27	
	3	II	0.70	0.29	
	4	II	0.31	0.32	
	5	II	0.46	0.18	
	6	II	0.40	0.14	
	7	II	0.38	0.31	
	8	II	0.58	0.37	
M-10	1	II	0.46	0.40	
N-11	1	II	0.54	0.28	
	2	II	0.40	0.60	
	3	II	0.48	0.19	
N-12	1	II	0.56	0.22	
	2	II	0.52	0.33	
	3	II	0.31	0.16	
	4	II	0.60	0.26	
	5	II	0.31	0.20	
	6	II	0.47	0.25	
	7	II	0.40	0.50	665-1～3
	8	II	(0.57)	0.33	
O-11	1	II	0.38	0.80	665-4
	2	II	0.41	0.12	665-5
	3	II	0.56	0.13	665-6
	4	II	0.46	0.25	
	5	II	0.44	0.20	665-7
P-12	1	II	0.64	0.17	665-8
	2	II	0.23	0.50	665-9
P-13	1	II	0.65	0.54	665-10
Q-11	1	II	0.56	0.50	665-11
	2	II	0.52	0.27	
	3	II	0.42	0.15	
	4	II	0.50	0.19	
	5	II	0.41	0.14	665-12
	6	II	0.61	0.27	665-13
	7	II	0.46	0.16	
	8	II	0.47	0.22	
	9	II	0.49	0.17	
	10	II	0.51	0.18	665-14
	11	II	0.46	0.17	
	12	II	0.53	0.17	
	13	II	0.52	0.18	
	14	II	0.49	0.16	
	15	II	0.43	0.13	
	16	II	0.53	0.16	
	17	II	0.45	0.21	
	18	II	0.58	0.15	
	19	II	0.48	0.28	
	20	II	0.88	0.46	665-15・16

グリッド	No.	調査区	長径(m)	深さ(m)	図番
Q-11	21	II	0.42	0.37	
Q-12	1	II	0.40	0.27	
	2	II	0.40	0.22	665-17
	3	II	0.77	0.24	665-18
	4	II	0.63	0.24	
	5	II	0.53	0.24	
	6	II	0.49	0.19	
	7	II	0.31	0.14	
	8	II	0.68	0.26	
	9	II	0.48	0.24	IIS J49P8
	10	II	0.44	0.19	IIS J49P11
Q-13	1	II	0.35	0.20	
R-11	1	II	0.43	0.18	
	2	II	0.43	0.80	
	3	II	0.51	0.15	
	4	II	0.42	0.40	
T-10	1	II	0.88	0.21	
	2	II	0.65	0.14	
	3	II	0.88	0.20	
	4	II	1.12	0.28	
C-20	1	III	0.73	0.26	
C-24	1	III	0.35	0.16	
C-25	1	III	0.35	0.13	
	2	III	0.30	0.53	
	3	III	0.41	0.20	
D-20	1	III	0.70	0.13	
D-22	1	III	0.58	0.29	
D-24	2	III	0.47	0.26	
D-25	1	III	0.45	0.28	
	2	III	0.48	0.17	
E-20	1	III	0.71	0.37	665-19～21
	2	III	0.47	0.31	
E-23	1	III	0.62	0.26	
	2	III	0.63	0.18	
	3	III	0.46	0.29	
E-24	1	III	0.36	0.13	
	2	III	0.32	0.21	
E-25	1	III	0.60	0.22	
	2	III	0.56	0.22	
F-23	1	III	0.51	0.18	665-22
	2	III	0.43	0.14	
	3	III	0.53	0.40	
F-24	1	III	0.52	0.25	
G-20	1	III	0.39	0.51	
G-23	1	III	0.73	0.14	665-23
	2	III	0.57	0.16	
	3	III	0.29	0.11	
	4	III	0.45	0.12	
	5	III	0.59	0.20	
	6	III	0.45	0.13	

グリッド	No.	調査区	長径(m)	深さ(m)	図番
G-24	1	Ⅲ	0.50	0.18	
H-21	1	Ⅲ	0.50	0.62	
H-22	1	Ⅲ	0.42	0.17	
	2	Ⅲ	0.37	0.11	665-24

グリッド	No.	調査区	長径(m)	深さ(m)	図番
H-22	3	Ⅲ	0.41	0.18	
K-21	1	Ⅲ	0.58	0.48	
	2	Ⅲ	0.43	0.25	
	3	Ⅲ	0.57	0.34	665-25～28

（6）グリッド出土遺物（第666図1～第667図19）

第666図1、2は須恵器で、古代の遺物である。1は蓋である。2は多孔式甑で、内面に握り拳大の窯体が溶着している。近くに古代の遺構があり、周辺の窯跡から持ち込まれたものか。

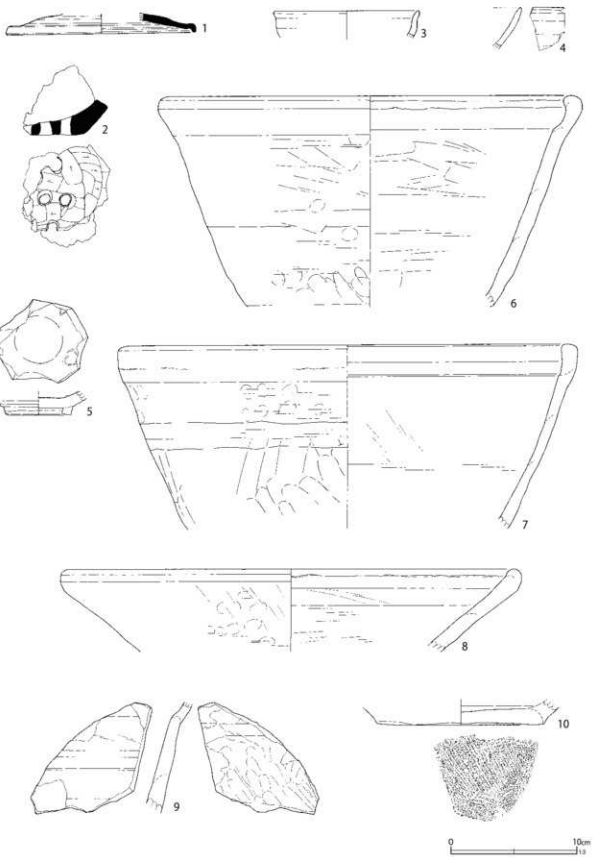
3、4は古瀬戸系陶器の天目茶碗である。3は口が短く屈曲する。胎土は硬質・緻密である。4は僅かに口縁部が屈曲し、口唇部が尖る。いずれも後期様式Ⅳ新期（15世紀後葉）に相当するとみられる。5も古瀬戸系陶器の平碗で底部が遺存するものである。高台は付高台で側面は工具によって二段に面取りされる。高台内は糸切痕をナデ消している。内底面には黄色味の強い灰釉が施され、目跡が三か所認められる。後期様式で15世紀の所産である。

6～10は瓦質土器で中世の所産である。6、7、9は内耳鍋で、このうち6、7は口縁部から体部下位まで残る破片から反転復元し図示した。6は口縁部が短く屈曲して、口唇部は短く内湾しながら玉縁状に丸まる。体部外面は、口縁部付近には強いヨコナデ、頸部以下には弱い工具ナデが施され、下位にミガキに近いヘラナデが施される。体部内面は横～斜方向のヘラナデが施される。胎土は軟質で粉っぽく、径5㎜程の長石が多く含まれる。第11号土壙（地下式坑）出土の内耳鍋（第648図4）と同一個体の可能性が高い。7は口縁部に歪みがあるため、胴部径から復元径を算出したものである。口縁部はやや直立気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。胎土・混入鉱物や、器面の調整は6の内耳鍋とほぼ同じだが、内面のナデ痕は弱く、ヘラナデか否か判然としない。9は頸部の屈曲部から体部にかけての破片で、体部外面にはミガキに近いヘラナデが顕著に認められる。胎土はやや粗く、径5㎜程の長石角礫が含まれる。外面には煤が顕著に付着する。8、10は鉢である。8の口唇部は僅かに内湾して丸まる。体部外面は指頭圧痕の上から弱く斜方向のナデが施される。胎土は粗いが比較的焼き締まり、径10㎜弱の長石を多く含んでいる。10は底部破片で底面に静止糸切痕が残る。酸化炎焼成ぎみで橙色味が強い。

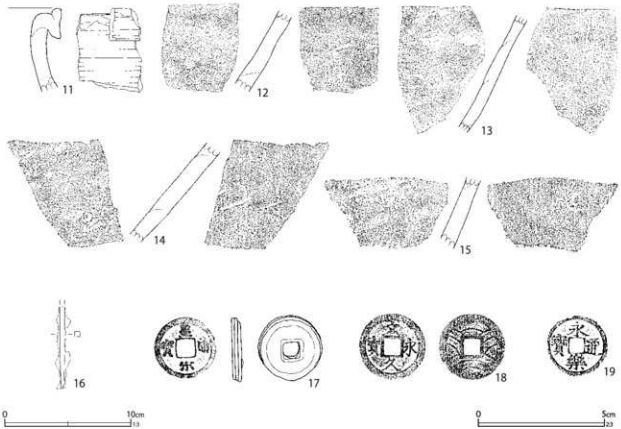
11～15は陶器の常滑焼で、中世の所産である。11は口縁部の破片で、形状や色調から第13号土壙（地下式坑）の出土の第650図4と同一個体の可能性がある。常滑編年の6b～7型式（13世紀末～14世紀前葉）に相当する。他は胴部の破片で、外面に縦方向のヘラナデ痕が残る。

16～19は金属製品である。16は棒状鉄製品だが用途は不明である。鉄釘の可能性が考えられる。17～19は銭貨である。17は3枚の銭貨が錆着しており、皇宋通寶を含む。18は文久永寶、19は永楽通寶である。

芦苅場遺跡から出土した遺物には中世の瓦質土器が多く認められた。当該地域の土器編年には不明な部分が多いが、中世後期に特徴的な内耳鍋が多数含まれることから、15世紀を中心とした時期の様相と推定される。これは、地下式坑が複数検出されていることや、僅かに出土した古瀬戸系陶器が後期様式のものであることとも矛盾しない。古瀬戸系陶器には天目茶碗が2点含まれ、地下式坑からは茶臼が複数出土しており、喫茶に関わる習慣を想定させる。こういった遺物様相や、地下式坑を主体とする遺構の在り方は当遺跡の性格を考える上で留意すべき点であろう。



第666図　中・近世グリッド出土遺物（1）



第667図　中・近世グリッド出土遺物（2）

第245表　中・近世グリッド出土遺物観察表（第666・667図）

番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存	焼成	色調	備　考
666-1	SK11	須恵器	蓋	(14.8)	[1.6]	－	ＥＩＫ	10	普通	灰黄	
2	SK11	須恵器	甕	－	[2.8]	－	ＩＫ	20	良好	灰	多孔式(小孔)　内面に長さ8cm幅6.5cm程の窪体が付着し内面の調整は不明
3		陶器	天目茶碗	(11.3)	[2.1]	－	Ｋ	5	良好	にぶい黄橙	古瀬戸　内外面鉄釉　後Ⅳ新期
4		陶器	天目茶碗	－	[9.3]	－	１	5	普通	黄灰	古瀬戸　内外面鉄釉　後Ⅳ期
5		陶器	平碗	－	[1.9]	5.1	ＧＨＩ	20	普通	灰白	古瀬戸　内面灰釉
6		瓦質土器	内耳鍋	(31.9)	[16.7]	－	ＢＤＥＨＩ	15	普通	灰黄	SK11-4と同一個体か
7		瓦質土器	内耳鍋	(34.7)	[14.7]	－	ＢＤＥ	15	普通	灰	外面上位煤付着
8		瓦質土器	鉢	(35.0)	[6.6]	－	ＢＤＥＧ	10	普通	浅黄	横すナデ　外面煤付着
9		瓦質土器	内耳鍋	－	[8.8]	－	ＢＤＥＨ	10	普通	灰黄	外面ヘラナデ　煤付着
10		瓦質土器	鉢	－	[2.1]	(13.2)	ＢＤＥ	10	普通	にぶい橙	底部静止糸切痕　やや酸化炎焼成
667-11	SK11	陶器	壺	－	[6.5]	－	ＤＩ	5	普通	黄褐	常滑　6b～7型式(13ｃ末葉～14ｃ前葉)
12		陶器	壺	－	[6.4]	－	ＤＥＩ	5	良好	暗灰黄	常滑　外面ヘラナデ
13		陶器	壺	－	[9.3]	－	ＤＥＧＩ	5	普通	にぶい黄橙	常滑　外面ヘラナデ
14		陶器	壺	－	[7.7]	－	ＤＨＩ	5	普通	暗灰黄	常滑　外面ヘラナデ　内面使用による摩耗か
15		陶器	壺	－	[5.6]	－	ＤＩ	5	普通	暗灰黄	常滑　外面ヘラナデ

				径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
16	SK13	鉄製品	不明	[6.5]	0.4	6.4	
17	SJ12	銅製品	銭貨	2.6	0.3	8.3	皇宋通寶　初鋳1038年
18		銅製品	銭貨	2.7	0.1	3.1	文久永寶　初鋳1863年
19	SK1	銅製品	銭貨	2.5	0.1	2.0	永楽通寶　初鋳1408年

第246表　縄文時代の住居一覧表

遺構名	区	所在	主軸方向	平面形	長径(m)	短径(m)	壁高(m)	柱穴	炉跡	床数	埋甕	壁溝	時期	図番
SJ 1	Ⅰ	T-4・5	N-9°-W	楕円	6.23	5.45	0.35	5	埋甕	1	有	○	EⅡ前	64
SJ 2	Ⅰ	T-7、U-6・7	—	—	(5.10)	(4.60)	—	6	埋甕	1	無		EⅡ後	70
SJ 3	Ⅱ	S・T-11・12	N-28°-W	楕円	5.28	5.01	0.32	26	石囲	3	無		勝中～新	72
SJ 4	Ⅱ	S-10・11	N-65°-E	4a 五角 4b 不整円	6.40	6.90	0.40	25	1 地床 2 埋甕	4	有	○	EⅢ前	86
SJ 5	Ⅱ	S-12・13	N-35°-W	楕円	5.43	5.00	0.45	20	石囲埋甕	3	無	○	勝末～EⅠ	98
SJ 6	Ⅱ	R-13・14	—	—	5.90	5.10	0.25	2		1	無	○	EⅢ前	110
SJ 7・8	Ⅱ	S-9・10、T-10	N-10°-E	円	6.70	6.53	0.30	12	埋甕	2	有	○	EⅡ後	127
SJ 9	Ⅱ	R-8・9	—	—	3.57	[3.25]	0.44	20		1	無		(勝末～EⅠ)	135
SJ 14	Ⅱ	R-8・9	—	楕円	4.97	(5.64)	0.63		石囲埋甕	2	無		勝新	135
SJ 10	Ⅱ	S-9	N-10°-W	楕円	4.73	4.67	0.42	5	埋甕	1	無		EⅢ前	141
SJ 11	Ⅱ	S-9	N-10°-W	円	(3.66)	4.73	0.45	17	埋甕	2	無	○	勝末～EⅠ	146
SJ 12	Ⅱ	R-9・10	N-7°-W	楕円	5.30	4.97	0.50	12	石囲	2	無	○	勝末～EⅠ	151
SJ 13	Ⅱ	R-8・9、R-10	—	不整円	5.35	5.09	0.30	8	石囲	1	無		EⅢ前	164
SJ 15	Ⅱ	Q-8・9	—	不整円	5.76	5.68	0.47	12	埋甕	2	無	○	EⅡ前	170
SJ 16	Ⅱ	P-9	N-41°-W	円	5.21	4.87	0.30	11	石囲	1	無	○	EⅡ前	182
SJ 17	Ⅱ	R-10	—	—	(12.40)	(2.62)	0.25	3		1	無		EⅢ後	187
SJ 18	Ⅱ	Q-R-10	N-83°-E	円	[5.48]	[5.01]	0.19	10	埋甕	1	有		EⅢ後	187
SJ 19	Ⅱ	Q-R-10	N-6°-E	隅丸方	6.25	6.16	0.41	14	石囲	2	有	○	EⅢ前	187
SJ 20	Ⅱ	R-13・14	N-50°-W	隅丸長方	5.45	5.00	0.40	14	地床	2	無	○	EⅠ後	110
SJ 21	Ⅲ	H-I-23	N-9°-W	不整円	3.96	3.96	0.35	8	地床	2	無		勝中	355
SJ 22	Ⅲ	J-22	N-5°-E	不整円	5.94	5.55	0.45	35	石囲	5	無	○	EⅠ後	358
SJ 23	Ⅲ	K-22	—	円か	5.20	(3.00)	0.50	4	埋甕	2	無		勝中～新	371
SJ 24	Ⅱ	R-S-9	—	—	—	—	(0.20)	無	石囲	1	無		EⅢ前	196
SJ 25・26	Ⅱ	Q-R-11・12	N-31°-W	楕円	5.85	5.50	0.63	12	埋甕	2	無	○	勝末～EⅠ	198
SJ 27	Ⅱ	N-O-9	—	不整円	5.07	4.75	0.28	13		2	無		勝新	198
SJ 28	Ⅱ	R-13・14	—	—	[2.50]	[2.00]	0.40	5	地床	1	無	○	EⅢ後	110
SJ 29	Ⅱ	P-10・11	N-60°-W	六角	6.30	5.95	0.50	12	石囲埋甕	2	無	○	勝末～EⅠ	214
SJ 30	Ⅱ	R-13・14	—	—	[3.50]	[3.40]	[0.45]	4		2	無	○	EⅠ後	110
SJ 31	Ⅱ	P-12	N-22°-W	不整円	4.92	4.84	0.45	20	地床	2	無		勝中～新	220
SJ 32	Ⅱ	O-12・13、P-12	N-43°-W	不整方	6.09	5.93	0.29	31	石囲	2	無	○	EⅠ後	230
SJ 33	Ⅱ	N-O-11・12	N-55°-W	楕円	5.90	5.10	0.30	23	埋甕	1	無		勝中～新	235
SJ 34	Ⅱ	O-10・11	N-35°-W	隅丸方	5.04	4.83	0.38	11	地床	1	無	○	EⅡ前	252
SJ 35	Ⅱ	O-10	N-15°-W	円	6.60	6.35		39	石囲埋甕	7	無	○	勝末～EⅠ	255
SJ 36	Ⅱ	O-9	N-24°-E	—	—	—	—	5	埋甕	1	無		EⅡ後	264
SJ 37	Ⅱ	M-N-12・13	N-41°-W	楕円	5.62	4.85	0.35	23	埋甕	2	無	○	勝新	266
SJ 38	Ⅱ	N-12	N-57°-W	不整円	3.21	3.11	0.23	8	地床	1	無		勝中～新	272
SJ 39	Ⅱ	P-11・12	N-70°-W	不整楕円	4.80	4.35	0.25	22	埋甕	3	無	○	勝末～EⅠ	276
SJ 40	Ⅱ	P-12(Q-12)	N-0°	—	—	—	—	18	石囲	2	有		EⅢ後	292
SJ 41	Ⅱ	M-11・12	N-18°-W	円	3.65	(3.65)	0.45	6	埋甕	1	無		勝中	295
SJ 42	Ⅱ	M-12	N-50°-W	—	5.50	(3.05)	0.50	20	石囲埋甕	3	無	○	勝末～EⅠ	295
SJ 43	Ⅱ	P-Q-12・13	—	—	—	—	—	11	地床	1	無		EⅢ前	313
SJ 44	Ⅱ	N-O-11	N-37°-W	楕円	6.60	6.10	0.53	50	石囲埋甕	4	無	○	勝末～EⅠ	314
SJ 45			—	不整円	4.62	(2.82)	0.37			1	無		勝中	314
SJ 46	Ⅱ	O-P-11	N-69°-W	楕円	5.57	4.95	0.60	19	地床	3	無	○	勝新	325
SJ 47	Ⅱ	O-9・10、P-9	N-28°-W	円	3.17	3.36	0.25	5	埋甕	1	無		勝新	342
SJ 48	Ⅱ	Q-R-13	—	—	—	—	—	6		1	無			344
SJ 49	Ⅱ	Q-R-11・12	—	—	—	—	—	12	地床	1	無			346
SJ 50	Ⅱ	M-12	—	—	4.30	(2.20)	0.50	5	地床	1	無		勝中	295

遺構名	区	グリッド	主軸方向	平面形	長径(m)	短径(m)	壁高(m)	柱穴	炉跡	床数	埋甕	壁溝	時期	図番
SJ 51	Ⅲ	G･H-21･22	N-13° -W	六角	6.65	6.25	0.45	15	地床	2	無	○	勝末～ＥⅠ	382
SJ 52	Ⅲ	G･H-21	N-3° -W	楕円	6.03	5.55	0.35	29	地床	3	無	○	勝新	387
SJ 53	Ⅲ	I-21･22、J-22	N-21° -W	楕円	6.03	5.50	0.60	32	地床	3	無		勝中～新	399
SJ 54	Ⅲ	I-21	N-30° -W	楕円	5.80	(5.70)	0.70	23		1	無		勝中	420
SJ 55	Ⅲ	G-21	N-30° -W	楕円	3.10	2.65	0.20	無	地床	1	無		勝古	425
SJ 56	Ⅲ	I-19･20、J-19	N-48° -W	隅丸方	5.94	5.36	0.32	17	地床	2	無	○	勝新	428
SJ 57	Ⅲ	I･J-20･21	N-43° -W	楕円	5.68	5.17	0.47	26	埋甕	2	無		勝中～新	437
SJ 58	Ⅲ	I-17･18	N-0°	楕円	5.00	4.70	0.25	9		1	無		勝中～新	443
SJ 59	Ⅲ	I･J-18	N-14° -W	楕円	5.42	4.98	0.35	11	埋甕	2	無		勝新	464
SJ 60	Ⅲ	I･J-18	N-14° -W	楕円	4.55	(3.63)	0.30	8	埋甕	3	無		勝中	473
SJ 61	Ⅲ	J-17･18	N-80° -W	円	5.30	5.30	0.50	17	石囲	2	無	○	勝新	479
SJ 62	Ⅲ	H･I-19	N-14° -W	楕円	6.73	6.58	0.45	29	石囲	5	無	○	ＥⅠ後	486
SJ 63	Ⅲ	H･I-18･19	N-0°	楕円	6.00	6.00	0.50	13	1 埋甕 3 地床	3	無		勝古	494
SJ 64	Ⅲ	I･J-19	N-24° -W	楕円	[5.10]	4.70	0.50	14	1 石囲 2 埋甕	2	無		勝新	505
SJ 65	Ⅲ	I-19	N-24° -W	楕円	(3.70)	3.90	0.30	11	埋甕	2	無		勝中～新	505
SJ 66	Ⅲ	H-18	N-52° -W	不整円	3.70	3.57	0.25	4	地床	1	無		勝中	524
SJ 67	Ⅲ	I･J-17	N-35° -W	不整円	[4.09]	3.74	0.55	13	埋甕	2	無		勝中	526
SJ 68	Ⅲ	J･K-20･21	N-0°	隅丸方	5.20	5.00	0.50	16	石囲	2	無	○	ＥⅠ後	532
SJ 69	Ⅱ	N-10	N-61° -E	不整楕円	2.33	2.27	0.12	6		1	無		勝中	348
SJ 70・71	Ⅱ	P-11･12	—	—	—	—	—	14		2	無			349
SJ 72・73	Ⅱ	P-12･13	—	—	—	—	—	18	地床	2	無		勝中(SJ72)	349
SJ 74	Ⅱ	L-10(11)	—	—	—	—	—	11	地床	1	無			352
SJ 75	Ⅱ	P-12	N-28° -W	—	2.20	(1.36)	0.24	6		1	無		勝新	220
SJ 76	Ⅱ	Q-12･13	N-36° -W	—	[4.80]	5.93	0.29	11	地床	1	無			353
SJ 77	Ⅳ	M-12･13	N-41° -W	楕円	5.20	[5.00]	0.35	19	石囲	2	無		勝古	547
SJ 78	Ⅳ	L-12･13	N-25° -W	不整円	(5.80)	[2.90]	0.15	17	埋甕	3	無		勝中～新	558
SJ 79	Ⅳ	L･M-12	N-49° -W	長楕円	(4.00)	[2.40]	0.15	14	地床	2	無		勝中～新	561
SJ 80	Ⅳ	L･M-12･13	N-46° -W	楕円	(4.40)	(3.60)	0.14	14	石囲	4	無	○	勝末～ＥⅠ	563

第247表　集石土壙一覧表

遺構名	グリッド	区	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	礫総重量(Kg)	時期	重複遺構	図番
SC 1	T-9・10	II	楕円	N-45° -E	1.50	(1.32)	0.33	0.3	勝新		566
SC 2	T-9	II	楕円	N-42° -E	0.90	(0.75)	0.27	10.1	勝末～EⅠ		566
SC 3	T-10	II	楕円	N-33° -W	1.37	1.16	0.15	14.0	EⅠ後		566
SC 4	S-10	II	楕円	N-32° -E	1.33	1.00	0.20	6.8	勝末～EⅠ	SJ7・8(旧)	567
SC 5	Q-9・10	II	不整円	N-28° -E	1.34	1.25	0.31	58.9	勝末～EⅠ		567
SC 6	R-10	II	円	N-52° -W	0.74	0.66	0.15	3.5	—		567
SC 7	Q-10	II	楕円	N-30° -E	1.76	1.58	0.27	21.1	EⅢ		570
SC 8	P-10	II	不整	N-8° -W	1.85	1.10	0.20	17.6	勝中～新		570
SC 9	S-10	II	不整楕円	N-13° -W	1.47	1.44	0.60	37.5	勝中～新		567
SC 10	R・S-11	II	円	N-40° -E	1.06	0.98	0.15	11.5	勝新		571
SC 11	J-22・23	III	不整	N-90° -E	1.35	1.12	0.17	22.1	勝古		592
SC 12	K-21	III	楕円	N-35° -E	0.78	0.55	0.12	9.7	EⅠ後		592
SC 13	K-21	III	不整	N-25° -E	0.50	0.40	0.08	5.0	勝中～新		592
SC 14	L-20	III	楕円	N-82° -E	0.93	0.70	0.08	10.2	EⅠ後		592
SC 15	L-20	III	不明	N-83° -W	0.78	(0.27)	0.33	4.9	—	SK21(新)	592
SC 16	R・S-10・11	II	不整	N-52° -W	1.25	0.06	0.16	17.7	勝新		571
SC 17	P-9・10	II	不整円	N-6° -E	1.53	(1.40)	0.30	189.1	勝新	SC18(旧) SC37(旧)	571
SC 18	P-9	II	楕円	N-8° -E	1.42	1.21	0.36	134.0	勝中～新	SC17(新)	571
SC 19	Q-13	II	不整円	N-30° -E	0.85	0.80	0.14	18.4	EⅠ後	Q13-P1(旧)	573
SC 20	Q-13	II	不整楕円	N-35° -E	1.42	1.21	0.24	65.3	EⅢ		573
SC 21	N-9	II	円	N-22° -E	0.86	0.80	0.20	6.9	勝古	SJ27(旧) SC28(不明)	573
SC 22	O-9	II	不整	N-67° -W	1.00	0.75	0.20	12.9	勝新	SJ27(旧)	573
SC 23	O-10	II	楕円	N-76° -E	1.39	1.08	0.20	26.6	勝新		574
SC 24	O-10	II	隅丸方	N-60° -W	1.23	0.94	0.20	13.8	勝中～新		574
SC 25	P-12	II	円	N-53° -W	1.09	1.04	0.31	70.0	勝新	SK38(旧)	574
SC 26	P-12	II	円	N-53° -W	0.84	0.71	0.15	15.6	勝新	SK38(旧)	575
SC 27	P-12	II	円	N-78° -W	1.36	1.24	0.15	34.0	EⅢ	SJ39(旧) SJ70炉(旧)	575
SC 28	N・O-9	II	不整円	N-73° -W	1.08	1.00	0.32	45.8	勝末～EⅠ	SJ27(旧) SC21(不明)	575
SC 29	P-12	II	不整円	N-4° -W	0.91	0.77	0.39	67.0	勝新		575
SC 30	O-12	II	円	N-88° -E	1.05	0.99	0.24	17.9	勝中～新		575
SC 31	M・N-11	II	円	N-42° -W	1.26	1.12	0.36	164.4	勝中～新		578
SC 33	L・M-9	II	楕円	N-28° -E	1.23	0.99	0.14	35.6	EⅢ		578
SC 34	M・N-10	II	不整円	N-25° -E	1.17	1.06	0.37	54.1	—		579
SC 35	N-12	II	円	N-75° -W	0.85	0.77	0.51	12.2	EⅠ後		578
SC 36	L-9	II	楕円	N-86° -W	0.88	0.75	0.08	12.7	勝中		579
SC 37	P-10	II	円	N-13° -E	1.02	1.02	0.18	16.5	勝古	SC17(新)	579
SC 38	O-12	II	円	N-8° -W	0.86	0.80	0.21	19.6	勝末～EⅠ		579
SC 39	P-13	II	楕円	N-64° -E	0.94	0.71	0.13	18.5	EⅢ		581
SC 40	N-11	II	不整	N-10° -W	1.10	0.95	0.23	18.8	EⅢ	SJ44(旧)	581
SC 41	O-10	II	不明	—	(0.78)	(0.65)	0.25	24.9	EⅠ後	SJ35(旧)	581
SC 42	O-10	II	不整	N-46° -E	0.75	0.74	0.45	41.7	勝新	SJ35炉	581
SC 43	P-10	II	円	N-45° -W	0.85	0.84	0.11	10.1	勝新		581
SC 44	P-10	II	不整	N-40° -W	1.39	1.03	0.07	17.9	EⅢ		581
SC 45	P-11	II	円	N-22° -W	(0.82)	0.78	0.10	4.7	EⅢ	SJ46(旧)	583
SC 46	L-10・11	II	円	N-25° -W	0.85	0.80	0.17	0.6	—		583
SC 47	Q-12	II	楕円	—	1.10	1.07	0.35	60.4	EⅢ	SJ76(埋甕)(新)	583
SC 48	O・P-9・10	II	円	—	0.98	(0.97)	0.40	46.0	勝中	※元SK65 SJ47(不明)	583
SC 49	R-11	II	楕円	N-25° -E	1.13	1.05	0.24	16.2	—		583
SC 51	D-20	III	円	N-46° -E	1.12	1.03	0.32	68.8	勝中		592

遺構名	グリッド	区	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	繊維重量(Kg)	時期	重複遺構	図番
SC 52	D-19	Ⅲ	不整	N-80° -W	1.61	1.43	0.45	127.2	—		593
SC 53	D-20	Ⅲ	楕円	N-35° -W	1.46	1.25	0.41	146.2	—		593
SC 54	D-19	Ⅲ	円	N-50° -E	1.28	1.25	0.35	70.6	勝中		596
SC 55	E-20	Ⅲ	楕円	N-42° -E	1.32	1.07	0.35	102.3	勝中		596
SC 56	I-22	Ⅲ	不整	N-45° -W	(1.07)	(0.96)	0.33	141.4	勝中～新	SJ53（旧）	597
SC 57	I-22	Ⅲ	楕円	—	(1.02)	(0.90)	0.32	39.2	勝中～新	SJ53（旧）	597
SC 58	I-22	Ⅲ	楕円	N-85° -E	1.20	0.90	0.20	101.4	勝中～新	SJ53（旧）	597
SC 59	H-22	Ⅲ	不整	N-90° -E	1.53	1.42	0.37	100.4	勝新		599
SC 60	H-20	Ⅲ	楕円	N-90° -E	1.16	1.10	0.18	40.4	勝古		599
SC 61	H-20	Ⅲ	円	N-76° -E	0.94	0.90	0.40	87.6	勝古		599
SC 62	I-20	Ⅲ	楕円	N-3° -E	1.19	1.00	0.35	108.0	勝末～ＥⅠ		600
SC 63	J-20	Ⅲ	不明	—	0.55	(0.30)	0.12	6.5	勝新	SJ57(旧)	600
SC 64	J-20	Ⅲ	楕円	N-42° -W	0.59	0.51	0.12	11.6	勝古		600
SC 65	J-20	Ⅲ	円	N-21° -E	0.77	0.72	0.13	8.0	勝中～新		600
SC 66	K-18	Ⅲ	楕円	—	0.90	0.88	0.40	83.7	ＥⅢ		600
SC 67	K-18・19	Ⅲ	不整	N-25° -E	0.85	0.71	0.20	19.2	勝古		600
SC 68	K-18	Ⅲ	不整	N-50° -E	1.46	0.99	0.19	17.0	勝中～新		603
SC 69	I-20	Ⅲ	不整	N-83° -W	1.10	0.93	0.17	33.5	勝古		603
SC 70	G・H-21	Ⅲ	不明	—	0.66	(0.34)	0.10	3.5	勝新	SJ52(新)SD3(新) Pit状遺構(新)	603
SC 71	I・J-19	Ⅲ	不明	—	0.55	(0.36)	0.15	7.9	勝末～ＥⅠ	SJ65(旧)	603
SC 72	H-15	Ⅲ	円	N-78° -W	1.65	1.49	0.57	409.6	勝新		603
SC 73	H-14・15	Ⅲ	不整	N-0°	1.37	1.06	0.10	13.4	勝中		604
SC 74	H-15	Ⅲ	楕円	N-75° -E	1.38	0.94	0.10	3.8	勝古		604
SC 75	H-20	Ⅲ	楕円	N-58° -W	1.07	0.94	0.24	64.0	勝古		604
SC 76	I-17	Ⅲ	不整	N-63° -E	0.99	0.79	0.07	12.6	勝中		604
SC 77	H-19	Ⅲ	不整	N-37° -W	1.39	1.18	0.20	56.0	勝中～新		605
SC 78	H-19	Ⅲ	楕円	N-50° -E	1.53	1.12	0.24	17.5	勝新		605
SC 79	H-19	Ⅲ	楕円	N-51° -E	2.14	1.61	0.29	81.5	勝新		605
SC 80	H-19	Ⅲ	楕円	N-7° -E	0.92	0.60	0.16	5.4	勝古		605
SC 81	I-19	Ⅲ	不明	—	—	—	0.20	17.0	勝古	SK132(旧)SJ62・63(新)	606
SC 82	H-19・20	Ⅲ	楕円	N-13° -E	1.67	1.56	0.35	219.4	勝古		606
SC 83	J-20	Ⅲ	楕円	N-4° -W	1.40	1.17	0.35	55.7	ＥⅡ		606
SC 84	J-19	Ⅲ	円	N-41° -E	0.74	0.69	0.20	13.5	勝古		609
SC 85	H-20	Ⅲ	不整	N-40° -W	0.86	0.83	0.22	2.6	勝中		609
SC 86	J-19・20	Ⅲ	不整	N-57° -W	1.26	0.90	0.19	15.4	勝中～新		609
SC 87	I-17	Ⅲ	不明	N-19° -W	1.18	(0.78)	0.16	8.1	ＥⅡ		609
SC 88	O-12	Ⅱ	円	N-50° -W	0.47	0.45	0.32		ＥⅠ後	SJ32(旧)	585
SC 89	O-11	Ⅱ	円	N-8° -W	0.62	0.55	0.15		ＥⅡ	SJ34(旧)	585
SC 90	L-12	Ⅳ	円	N-54° -W	0.83	0.82	0.43		勝新		609

第248表　縄文時代の土壙一覧表

遺構名	グリッド	区	時期	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	重複遺構	図番
SK 16	S・R-10	II	縄文	円	N-24° -E	1.20	1.17	0.82		618
SK 19	P-9	II	不明	不整	N-30° -W	1.65	1.03	0.40	SJ16(旧)	618
SK 21	L-20	III	不明	不整	N-68° -W	1.40	1.05	0.50	SC15(旧)	625
SK 22	L-20	III	不明	楕円	N-50° -E	0.94	0.76	0.29		625
SK 23	L-20	III	不明	楕円	N-39° -W	1.08	0.67	0.17		627
SK 24	L-20	III	不明	円	N-54° -W	0.94	0.91	0.42		627
SK 25	K・L-20	III	不明	楕円	N-5° -E	0.81	0.69	0.23		627
SK 26	H-24	III	不明	楕円	N-53° -W	0.93	0.80	0.30		627
SK 27	I-22・23	III	不明	楕円	N-25° -W	1.38	1.18	0.30		627
SK 29	O・P-8	II	不明	楕円	N-7° -E	1.10	0.82	0.15		618
SK 30	R-6	II	不明	楕円	N-61° -E	1.02	0.92	0.27		618
SK 32	Q-7	II	不明	隅丸方	N-42° -W	0.97	0.92	0.22		618
SK 33	S-9	II	不明	円	N-23° -E	0.97	0.90	0.31		618
SK 34	S-9	II	不明	楕円	N-17° -W	1.18	(0.97)	0.28	SK35新旧不明	618
SK 35	S-9	II	不明	楕円	N-37° -E	(1.25)	(1.08)	0.22	SK34新旧不明　SJ7・8(新)	618
SK 36	S-11	II	縄文	楕円	N-33° -W	0.54	0.29	(0.27)	SJ4(旧)	618
SK 38	P-12	II	縄文	楕円	N-73° -W	1.33	1.06	0.23	SD2(新)　SC25・26(新)	618
SK 41	R-11・12	II	縄文	円	N-59° -E	1.00	0.95	0.57		618
SK 43	R-11	II	不明	円	N-33° -E	0.72	0.63	0.40		619
SK 45	R-11	II	不明	円	N-88° -E	0.84	0.74	0.26		619
SK 47	P・Q-10	II	不明	円	N-1° -E	0.68	0.65	0.21		619
SK 48	Q-10	II	縄文	楕円	N-45° -W	1.05	0.95	0.77		618
SK 49	O-11	II	不明	楕円	N-35° -W	0.95	0.77	0.15	SJ45(旧)	619
SK 50	O-11	II	不明	円	N-5° -W	1.00	(0.75)	0.12	SK57・62	619
SK 51	N-11	II	不明	円	N-90°	1.68	1.52	0.32		619
SK 52	N-12	II	不明	隅丸長方	N-30° -W	1.80	1.04	0.42		619
SK 53	O・P-11	II	不明	円か?	N-0°	1.30	(0.85)	0.10		619
SK 54	P-11	II	不明	円	N-39° -W	0.70	0.70	0.10	SJ46	619
SK 56	P-13	II	不明	楕円	N-18° -E	0.91	0.85	0.20		619
SK 57	O-11	II	不明	楕円	N-83° -E	(1.75)	1.40	0.20	SJ34　SK50・62	619
SK 58	P-13	II	不明	不整	N-41° -E	1.22	1.18	0.45		619
SK 59	P-11	II	不明	不明	N-45° -W	1.60	(0.40)	0.10	SJ29・46	622
SK 60	N-11	II	縄文	不整	N-52° -E	1.20	(0.90)	0.20	SJ44(新)	622
SK 61	N-11	II	縄文	不整	N-55° -W	1.95	(0.63)	0.40	SJ44(新)	622
SK 62	O-11	II	不明	楕円	N-48° -W	0.70	0.60	(0.15)	SK50・57	619
SK 64	R-11	II	不明	円	N-45° -W	1.34	1.30	0.28		622
SK 101	E-24	III	不明	長楕円	N-27° -W	1.40	0.82	0.15		627
SK 103	G-23	III	縄文	楕円	N-67° -W	1.53	1.02	0.86		625
SK 104	D-24・25	III	縄文	楕円	N-40° -E	3.10	2.75	0.20		625
SK 105	G・H-22	III	不明	楕円	N-71° -E	1.15	0.98	0.22		627
SK 106	F-21	III	不明	円	N-54° -E	1.50	1.50	0.20		627
SK 107	F-21	III	不明	楕円	N-46° -E	0.90	0.63	0.25		627
SK 108	H-23	III	不明	円	N-46° -E	1.07	0.95	0.31		627
SK 109	G-21	III	不明	円	N-45° -E	1.10	0.93	0.28		627
SK 111	F-21	III	不明	円	N-45° -E	1.85	1.70	0.18		627
SK 112	F-20・21	III	不明	楕円	N-42° -E	1.12	0.90	0.26		628
SK 114	I-21	III	縄文	円	N-6° -W	1.55	1.55	0.65	SJ54(旧)	625
SK 115	H-19	III	不明	円	N-24° -W	1.30	1.27	0.22		628
SK 116	I-18	III	不明	楕円	N-34° -W	0.95	0.80	0.05	SJ58	628
SK 119	G-19	III	不明	楕円	N-28° -E	1.15	0.98	0.13		628

遺構名	グリッド	区	時期	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	重複遺構	図番
SK 120	F・G-19	Ⅲ	不明	円	N-2° -W	1.10	1.00	0.25		628
SK 122	H-16	Ⅲ	不明	楕円	N-5° -E	1.18	0.96	0.21		628
SK 123	H-17	Ⅲ	不明	楕円	N-41° -E	1.52	1.20	0.49		628
SK 124	I・J-19	Ⅲ	縄文	楕円	N-55° -E	0.93	0.76	0.52	SJ64(新)	625
SK 126	J-21	Ⅲ	不明	円	N-10° -E	1.53	1.40	0.25		628
SK 127	H-19	Ⅲ	不明	楕円	N-59° -E	1.37	1.07	0.17		628
SK 128	G-18	Ⅲ	不明	楕円	N-18° -E	1.18	1.02	0.50		628
SK 130	I-20	Ⅲ	不明	楕円	N-42° -W	1.22	1.04	0.23		628
SK 131	I-19	Ⅲ	不明	楕円	N-31° -W	1.15	1.10	0.21		628
SK 132	I-19	Ⅲ	縄文	不明	—	—	—	0.35	SJ62・63　SC81(新)	625
SK 133	L-13	Ⅳ		楕円	N-38° -E	1.56	1.11	0.15		628

第249表　中・近世の土壙一覧表

遺構名	グリッド	区	時期	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	重複遺構	図番
SK 11	T-11	Ⅱ	中・近	不整	N-80° -W	3.45	3.30	2.00	地下式壙	645
SK 12	U-10	Ⅱ	中・近	楕円	N-12° -E	4.32	2.98	1.55	地下式壙	646
SK 13	S・T-9	Ⅱ	中・近	不整	N-30° -W	3.93	2.90	1.90	地下式壙	649
SK 1	U-6	Ⅰ	中・近	隅丸長方	N-58° -W	2.38	1.09	0.22		652
SK 2	U-7	Ⅰ	中・近	長楕円	N-41° -E	2.10	0.88	0.15	SJ2(旧)	652
SK 3	T・U-4	Ⅰ	中・近	方	N-46° -E	1.33	0.95	0.20		652
SK 4	T-6・7	Ⅰ	中・近	隅丸長方	N-39° -W	2.40	1.09	0.11		652
SK 5	S-5	Ⅰ	中・近	円	N-63° -W	0.85	0.80	0.50		652
SK 6	T-6	Ⅰ	中・近	長楕円	N-61° -W	2.58	1.26	0.23		652
SK 7	T-5	Ⅰ	中・近	隅丸長方	N-65° -E	3.83	2.05	0.53	SJ1(旧)	652
SK 8	U-10	Ⅱ	中・近	長楕円	N-56° -E	2.16	(1.35)	0.33	攪乱	653
SK 9	V-9・10	Ⅱ	中・近	不明	N-46° -E	(3.03)	4.65	0.82		653
SK 10	U-8	Ⅱ	中・近	楕円	N-55° -E	4.05	3.11	0.21		653
SK 14	S-10	Ⅱ	中・近	円	N-79° -W	0.96	0.96	0.65	SJ7(旧)	653
SK 15	S-13	Ⅱ	中・近	方	N-46° -E	0.94	0.80	(0.34)	SJ5(旧)	654
SK 17	R-9	Ⅱ	中・近	隅丸方	N-70° -W	1.07	0.72	0.30	SJ9・14(旧)	654
SK 18	Q-8	Ⅱ	中・近		N-50° -W	1.25	1.08	0.42	SJ15(旧)	654
SK 20	P-9	Ⅱ	中・近	隅丸長方?	N-40° -E	1.20	0.65	0.50	SJ16(旧)	654
SK 28	O-9、P-8・9	Ⅱ	中・近	隅丸長方	N-28° -E	4.32	0.95	0.15		654
SK 31	Q-6・7	Ⅱ	中・近	円	N-32° -W	0.85	0.78	0.15		654
SK 37	T-11	Ⅱ	中・近	楕円	N- 4° -E	1.34	1.08	0.22		654
SK 39	O-9	Ⅱ	中・近	隅丸長方	N-57° -E	1.27	0.84	0.33	SJ36P3	654
SK 40	O-9	Ⅱ	中・近	隅丸長方	N-55° -E	1.58	0.60	0.09		654
SK 42	R-12	Ⅱ	中・近	楕円	N-60° -W	0.70	0.60	0.26		654
SK 44	R-13	Ⅱ	中・近	円	N-35° -W	1.32	1.24	0.40		654
SK 46	P-10	Ⅱ	中・近	楕円	N-41° -W	0.95	0.75	0.15		654
SK 55	Q-11	Ⅱ	中・近	楕円	N-72° -E	1.13	1.00	0.33	SJ46	654
SK 63	O-13	Ⅱ	中・近	不整	N-45° -W	2.51	1.03	0.18		655
SK 66	R-11	Ⅱ	中・近	楕円	N-70° -W	1.10	0.85	0.15		655
SK 67	R-12	Ⅱ	中・近	隅丸長方	N-57° -E	3.13	0.78	0.22		655
SK 68	Q-14	Ⅱ	中・近	円	N-70° -E	0.90	0.85	0.17		655
SK 69	K・L-10	Ⅱ	中・近	隅丸長方	N-50° -E	2.53	0.93	0.08		655
SK 70	P-12	Ⅱ	中・近	円	N-18° -W	0.40	0.39	0.20		655
SK 102	F-24	Ⅲ	中・近	楕円	N-89° -W	1.72	0.83	0.30		656
SK 110	G-21	Ⅲ	中・近	円	N-47° -W	0.85	0.84	0.25	SJ55	656
SK 117	H-19	Ⅲ	中・近	円	N-23° -E	0.73		0.23		656
SK 118	G-19	Ⅲ	中・近	楕円	N-39° -E	0.92	0.84	0.13		656
SK 121	I-16	Ⅲ	中・近	円	N-58° -E	1.17	1.16	0.15		656
SK 125	J-21	Ⅲ	中・近	円	N-48° -E	1.15	1.05	0.25		656
SK 129	I-17	Ⅲ	中・近	円	N-75° -E	1.19	1.17	0.13	SJ58	656

Ⅵ　自然科学分析

向原Ａ遺跡、芦苅場遺跡は標高78m前後の入間台地南側の南小畔川沿いに位置する縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落遺跡である。調査の結果、両遺跡を合わせると90軒弱の住居跡が確認されている。多くの比較的堅牢な住居跡の他に、焼けた礫の詰まったいわゆる集石土壙が多数検出されている。

そこで、住居跡の構築された時期の暮らしについて、集石土壙から出土した炭化物から、材の同定や年代測定を行い、また、土器に見られる植物の種子圧痕から該期の植生環境や、食料事情等を復元することを目的として、自然科学的分析を行った。

１　材同定

（１）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。また、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。

埼玉県飯能市芦苅場字久保に位置する芦苅場遺跡第２・３次調査では、縄文時代中期と考えられる集石土壙が出土している。ここでは、土壙から検出された炭化材について樹種同定を行い、当時の木材利用ならびに周辺植生について検討する。

（２）試料

試料は、集石土壙のうち、SC18、SC25、SC37、SC42、SC82から検出された炭化材５点である。いずれも接合不可能な多数の破片がある中から、それぞれ最大片1点を抽出した。このうち、SC-18とSC-82の炭化材については、放射性炭素年代測定を実施した。

（３）方法

各試料について、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

第250表　樹種同定結果

遺構	位置	形状	種類	備考
SC-18	南側	不定形破片	クリ	年代測定と同一破片
SC-25	－	不定形破片	クリ	
SC-37	－	不定形破片	クリ	
SC-42	－	不定形破片	クリ	
SC-82	－	不定形破片	クリ	年代測定と同一破片

（４）結果

樹種同定結果を第250表に、各断面の顕微鏡写真を図版に示す。炭化材は、全て広葉樹のクリに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.*　**ブナ科クリ属**

環孔材。大型の道管が配列する孔圏部は３－４列、道管は孔圏外で急激に径を減じたのち、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列（希に２列）、１～15細胞高。

（５）考察

５基の集石土壙から検出された炭化材は、いずれも不定形の小破片が多数認められる。各試料から抽出した炭化材は、いずれも広葉樹のクリに同定された。クリは二次林等に生育する落葉高木

であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。

各試料について、抽出試料以外の破片も一通り観察したが、全てクリの破片であり、クリ以外の種類は確認されなかった。これらのことから、各集石土壙では、燃料材としてクリを利用したことが推定される。

伊東・山田(2012)のデータベースによれば、埼玉県内では中耕遺跡(坂戸市)や亀居遺跡(旧大井町)で縄文時代中期の集石土壙から出土した炭化材について樹種同定が実施されている。その結果をみると、中耕遺跡は1基の集石土壙から出土した2点がいずれもクリ類似種、亀居遺跡は3基の土壙から出土した各1点がクヌギ節、クリ、キハダに同定されている。また、本遺跡に比較的近い地域では、雨間地区遺跡や松海道遺跡(あきる野市)においても縄文時代中期の集石土壙から出土した炭化材の調査例があり、クリが多く、他にクヌギ節、コナラ節、オニグルミが確認されている。

集石土壙の炭化材にクリを中心としながらも他の種類が利用される状況や、クリが縄文時代の建築部材にも多用されている状況等を考慮すると、利用頻度の高い種類や集落周辺に生育して入手が容易な種類等が燃料材として利用されたことが推定される。

なお、縄文時代にクリが多用される背景には、管理栽培の可能性が指摘されている(千野, 1983)。三内丸山遺跡(青森県青森市)では、実際にクリ林の存在を示唆するような結果も得られている(吉川, 2011)。また、縄文時代の磨製石斧を復元した伐採実験では、クリ材が効率的に伐採できることが確認されており、クリ利用の背景に伐採道具が関連していたことも指摘されている(工藤, 2004)。

引用文献

千野裕道　1983『縄文時代のクリと集落周辺植生　－南関東地方を中心に－』「東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ」財団法人東京都埋蔵文化財センター　25-42.

伊東隆夫　1995『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31』京都大学木質科学研究所　81-181.

伊東隆夫　1996『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32』京都大学木質科学研究所　66-176.

伊東隆夫　1997『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33』京都大学木質科学研究所　83-201.

伊東隆夫　1998『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34』京都大学木質科学研究所　30-166.

伊東隆夫　1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35』京都大学木質科学研究所　47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編)　2012『木の考古学』出土木製品用材データベース　海青社　444p.

工藤雄一郎　2004『縄文時代の木材利用に関する実験考古学的研究 －東北大学川渡農場伐採実験－』『植生史研究, 12』日本植生史学会　15-28.

島地　謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』地球社　176p.

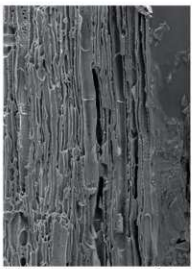
林　昭三　1991『日本産木材』『顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.

吉川昌伸　2011『クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況. 植生史研究, 18』日本植生史学会　63-76.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編）1998『広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社　122p.

[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.　1989『IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification』]

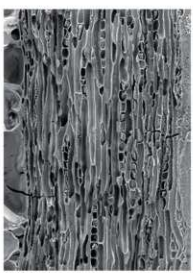
横断面　0.1 mm
クリ　SC-18


放射断面　0.1 mm

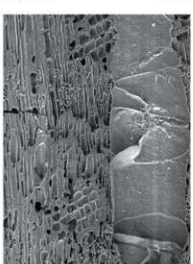
接線断面　0.1 mm

横断面　0.1 mm
クリ　SC-37

放射断面　0.1 mm


接線断面　0.1 mm

横断面　0.1 mm
クリ　SC-82


放射断面　0.1 mm

接線断面　0.1 mm

第668図　芦苅場遺物出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

2　放射性炭素（^{14}C）年代測定（AMS法）

（1）はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間の経過とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約６万年前までの年代測定が可能である。なお、過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、芦苅場遺跡第２・３次調査で出土した集石土壌より検出された炭化材について、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、土壌の年代について検討する。

（2）試料と方法

測定試料は、集石土壌のうち、SC18とSC82から検出された炭化材２点である。第251表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。測定は、試料の前処理・調整後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて行った。

（3）結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第252表にこれらの結果を示し、第669図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

①δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

②放射性炭素（^{14}C）年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差（±）は１σ（68.2%確率）である。^{14}C年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

③暦年代（Calendar Years）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素（^{14}C）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較

第251表　測定試料及び処理

試料番号	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
1	芦苅場遺跡　SC18	炭化材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸洗浄	AMS
2	芦苅場遺跡　SC82	炭化材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸洗浄	AMS

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

第252表　測定試料結果

試料番号	測定№	δ^{13}C	暦年較正用年代	^{14}C年代	暦年代（西暦）	
	(PED-)	(‰)	(年BP)	(年BP)		2σ（95.4%確率）
1	39945	-25.91±0.24	4404±21	4405±20	3089-3057 cal BC (24.6%) 3031-3009 cal BC (16.6%) 2983-2936 cal BC (27.1%)	3092-2928 cal BC (95.4%)
2	39946	-28.43±0.23	4400±21	4400±20	3086-3061 cal BC (18.4%) 3030-3007 cal BC (16.3%) 2987-2933 cal BC (33.5%)	3091-2926 cal BC (95.4%)

BP：Before Physics（Present），BC：紀元前

正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムはOxCal 4.3である。

暦年代（較正年代）は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1σ（68.2%確率）と2σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。（ ）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（4）所見

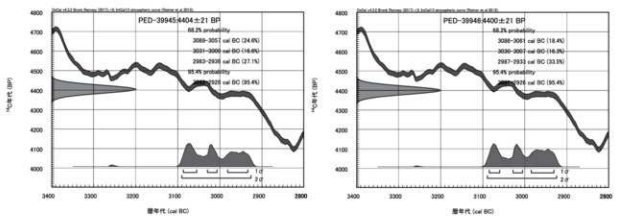
芦苅場遺跡第2・3次調査で出土した集石土壙の年代を検討する目的で、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、SC18の炭化材は、4405±20年BP（2σの暦年代でBC 3092～2928年）、SC82の炭化材は、4400±20年BP（同BC 3091～2926年）の年代値であった。

参考文献

中村俊夫 2000『放射性炭素年代測定法の基礎 日本先史時代の14C年代編集委員会編』「日本先史時代の14C年代」日本第四紀学会 p.3-20.

Bronk Ramsey, C 2009「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1) 337-360.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J 2013『IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon』55(4) 1869-1887.



第669図 暦年較正結果

3　レプリカ・セム法による土器圧痕分析

（1）はじめに

埼玉県飯能市芦苅場に所在する芦苅場遺跡第２・３次調査では、圧痕の認められる土器が多数出土している。ここでは、縄文時代中期の土器に確認された圧痕を、レプリカ法によって同定し、当時の植物利用について検討する。

（2）試料と方法

試料は、予め選択された土器片54点、45個体分である。土器の時期は、縄文時代中期である。

はじめに、土器の外面と内面、断面の圧痕について実体顕微鏡で観察したうえで、大きさや形から種実の可能性があると判断した圧痕のうち、代表的な圧痕20箇所について、丑野・田川（1991）を参考としてレプリカを作製した。

レプリカの作製にあたっては、まず圧痕内を水で洗い、パラロイドB72の９％アセトン溶液を離型剤として圧痕内および周辺に塗布した後、シリコン樹脂（JMシリコン　レギュラータイプ）を圧痕部分に充填した。レプリカ作製後は、アセトンを用いて圧痕内および周囲の離型剤を除去した。次に、作製したレプリカについて実体顕微鏡下で観察し、同定を行った。圧痕のレプリカは、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製　超深度マルチアングルレンズHX-D500/D510）で撮影した。レプリカの大きさは、実体顕微鏡下でデジタルノギスを用いて計測した。土器は、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

（3）結果

圧痕レプリカは、11個体分の土器片から20点作製した。確認された分類群は、木本植物ではトチノキ？幼果１点とミズキ核３点の２分類群４点、草本植物ではダイズ属種子３点とササゲ属アズキ亜属種子６点（？を含む）、シソ属果実７点の３分類群16点の計５分類群20点であった（第253表）。

以下、圧痕について記載を行い、図版に走査型電子顕微鏡写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

①トチノキ？　*Aesculus turbinata Blume*?　幼果　ムクロジ科

上面観は円形、側面観は倒卵形。果皮は３裂片からなり、裂片と裂片の接する部分は溝状。現生のムクロジ幼果との比較を行っていないため、トチノキ？とした。

②ミズキ　*Cornus controversa* Hemsl. ex Prain　核　ミズキ科

上面観は楕円形、側面観は広卵形。表面にはやや流れるような縦方向の深い溝と隆起があり、基部は大きく窪む。

③ダイズ属　*Glycine* spp.　種子　マメ科

背・腹面観は楕円形、側面観は広楕円形、上面観は楕円形。腹面には小畑ほか（2007）に示されたダイズ属の特徴である狭楕円形の臍の痕跡がある。中山・佐野（2015）によると、ツルマメと極小粒の栽培ダイズの種子表面には蜂の巣状の膜状組織が見られる。したがってここでは、臍がなくとも膜状組織に似た構造が見られる場合もダイズ属とした。

④ササゲ属アズキ亜属・ササゲ属アズキ亜属？　*Vigna* subgenus *Ceratotropis* spp. / *V.* subgenus *Ceratotropis* sp.?　種子　マメ科

腹面観と側面観は広矩形に近い楕円形、断面は三角形に近い広卵形。腹面中央から下寄りに、小畑ほか（2007）が指摘したアズキ亜属の特徴である狭楕円形の厚膜の臍がある。臍がなく、断面観のみがササゲ属アズキ亜属に似る場合は、ササゲ属アズキ亜属？とした。

⑤シソ属　*Perilla* spp.　果実　シソ科

着点側がやや平たくつぶれた倒卵体。表面には網目状隆線がある。着点は大きな円形。

（4）考察

縄文時代中期の土器に見られる圧痕について

レプリカ法により同定したところ、トチノキ？とミズキ、ダイズ属、ササゲ属アズキ亜属（？を含む）、シソ属の圧痕が確認された。ダイズ属とササゲ属アズキ亜属、シソ属は、いずれも食用として利用可能な種実である。トチノキ？は、食用にならない幼果の状態であった。ミズキやダイズ属、ササゲ属アズキ亜属、シソ属の圧痕は、縄文時代中期の東京都多摩ニュータウン遺跡群（大網ほか，2018）や埼玉県中井遺跡（上野・佐々木，2018）でも確認されている。

那須（2018）によると、現生のダイズの野生種であるツルマメの最大長は10㎜、現生のアズキの野生種であるヤブツルアズキの最大長は７㎜である。今回確認されたマメ類圧痕で、全長が計測可能なダイズ属の大きさは、試料№８が長さ3.9㎜、試料№９が長さ9.1㎜、試料№14が長さ9.9㎜であった。また、全長が計測可能なササゲ属アズキ亜属の大きさは、試料№１が長さ6.2㎜、試料№３が長さ4.5㎜、試料№４が長さ5.5㎜、試料№６が長さ3.9㎜であった。いずれも野生種のツルマメとヤブツルアズキの最大長を超えなかったが、多様なサイズのマメ類が確認された。

また、今回はササゲ属アズキ亜属とシソ属の計２点、ミズキ３点、ダイズ属１点とシソ属６点の計７点が、それぞれ各１個体分の土器片で確認された。このうち、ダイズ属とシソ属が確認された土器片については、今回は代表的な部分のみを選んでレプリカを作製したが、土器表面には７箇所以上の圧痕が見られた。この個体については、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団によりX線撮影が実施されており、土器胎土内にも多量のシソ属大の空隙が認められている。多摩ニュータウン遺跡群における圧痕調査では、表面にミズキの圧痕が３点確認された土器片を軟X線撮影したところ、土器胎土内にもさらに４点のミズキ大の空隙が確認されている（大網他，2018）。今回確認されたミズキ３点も、１片の土器で確認されたため、土器胎土内にも種実の痕跡が存在する可能性がある。

第253表　芦苅場遺跡出土土器の圧痕の同定結果（１）

分類群	部位	縄文時代中期中葉
トチノキ？	幼果	1
ミズキ	核	3
ダイズ属	種子	3
ササゲ属アズキ亜属	種子	5
ササゲ属アズキ亜属？	種子	1
シソ属	果実	7
	合計	20

引用文献

上野真由美・佐々木由香　2018『中井遺跡における縄文中期の食用植物について―レプリカ法による土器種実圧痕の同定―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要　32　1-12.

丑野　毅・田川裕美　1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24　13-36.

大網信良・守屋　亮・佐々木由香・長佐古真也　2018『土器圧痕からみた縄文時代中期における多摩ニュータウン遺跡群の植物利用と遺跡間関係（第1報）』「研究論集，ⅩⅩⅡ」　1-25.

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子　2007『土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培』『植生史研究』15-2，97-114.

中山誠二・佐野　隆　2015『ツルマメを混入した縄文土器―相模原市勝坂遺跡等の種子圧痕―』『山梨県立博物館研究紀要』9，1-24.

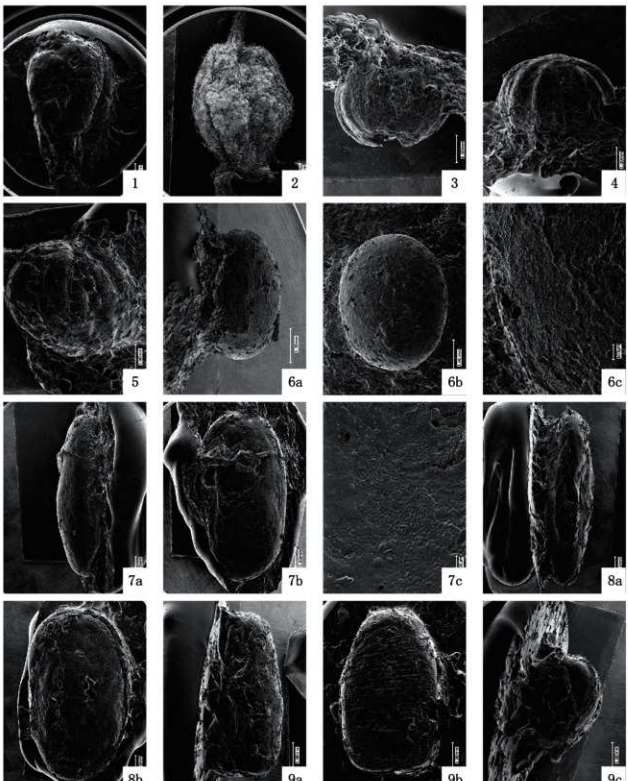
那須浩郎　2018『縄文時代の植物のドメスティケーション』『第四紀研究』　57，109-126.

米倉浩司・梶田　忠　2003-「BG Plants 和名－学名インデックス（YList）」http://ylist.info

第254表　芦苅場遺跡出土土器の圧痕の同定結果（2）

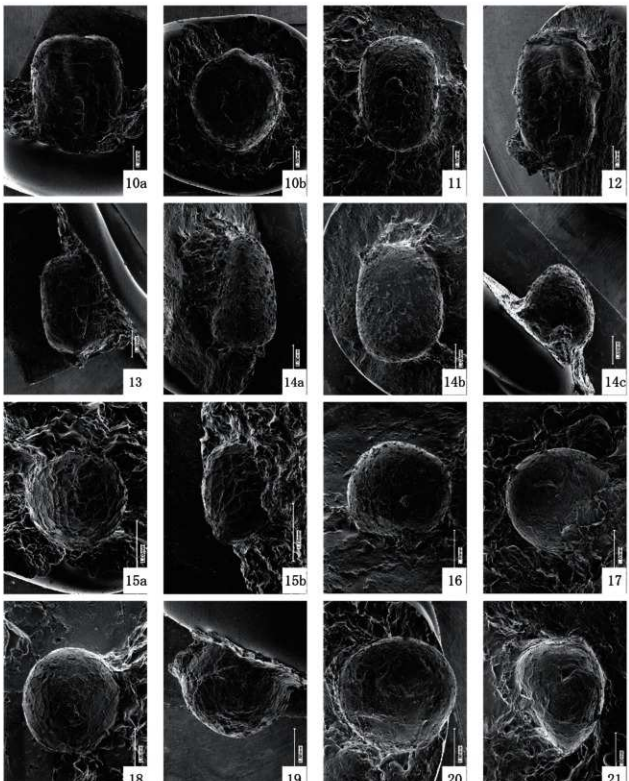
（単位はmm、括弧内は破片値）

試料No.	時期	注記	分類群	部位	長さ/長軸	幅/短軸	厚さ
1	縄文時代中期中葉	0176r	ササゲ属アズキ亜属	種子	6.2	3.7	(2.9)
2	縄文時代中期中葉	AK3.P10区	ササゲ属アズキ亜属	種子	(4.2)	3.9	3.6
3	縄文時代中期中葉	AK3.58住-3	ササゲ属アズキ亜属	種子	4.5	3.5	3.1
4	縄文時代中期中葉	AK3.P10区	ササゲ属アズキ亜属	種子	5.5	3.0	3.0
5	縄文時代中期中葉	AK3.44-住	ササゲ属アズキ亜属？	種子	4.4	3.1	2.5
6	縄文時代中期中葉	PX3-L11区	ササゲ属アズキ亜属	種子	3.9	3.0	2.6
7			シソ属	果実	1.7	1.8	(1.2)
8	縄文時代中期中葉	AK3.46住-22	ダイズ属	種子	3.9	3.1	(1.9)
9	縄文時代中期中葉	AK3.67住 炉B	ダイズ属	種子	9.1	(4.1)	(2.5)
10	縄文時代中期中葉	AK3.N11区	トチノキ？	幼果	(8.5)	4.3	4.0
11	縄文時代中期中葉	AK3.39住 No.23 （第284図30）	ミズキ	核	(3.1)	(4.3)	3.3
12			ミズキ	核	(3.1)	4.4	3.4
13			ミズキ	核	4.4	(5.2)	4.3
14	縄文時代中期中葉	AK3.68住 No.19 （第542図27）	ダイズ属	種子	9.9	5.8	3.0
15			シソ属	果実	(2.1)	2.3	1.9
16			シソ属	果実	2.5	(2.2)	(1.4)
17			シソ属	果実	2.3	2.3	1.9
18			シソ属	果実	(1.8)	2.5	2.1
19			シソ属	果実	2.6	2.6	(2.1)
20			シソ属	果実	2.5	(2.2)	(1.8)



1．トチノキ？幼果（試料 No. 10）、2．現生トチノキ幼果（2012 年愛媛県）、3．ミズキ核（試料 No. 11）、4．ミズキ核（試料 No. 12）、5．ミズキ核（試料 No. 13）、6．ダイズ属種子（試料 No. 8）、7．ダイズ属種子（試料 No. 9）、8．ダイズ属種子（試料 No. 14）、9．ササゲ属アズキ亜属種子（試料 No. 1）

第670図　芦苅場遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（1）



10．ササゲ属アズキ亜属種子（試料 No. 2）、11．ササゲ属アズキ亜属種子（試料 No. 3）、12．ササゲ属アズキ亜属種子（試料 No. 4）、13．ササゲ属アズキ亜属種子（試料 No. 6）、14．ササゲ属アズキ亜属？種子（試料 No. 5）、15．シソ属果実（試料 No. 4）、13．ササゲ属アズキ亜属種子（試料 No. 6）、14．ササゲ属アズキ亜属？種子（試料 No. 5）、15．シソ属果実（試料 No. 7）、16．シソ属果実（試料 No. 15）、17．シソ属果実（試料 No. 16）、18．シソ属果実（試料 No. 17）、19．シソ属果実（試料 No. 18）、20．シソ属果実（試料 No. 19）、21．シソ属果実（試料 No. 20）

第671図　芦苅場遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（2）

Ⅶ　調査のまとめ

1　発掘調査の成果

向原Ａ遺跡と芦苅場遺跡は南小畔川右岸の台地上で、東西に並ぶ縄文時代中期を主体とした集落遺跡である。今回の調査は向原Ａ遺跡が第４次調査、芦苅場遺跡が第２～４次調査となり、向原遺跡では縄文時代中期後半の住居跡９軒、芦苅場遺跡では縄文時代中期中葉から後半の住居跡80軒が検出された。縄文時代では、中期以外の時期の遺構は発見されず、ほぼ中期中葉から後半にかけての遺跡であることが明らかになった。

飯能市域から入間台地にかけては、河川沿いの台地上に縄文時代中期中葉から後半にかけての遺跡が多く存在し、向原Ａ遺跡と芦苅場遺跡もその一例である。しかし、中期中葉の勝坂式期の集落は八王子遺跡、横道下遺跡、中郷遺跡などの山間地や、加能里遺跡のような丘陵地に形成される場合が多く、大きな集落は少ないようである。そのような状況の中で、芦苅場遺跡のような大きな環状集落が、台地上に残されている遺跡は大変貴重な例と言えよう。芦苅場遺跡は昭和45年に第１次調査が行われ、当時県内では珍しい勝坂式期の集落であることが注目された。今回の調査で、その全貌を推測できるほどの成果をあげることができたのは、大変貴重な成果であると言えよう。

また、後に詳述するが、芦苅場遺跡はほぼ勝坂式期を主体とした環状集落であり、県内でも珍しい集落であるが、加曽利Ｅ式期になると環状形態をとらなくなるようである。特に、加曽利ＥⅡ式以降は芦苅場遺跡の西側に集落が偏り、さらに西側に位置する向原Ａ遺跡と、時期と遺跡内容が類似する集落になるようである。向原Ａ遺跡がどのように集落展開するかは不明であるが、芦苅場遺跡の西側に展開する加曽利Ｅ式期の集落と関係性の高い遺跡であることが想定される。

さらに、向原Ａ遺跡と芦苅場遺跡の調査区西側地区では、中世の地下式坑が６基検出されている。飯能市域では検出例の少ない遺構であるが、近接する両遺跡で検出されるのは、両遺跡が一連の遺跡であることを物語っていよう。両遺跡を隔てる地形的な変化はなく、縄文時代にあっても向原Ａ遺跡と芦苅場遺跡を分ける大きな要因ではないことが想像される。芦苅場遺跡と向原Ａ遺跡との関係についてはある程度明らかになってきたが、両遺跡と周辺遺跡の関係については不明な部分が多く、今後の調査に期待する部分が多い。

2　縄文時代中期の環状集落変遷

（1）芦苅場遺跡の縄文時代中期の集落変遷

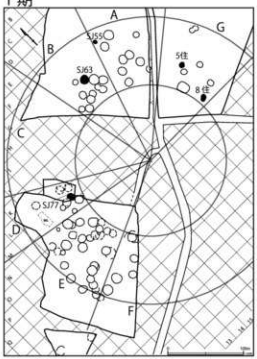
芦苅場遺跡は中央に径100m程の住居跡が作られない広場を持つ中期中葉から後葉にかけての径180m程の環状集落で、昭和45年の第1次調査で検出された８軒を合わせると、88軒の住居跡が調査されており、該期の集落変遷を辿ることが可能な環状集落である。

ここでは、芦苅場遺跡について第１次調査の成果を合わせ、時期ごとに住居跡の変遷を辿り、中期中葉の勝坂式期から後葉の加曽利Ｅ式期への集落の移り変わりについて概観したい。

住居跡は、構築されない空間を持ちつつブロック状のかたまりを持って環状に分布する傾向にある。それぞれのブロックについて、中心から線を引き北側から反時計回りにＡ～Ｆ区に区画し、第１次調査区をＧ区と称した。

また、時期区分として、中期中葉から後葉についてⅠ～Ⅹ期に区分し、細かな土器型式との対応が難しいものの、およそ大きく以下のように土器群の分類と合わせて把握した。

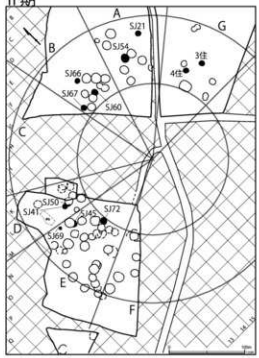
Ⅰ期



新道：3 軒 (6 床)

第 1 次：2 軒

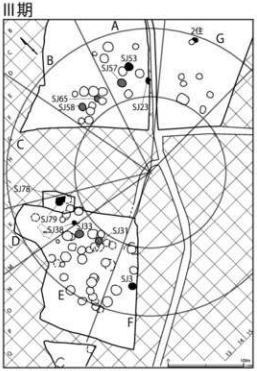
Ⅱ期



藤内Ⅰ：10 軒 (14 床)

第 1 次：2 軒

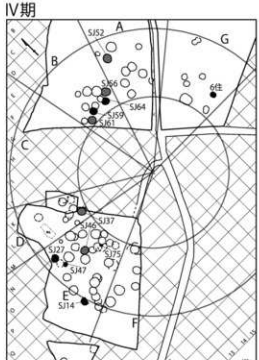
Ⅲ期



藤内Ⅱ (●)：6 軒 (15 床)
井戸尻Ⅰ (◎)： 軒 (8 床)
計 11 軒 (23 床)

第 1 次：1 軒

Ⅳ期

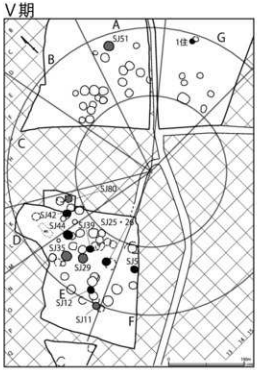


井戸尻Ⅱ (壁溝ナシ●)：6 軒 (10 床)
(壁溝アリ◎)：5 軒 (12 床)
計 11 軒 (22 床)

第 1 次：1 軒

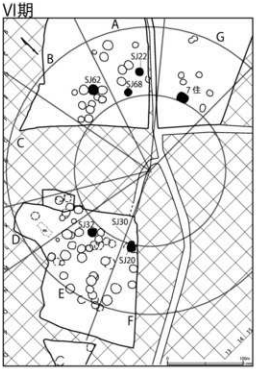
第672図　芦苅場遺跡集落変遷図（1）

V期



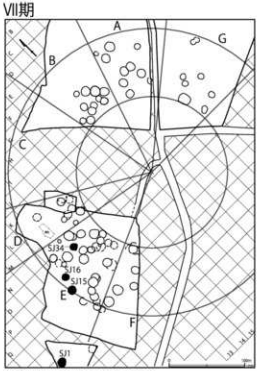
井戸尻Ⅲ（●）：7軒（17床）
EⅠ前（●）：5軒（17床）
計12軒（34床）
第1次：1軒

VI期



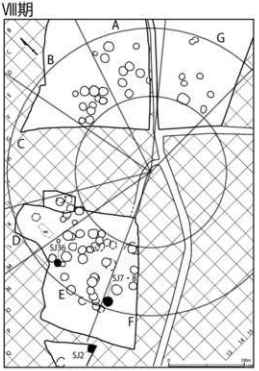
加曽利EⅠ後半：6軒（18床）
第1次：1軒

VII期



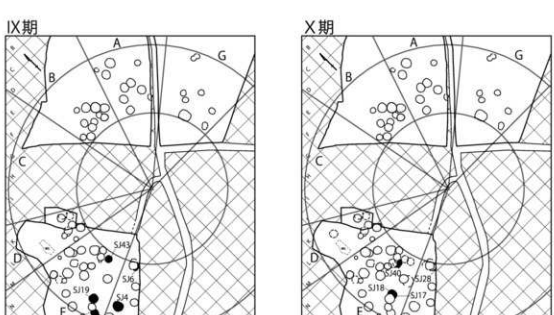
加曽利EⅡ前半：4軒（5床）

VIII期



加曽利EⅡ後半：4軒（4床）

第673図　芦苅場遺跡集落変遷図（2）



第674図　芦苅場遺跡集落変遷図（3）

Ⅰ期…勝坂式古段階（新道新・阿玉台Ⅱ古）
Ⅱ期…勝坂式中段階（藤内Ⅰ・阿玉台Ⅱ新）
Ⅲ期…勝坂式中～新段階(藤内Ⅱ・井戸尻Ⅰ)
Ⅳ期…勝坂式新段階（井戸尻Ⅱ）
Ⅴ期…勝坂式終末～加曽利ＥⅠ式前半段階（井戸尻Ⅲ）
Ⅵ期…加曽利ＥⅠ式後半段階（曽利Ⅰ）
Ⅶ期…加曽利ＥⅡ式前半段階（曽利Ⅱ）
Ⅷ期…加曽利ＥⅡ式後半段階（曽利Ⅲ）
Ⅸ期…加曽利ＥⅢ式前半段階（曽利Ⅳ）
Ⅹ期…加曽利ＥⅢ式後半段階

住居跡の時期は、付属施設に埋設されている土器で判断されるものであるが、それらが無い場合、覆土出土土器を参考にして判断した。住居跡埋設土器と覆土土器の関係は、絶対的な時間差があるものの、相対的な型式差があるかについては諸論がある。本遺跡の住居跡出土土器群はいわゆる吹上パターンによる廃棄時の一括性が高いことから、覆土の土器群と埋設土器との比較検討の上で、住居跡の大方の時期を決める根拠となっている。

住居跡は個別の番号を付けたものが80軒であり、重複状態への対応が異なることなどから、正確に軒数を表しているものではない。また、１軒でも数度にわたる建て替えが行われている場合があり、実態の軒数と乖離しているものと判断される。

そこで、本報告では住居跡の説明で、可能な限りの建て替え軒数を示してきた。建て替えることは床面が新しくなることを意味している。その床面数を数えることで、住居として機能した回数の集計が可能となり、住居跡軒数の実態に迫ることができるものと考えられる。

第２～４次の芦苅場遺跡の検出住居数は80軒、第１次調査の８軒を加えると88軒となる。第１次調査の詳細については不明な部分が多いことから、第２～４次調査の住居跡に分析を加え、第１次調査の８軒については参考とする。

80軒の住居跡の内、72軒については時期が推

定される。80軒全体では、床面数の総数は少なくとも150床が確認され、番号付き住居跡の約1.87倍の住居軒数となる。

各時期別に見ると、Ⅰ期３軒（６床）、Ⅱ期10軒（14床）、Ⅲ期11軒（23床）、Ⅳ期11軒（22床）、Ⅴ期12軒（34床）、Ⅵ期６軒（18床）、Ⅶ期４軒（５床）、Ⅷ期４軒（４床）、Ⅸ期７軒（11床）、Ⅹ期４軒（５床）、時期不明８軒（８床）である。Ⅰ期～Ⅳ期の勝坂式期では床面数が増加し、Ⅴ期でピークに達し、Ⅵ期の加曽利ＥⅠ式後半期からⅦ、Ⅷ期にかけて急激に減少、Ⅸ期の加曽利ＥⅢ式前半期で再び増加に転じ、Ⅹ期で大きく減少する傾向が窺える。この傾向は、大宮台地の中期環状集落の盛衰分析と同様な傾向を示している（金子2006）。

細かな住居跡の推移については、時期ごとに第672～674図に示した。

Ⅰ期では、Ａ・Ｂ・Ｄ区にそれぞれ１軒ずつ存在し、第１次調査のＧ区では２軒が存在し、合計５軒がそれぞれ間隔を空けて分布している。この時点で、集落が環状を呈しているかは不明である。第63号住居跡は少なくとも３面の床数を持ち、存続時間幅の長い住居跡であると判断される。

Ⅱ期ではＡ区で２軒、Ｂ区で３軒、Ｄ区で２軒、Ｅ区で３軒、Ｇ区で２軒の12軒で、Ⅰ期の居住地区で住居跡件数を増加しながら、環状化が整いつつある。合計の床面数は14床である。１床の住居跡が多いが、第60号住居跡は３床である。１床の住居跡は、分家もしくは新規の移入者であろうか。

Ⅲ期では、Ａ区で３軒、Ｂ区で２軒、Ｄ区で３軒、Ｅ区で２軒、Ｆ区で１軒、Ｇ区で１軒の合計12軒が、それぞれの区で間隔を空けて分布する。合計の床面数は23床であり、住居跡数ではⅡ期からの増加が少ないが、床面数では急激な増加である。これは、Ⅲ期が藤内Ⅱ式と井戸尻Ⅰ式期の内容が合わさっていることも考慮する必要があるが、覆土出土土器群からは両者の区分が難しい。Ⅲ期内では目安として第672図で、藤内Ⅱ式期と井戸尻Ⅰ式期の住居跡を区分して表示したが、重複するものはなく、適度な間隔で分布する。Ⅲ期の時間幅における住居配置として取り扱うが、床面数の増加に発展期としての様相が窺われる。

Ⅳ期では、Ａ区で１軒、Ｂ区で４軒、Ｄ区で１軒、Ｅ区で５軒、Ｇ区で1軒の合計12軒がそれぞれの区内で継続的に分布する。合計床面数は22床で、Ⅲ期からの大きな変化はない。しかし、Ⅳ期内では壁溝の無い住居跡と、有る住居跡が存在していたことになる。有無を区分して表示したが、これらを共存とするか、混在とするかについては検討を要する。

Ⅴ期では、Ａ区で１軒、Ｄ区で２軒、Ｅ区で８軒、Ｆ区で１軒、Ｇ区で１軒の13軒が分布する。合計床面数は34床で、Ⅳ期から大幅に増加する。しかし、住居跡の分布は環状の東側にほとんどなく、西側に大半が分布する。Ⅴ期は勝坂式終末と加曽利Ｅ式初頭期の土器群が併存する時期として設定したが、加曽利ＥⅠ式前半期まで含まれている。勝坂式終末期がどの段階まで残存するかが不明であり、この期の時間幅が長い可能性もあるが、Ⅴ期としてまとめた段階である。ある一定の時間幅を認めたとしても、東側に住居跡が少ないのは事実であろう。Ⅴ期以降に判定されていて、何面も床面を持つ住居跡の中には、Ⅴ期に相当する床面を持つ住居跡がある可能性は高い。この時期は環状形態が緩む段階なのであろうか。住居が集中するＤ区～Ｆ区においても、重複関係はなく、一定の間隔を空けて住居跡が分布する。この期の設定に大きな問題はないであろう。

Ⅵ期では、Ａ区で２軒、Ｂ区で１軒、Ｅ区で１軒、Ｆ区で１軒、Ｇ区で１軒の６軒が分布する。住居数は半減するが、床面数も18床で、半減する。第22、62号住居跡は床面を５床持つことから、その一部がⅤ期の空白部分を補う可能性は高

い。第22号住居跡は炉体土器にⅣ期の深鉢が残されており、何回かの建て替えの後、最終段階の炉の直上には吹上パターンで加曽利ＥⅠ後半段階の土器群が廃棄されていたことから、Ⅵ期として取り扱った。Ⅵ期までは環状的な集落形態を保っていたようである。

Ⅶ期では、Ｅ区で４軒が分布するのみで、住居跡数が激減する。床面は５床である。Ⅶ期以降、環状の東側に住居跡が構築されることはなくなり、勝坂式期から継続する環状集落は解体したものと判断される。

Ⅷ期では、Ｅ区で１軒、Ｆ区で３軒の４軒が分布する。この傾向はⅦ期と同様である。

Ⅸ期では、Ｅ区で４軒、Ｆ区で３軒の７軒が分布する。床面数は11床である。加曽利ＥⅢ式期になって、遺跡数や住居跡数が増加する傾向は、県内外で同様な傾向を示す。

Ⅹ期では、Ｅ区で３軒、Ｆ区で１軒の４軒が分布する。加曽利ＥⅢ式後半からＥⅣ式の中期終末にかけて、環状集落に系譜する集落が終焉を迎えるのは、大宮台地などと共通する現象である。加曽利ＥⅣ式以降後期初頭にかけては、別の集落遺跡の展開が予想される。

以上、芦苅場遺跡の環状集落はⅠ期～Ⅳ期の勝坂式期内では安定しつつ発展してきた集落として捉えられるが、Ⅴ期の加曽利Ｅ式期への変遷期を境として変容しつつ、Ⅵ期で最後の環状形態となり、Ⅶ期の加曽利ＥⅡ式期以降で終焉を迎える。Ⅶ期～Ⅹ期にかけての集落は遺跡西側のＥ区～Ｆ区にかけて集中する傾向を示し、環状集落の輪とは関連しないようである。むしろ、西側に隣接する向原Ａ遺跡との関係が注目されよう。

ここでの分析は、あくまでもⅠ～Ⅹ期の時期区分で分析した場合の検討であって、さらに時期を細かくすれば、異なった見解も出される。その場合、１期１軒という分析も可能になるが、集落をどのように定義するかが問題となろう。

また、環状集落の１つの特徴である中央広場における土壙群の存在が、本遺跡では確認されていない。未調査区において検出される可能性もあるが、Ⅱ区及びⅢ区の中央広場に相当する部分や、第１次調査区においても、中央広場側には土壙が確認されていない。調査区外に存在する可能性も残されているが、不明であると言わざるを得ない。調査区内全体でも、同時期の土壙の検出数は非常に少ない傾向にある。

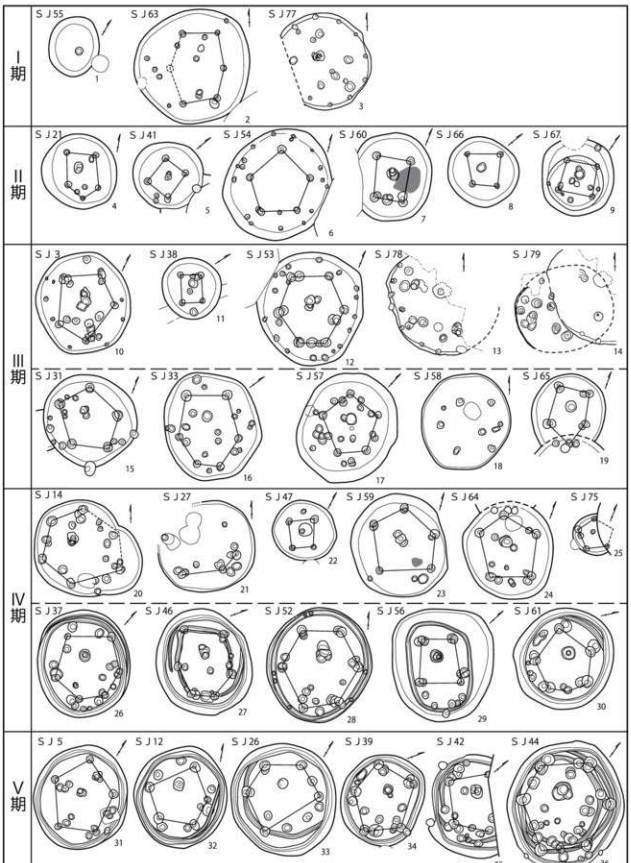
土壙が少ないことは、いくつかの問題点を提起する。１点は貯蔵穴としての土壙が少ないことであり、もう１点は墓壙としての墓が見つからないことである。貯蔵穴が少ないことは、集石土壙が多いことに関係性が想起される。生業との関係にもかかわるが、土掘具としての打製石斧が多く、粉食加工具としての磨石、石皿が少ないことと関連しているのであろうか。根菜類に食料比重が高くなると、堅果類貯蔵用の土壙への依存度が低下することも想定される。

また、墓壙が少ないことは、葬法の違いが想起される。土葬による土壙墓ではなく、他の葬法で処理された可能性を否定できない。当該期の貝塚地帯では廃屋葬が見られることから、廃屋墓としての可能性も視野に入れる必要があろう。いずれにしても仮説であり、実証の難しい問題である。この点については、吹上パターンに見られる倒置土器を絡めて後日検討してみたい。

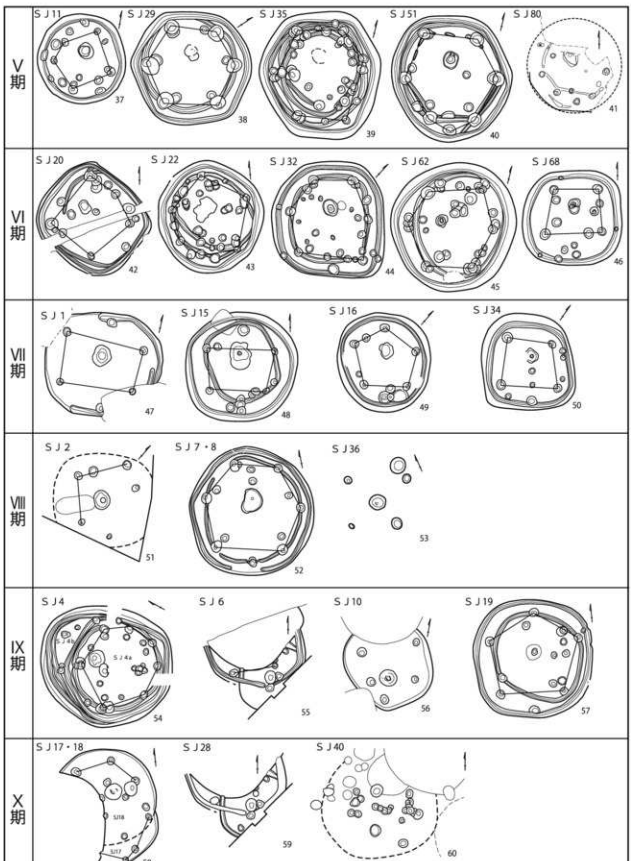
（２）芦苅場遺跡の住居跡変遷

前項で住居跡の時期別配置を検討したが、ここでは時期別における住居跡の構造変遷を検討する。Ⅰ期～Ⅹ期の代表的な住居跡を通し番号を付けて、第675、676図にまとめた。

両図から一目瞭然であるが、Ⅳ期の勝坂式新段階まで壁溝の無い住居跡が変遷し、また、Ⅳ期の同時期から住居跡内に壁溝が取り入れられるものも出現する。このⅣ期につて、壁溝の有無で区分することも可能であるが、出土土器群を証左とす



第675図　芦苅場遺跡住居跡変遷図（1）



第676図　芦苅場遺跡住居跡変遷図（2）

るのは難しい。

全体的な傾向では、勝坂式期のⅣ期に現れた壁溝はⅨ期の加曽利ＥⅢ式期まで継承されるが、Ⅹ期のＥⅢ式新段階では不明瞭なものが多くなる。この段階では住居跡の平面形の把握が難しいものも多い。

Ⅰ期～Ⅱ期の勝坂式古～中段階では、１、４、５、８などの比較的小さな円形で、４本主柱の住居跡が特徴となる。炉については埋甕炉と地床炉が多いが、地床炉と判断したものについては、炉体土器を抜き取ったものが多い傾向にある。1については明らかに地床炉であった。また、２、３、６のように円形で大きな住居跡も存在する。２については少なくとも３回の構築で住居跡プランが大きくなった可能性がある。３は壁際に壁柱穴状の小ピットが巡り、阿玉台Ⅰｂ・Ⅱ式系の土器群が多量に出土していることから、小形の住居跡とは系譜が異なる可能性がある。この壁際を巡る小ピットはⅡ期６、Ⅲ期12へと変遷するようである。いずれも大きな住居跡である。

５、７、９、11などの４本主柱としたものは、入り口部付近にピットが存在し、これらを結ぶと４のような５本主柱となるが、構造的には４本主柱と思われる。

これらの住居跡の中で、星形の五角形となる５本主柱の住居跡が出現する。６は上述した３の系統の住居跡と判断されるが、整然とした五角形の５本主柱である。Ⅲ期10・15への変遷が考えられる。

さらに、Ⅲ期では12、16のような左右対称の整然とした６本主柱構造が出現する。したがって、Ⅲ期では４本、５本、６本主柱構造の住居跡が存在していることになり、時期判定を間違えてなければ、それぞれが系統性を持って共存しているものと判断される。

そして、Ⅳ期で壁溝が取り入れられると、住居跡がやや大きく楕円化し、堅牢化するのに伴い、26、27、28のように６本主柱が主流になるものと想定される。この６本主柱は５本主柱からの変化とも捉えられるが、６本主柱の系譜下にある住居跡の影響を受けて、30のように５本主柱が６本主柱へと変化したものもあると判断される。

Ⅴ期では38、39、40のように楕円形の住居跡が正六角形を呈する柱穴配置に合わせて、正六角形のプランを呈するようになるものが出現する。正六角形の多くの住居跡は、何回かの建て替えを経て、最後の段階に正六角形へと変遷している。このⅤ期が勝坂式から加曽利ＥⅠ式への変遷期に相当し、異常な程に住居跡を建て替えて使用している時期である。場を移動せずに建て替えて住み続けたのか、短期間の間に何度も住居跡を建て替える必要が生じたのか、理由は定かではないが、元の住居跡への強い執着が感じられる。土器型式では、異系統の土器群が伴う段階であり、各地域との交流に対応するための行為であったとも考えられる。40の第51号住居跡は柱穴の間に「柱間溝」（小薬2003）を持つ住居跡の可能性が高い。Ⅳ期の27の第46号住居跡もその可能性があり、中信地方及び関東地方西南部との関係性が想定される（谷口2018）。

Ⅵ期では早くも住居跡が四角形状を呈するようになり、44、46のように台形状の４本主柱を中心とするものへと変遷する。整然とした四角形配置へとはならないが、６本主柱からの脱却を図っているようである。

Ⅶ期では４本主柱が定着し、47のように埋甕を設置する住居跡が現れる。

Ⅷ期では住居跡が円形で大きくなるに伴い、52のように多柱穴化が進む。多くは埋甕を持つようになる。

Ⅸ期ではやや平面形も不整形のものが現れ、柱穴配置も不規則なものが見られる。

Ⅹ期では炉や埋甕のみ検出され、住居跡の平面形が不明瞭なものが多くなる。

以上、土器群の変遷と住居跡の変遷が対応しない部分もあり、遺構に付属する土器による住居跡の時期認定が求められる。また、何度も建て替えを行う住居跡については、最終段階の住居跡の時期で取り扱っているため、それ以前の可能性が高いものの、正確な時期認定は難しい。Ⅰ期とした住居跡は3軒であるが、遺跡から出土する該期の土器量は多く、3軒に止まることはないものと想定されるが、遺構で証明することは難しい。建て替えが行われている多くの住居跡の中に、古い住居跡が取り込まれているであろうことは想像に難くない。

住居跡の構造については、周辺地域との比較検討を行う必要があり、今後の課題としておきたいが、大宮台地においても勝坂式期後半の住居跡は壁溝が無く、壁の立ち上がりの緩い住居跡が多い。どのような経緯を経て壁溝の要素が導入されてきたのか検討する必要がある。

3　縄文時代中期の土器群について

向原A遺跡、芦苅場遺跡からは縄文時代中期を中心として多量の土器群、石器群が出土している。ここでは芦苅場遺跡の住居跡出土土器群を主体に、中期土器群の推移についてまとめたい。第677～682図に、各時期の主な土器群を抽出して掲載し、通し番号を付して説明に供した。

集落変遷の項でも述べたが、勝坂式から加曽利E式までをⅠ期～Ⅹ期の10段階に区分して説明を加えてきた。住居跡出土土器群を基準にしているため、それぞれの段階は決して時間幅が均等ではなく、また、内容的に重複する部分もあると思われる。遺構、遺跡を理解するための単位として設定した時間軸である。

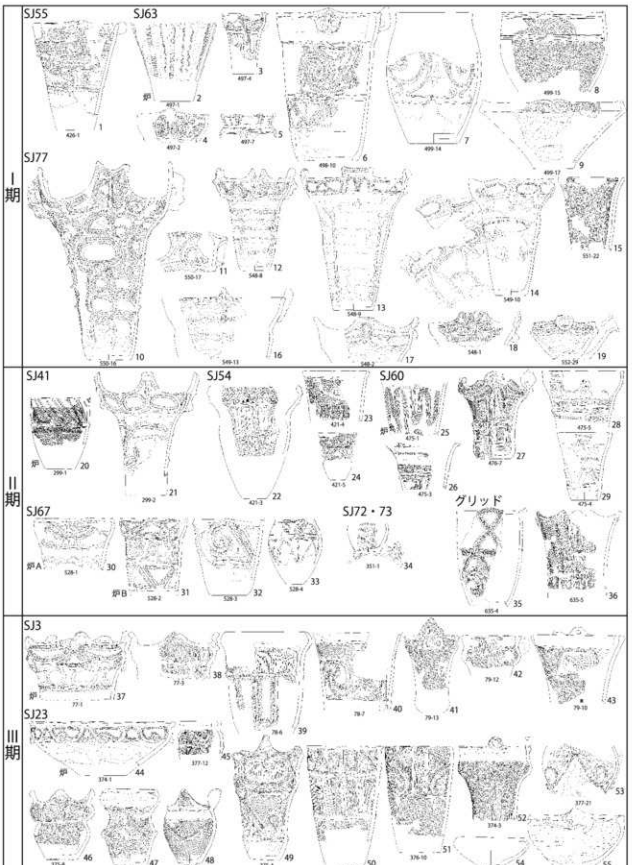
Ⅰ期（1～19）

Ⅰ期は勝坂式古段階とした段階で、勝坂1式期、又は中部高地編年の新道式期である。隆帯脇に角押文、キャタピラ文、三角押文を沿わせて施文し、区画内に角押文や三角押文の小継ぎの小鋸歯状文を施文するのが特徴となる。遺跡からは狢沢式土器が多数出土しており、もう1段階前に狢沢式期を設定するのが理想的であるが、狢沢式期の明瞭な住居跡や土壙等の遺構は遺存していない。飯能市内で狢沢式期の遺構が存在するのは矢颪地区の中矢下遺跡A区（埼埋文1986）であり、第10号土壙からは狢沢式古段階の土器群と阿玉台Ⅰa式類似の土器群が出土している。出土した狢沢式土器は、円筒形土器で長方形区画と楕円区画を交互に配する文様帯横位多段構成の深鉢である。幅狭の楕円区画内には単列の角押文で鋸歯文を施文し、鋸歯状に沿って三角印刻を施す土器である。

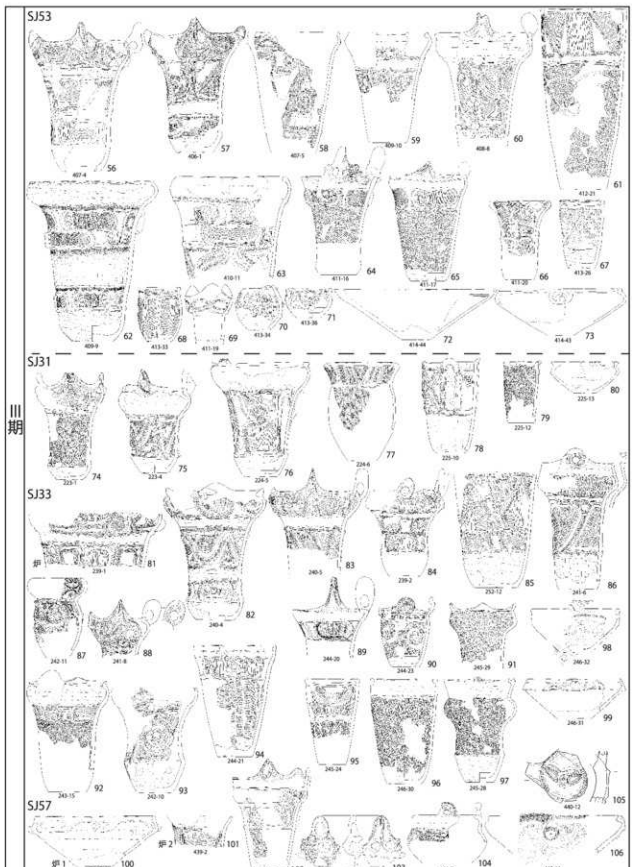
この土器の系譜下にあると思われる土器が、第55号住居跡から出土した1である。1は横位多段の楕円区画文帯を構成し、角押文とともに三角押文が多用されるようになる。狢沢式新・新道式古段階の土器であろう。阿玉台式土器との共伴関係は不明であるが、阿玉台Ⅰb式新段階の土器群が伴うようである。

また、第77号住居跡からは10～14の阿玉台式土器が、18の新道式土器や、15の異系統土器と出土している。阿玉台式土器はⅠb式からⅡ式への過渡期的な土器群で、勝坂式系土器では新道式新段階の土器群が対応するであろう。第55号住居跡より若干新しいものと思われる。15の地文縄文土器は、区画文土器の流れを汲むものと思われ、沈線に沿って細かな刻み目を施している。北陸の新崎式系の要素が垣間見える。

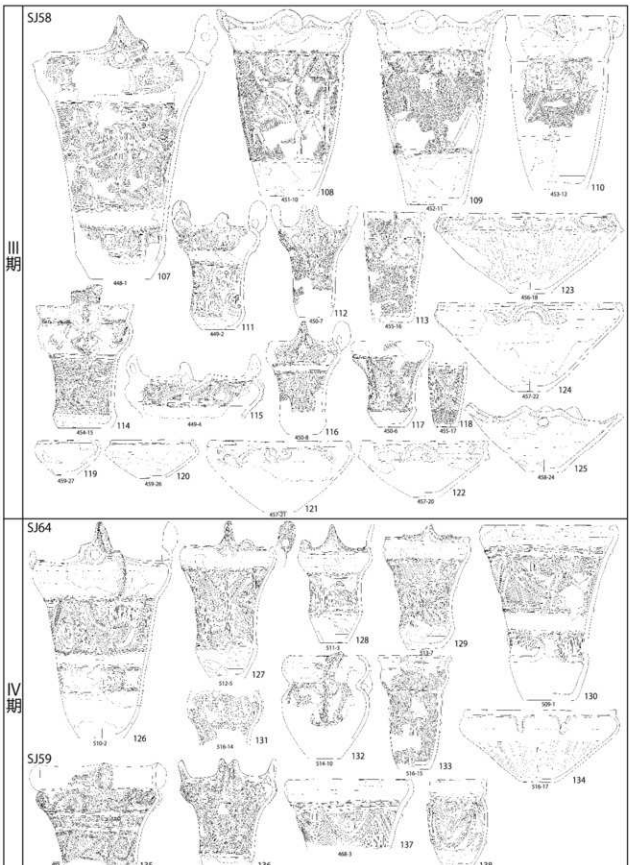
ほぼ、同じ段階として第63号住居跡出土土器群がある。3は小形土器であるが口縁部文様帯に半月状区画と三角形区画を組み合わせた、キャリパー形深鉢土器へと系譜する区画文を持つ。胴部には沈線で縦位のパネル状区画文を施文し、刻みを施している。15と類似する手法である。また、



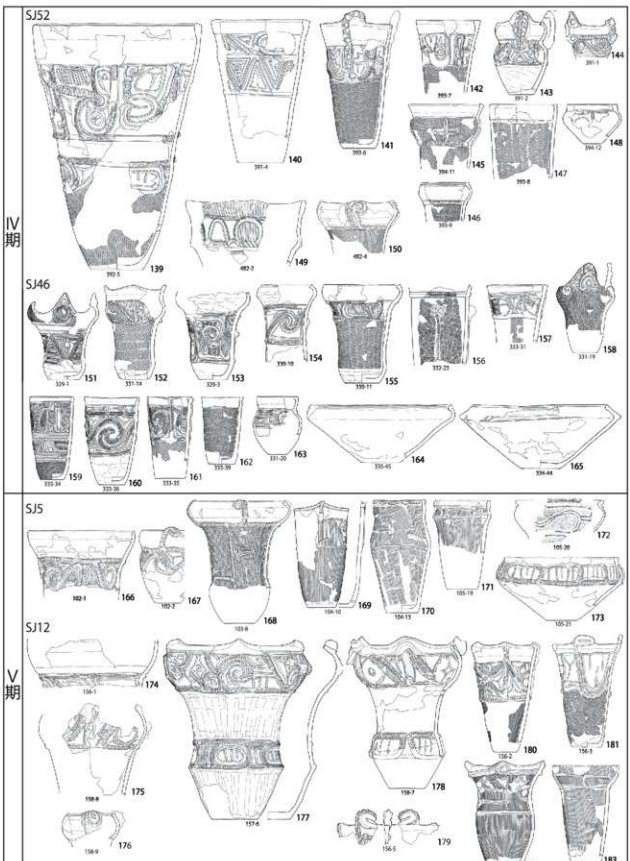
第677図　芦苅場遺跡土器変遷図（1）



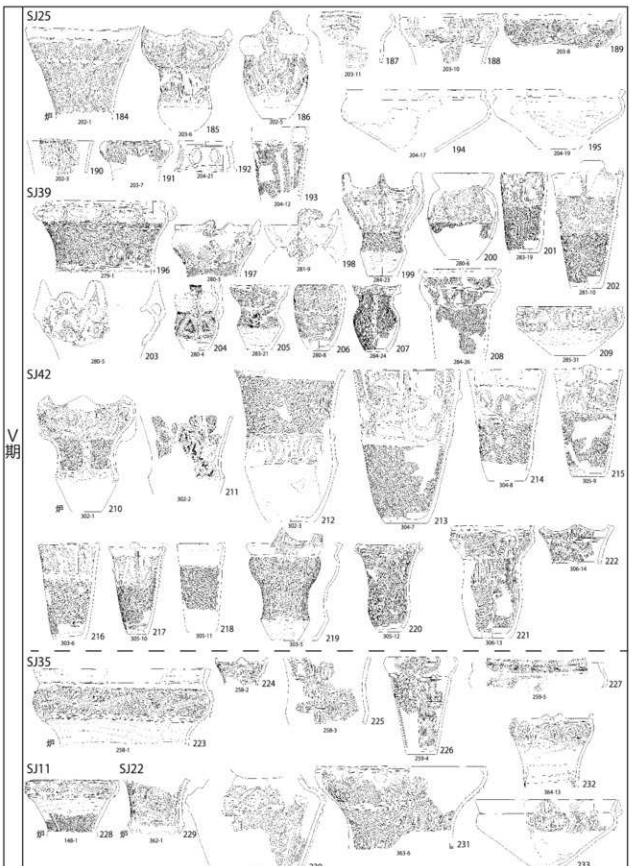
第678図　芦苅場遺跡土器変遷図（2）



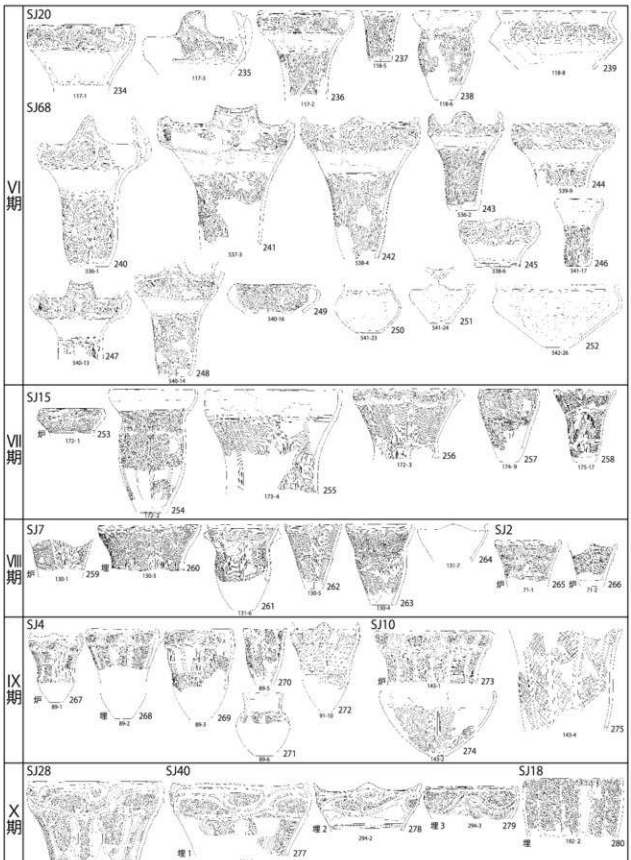
第679図　芦苅場遺跡土器変遷図（3）



第680図　芦苅場遺跡土器変遷図（4）



第681図　芦苅場遺跡土器変遷図（5）



第682図　芦苅場遺跡土器変遷図（6）

第63号住居跡は阿玉台式系（5）やゾウの鼻状の渦巻隆帯文を持つ土器（6）、口縁部が内折する浅鉢（9）、断面三角形隆帯でモチーフを描く樽形土器（7）などが揃っている。19の注口土器は珍しい。このようにⅠ期は、新道式古～新段階の幅のある段階である。飯能市では八王子遺跡(飯能市1999)の第64号住居跡出土土器群が相当しよう。

Ⅱ期（20 ～ 36）

Ⅱ期は勝坂式中段階の勝坂２式、または中部高地の藤内Ⅰ式期である。この期の施文の特徴は、隆帯脇に幅広のキャタピラ文もしくは爪形文を施文し、沈線の小継ぎ状の小鋸歯状文を沿わせるのが特徴となる。角押文や三角押文から沈線への変化を時間的に捉えるのであるが、その背景にⅠ期の阿玉台式土器の差し切るような沈線文からの影響も想定される。Ⅱ期は新道式の新しい要素を継承しつつ、パネル状区画文が盛行する段階で、22、23、36、27のような北陸系の要素を多く取り入れる段階である。36は新崎式土器に最も近いものである。阿玉台式系土器では10の系譜を引く21や、平口縁の28が阿玉台Ⅱ式の新段階に位置付けられよう。口縁部文様帯を持つキャリパー形深鉢形土器では、半月状区画と三角形区画で構成する口縁部区画文が継承される。Ⅰ期からの大きな変化は見られないが、勝坂式を貫く基本器種として継続する。また、埼玉県では出土事例の少ない35のようなサンショウウオ文の付く土器が出現する。幅広低隆帯でモチーフを描き、細かな爪形文及び刺突文を施文するもので、浮き彫り状を呈する。本場物に近いものと言えよう。飯能市八王子遺跡では第62号住居跡、加能里遺跡（加能市2016）では42次のＪ８号住居跡出土土器群が相当しよう。

Ⅲ期（37 ～ 125）

Ⅲ期は勝坂式中段階から新段階とした、勝坂２式～３式にかけての段階で、中部高地の藤内Ⅱ式期から井戸尻Ⅰ式期にかけての段階である。この期の施文の特徴は、隆帯脇に爪形文を施文するものも残るが、その場合爪形文を囲うように波状沈線を施文するもの、半円状の刺突文を施文した蓮華状文を施文するものが普及することである。また、隆帯脇には半截竹管状工具による平行沈線を施文して区画文を構成するものが一般的となり、沈線の外側である区画内に、三叉文等に伴って爪形文を施文するようになる。モチーフの描出や区画を施す隆帯には、刻みを施すのが一般的となる。

この段階には、37のように阿玉台Ⅲ式の影響を受け、隆帯脇に幅広の粗い爪形文を施文するもが見られる。波状口縁部に隆帯渦巻文を施文する38も、古い要素を持つものであるが粗い爪形文を施文している。口縁部文様帯を持つ伝統的なキャリパー形深鉢形土器は健在であるが、山形の眼鏡状把手が付く土器では、56、57のように口縁部文様帯内に半円形状の把手部が入り込むことで、口縁部の三角区画文が押しつ潰された楕円文のような歪みを見せ、整然とした三角形区画文は見られなくなる。また、把手脇から派生する隆帯が口縁部や胴部へと展開する蛇体装飾文の先駆けとなる。口唇上に眼鏡状把手が山形状に突出する場合は、向かって右側の把手頂部から蛇行隆帯の蛇体文を垂下させる場合が多い。

この期から内湾して開く無文の口縁部を持つ深鉢が増加し、円筒形の胴部に横帯の楕円区画文帯を１帯もしくは重畳するものが増えてくる。楕円区画文帯を多帯構成するもの（62）、頸部の横帯区画と胴部の縦長区画とが組み合うもの（63）、頸部に１帯巡るもの（64、65）などがある。また、パネル状区画文の流れを汲むもの（60）や、退化したサンショウウオ文を施文するもの（61）などが存在する。66は口縁部に波状の隆帯文を施文し、小さなランプ状の渦巻文突起を持つ隆帯を垂下させるものであるが、口縁部の装飾に北東北系土器の要素が窺える。

上述の範囲は、およそ藤内Ⅱ式の内容に近いものであるが、破線から下の74 ～ 125については、

若干新しい井戸尻Ⅰ式相当の内容となろう。しかし、両者は共伴する場合が多く、まとまりとして区分するのは難しい。第53号住居跡と第33号住居跡出土土器群は類似した土器群で構成されているが、第33号住居跡出土土器群にやや新しい要素が看取される。口縁部文様帯を持つキャリパー形深鉢形土器では、82、83のように三角形区画文の崩れた構成から隆帯渦巻文への変化が見られ、内湾する無文の幅狭口縁部の幅が、75、76のように緩やかに拡大する傾向にある。また、まだ低い位置ではあるが、全体的に底部の屈曲化が進んでいるようである。楕円区画文土器では84のように多段の横帯区画文帯が段数を減じる方向にあり、楕円区画内の充填文も集合沈線文が主体となる。また、キャリパー形を呈し口縁部文様帯を持つ土器群では、胴部を縄文帯として、口縁部に74、88のような蛇体文や渦巻文を隆帯で施文する土器が存在する。この場合胴部の地文には単節縄文の横位施文による斜縄文や、0段多条の単節縄文による縦走縄文を施文するものがある。Ⅲ期の中のやや古い様相を持つ土器群では、斜縄文が主体となり、やや新しい段階では0段多条縄文の縦走縄文が増えてくる。その意味からでは、第23号住居跡出土土器群は第53号住居跡出土土器群と比較すると若干巻新しい様相持つ土器群と認識される。

さて、Ⅲ期の後半と思われる土器群の中に、非常に特徴的な状況で出土した土器がある。それは、第58号住居跡出土土器群である。通常この時期の土器群は住居跡の覆土中からいわゆる吹上パターン状態で出土する場合が多いが、第58号住居跡出土土器群は、浅い住居跡状の掘り込みの中に、累々と盛り上がるように廃棄された状態で出土した。いわゆる土器塚状態で出土しているが、廃棄の最後の段階に浅鉢を逆位に被せている状況が看取された。出土土器群を復元すると、107のような80cmを優に超える本遺跡内で最大級の深鉢土器や、108、109の双子のような土器、114のように非常に忠実な蛇体装飾を施した土器、123、124のような非常に大きな浅鉢数個体が、他の多量な土器群と共に出土している。また、これらの土器群は強く被熱されて、器面が荒れている状態であった。土器群を廃棄した後に、火をかけたような状況が想定される。この状況を想像するに、大きな深鉢や浅鉢、双子の土器、蛇体文土器などを用いて饗宴もしくは祭祀行為が行われ、その後使用した土器群、他の祭祀用具等も合わせてこの場所に廃棄し、最後に火を放ったことが想像される。他に例が見られないことから、土器廃棄の1つの事例として類例を集成していきたい。ちなみに、この場所の北西方向の台地緑には本遺跡で最大の第72号集石土壙が存在する。勝坂式期であり、饗宴等と関係する調理場であろうか。

本遺跡最大級の深鉢である107は、把手から蛇行隆帯の蛇体文が垂下し、口縁部の渦巻文に繋がるモチーフを構成するものと考えられる。胴部は頸部の楕円区画文帯下に幅広の文様帯を構成するが、縦位構成の文様はモチーフが崩れている。底部の楕円区画文内の充填文には蛇行爪形文を施文しており、藤内式的な要素を残している。双子土器である108、109は、口縁部が4単位の波状を呈し、頸部文様帯と縦長の胴部文様帯を構成する。頸部文様帯には楕円区画と渦巻文を組み合わせた区画文を、胴部には「X」字状モチーフ、鈎状モチーフ、サンショウウオ文に系譜するモチーフ等、を施文する。109の方がモチーフの構成が単純であるが、108の裏面も同様の特徴を持つ。モチーフ間の地文には、0段多条の撚糸文を施文しており、地文を施文しない部分もある。さらに、110は器形や文様帯構成が類似する土器で、口縁部の眼鏡状把手が異なる。兄弟位に当たろうか。これらの土器群は藤内Ⅱ式的な要素や、底部の屈曲に井戸尻式の要素が見られ、両者の混在した状況を示していよう。

Ⅳ期（126 ～ 165）

Ⅳ期は勝坂式新段階とした勝坂３式の段階で、中部高地の井戸尻Ⅱ式を中心として設定した段階である。Ⅲ期との区分も難しい段階であるが、口縁部文様帯と胴部文様帯を持つ勝坂式系のキャリパー形深鉢土器が減少し、口縁部文様帯を持ち、胴部に縄文を施文する土器群が増加する。円筒形土器が増加するのもこの段階である。この時期の施文の特徴は、Ⅲ期と大きく変わらないが、隆帯脇に沿わせる沈線が、平行沈線から単沈線へと変化しているものが多くなる。また、爪形文の施文も少なくなる傾向にある。胴部文様帯等のモチーフは崩れて複雑化するもの（127、128、135、137）と、単純化するもの（130、137、140、154）に分かれるようである。第52号住居跡の139は本遺跡内で最大級の円筒形土器であり、文様帯の在り方はキャリパー形深鉢と同様である。胴上半部の文様帯には幅広低隆帯による崩れたモチーフを施文し、胴下半部の楕円区画文帯にも崩れたモチーフを施文している。円筒形土器は蛇体装飾を施すものが多くなり、該期の世界観が現れていよう。

円筒形土器の159は半肉彫状の隆帯で「X」字状や「M」字状の区画文を施文するものである。方形や長方形の区画文を帯状に並べて口縁部や縦位区画を施すものであるが、方形状区画を目の表現に見立て、藤内遺跡の報告（富士見町教育委員会2011）では「神像」として捉え、範型の強い土器として紹介されている。類例は横浜市大熊仲町遺跡Ｊ１号住居跡（横浜市教育委員会2000）、多摩ニュータウンNo.３遺跡（東京都埋文センター1982）、清瀬市野塩外山遺跡（清瀬市1995）、世田谷区桜木Ⅰ遺跡第23号住居跡（世田谷区教委2008）、さいたま市椚谷遺跡第15次第84号住居跡（さいたま市遺跡調査会2005）で良好な土器が出土しており、所沢市海谷遺跡第47号住居跡（所沢市2003）では、本遺跡159の上半部と下半部の文様が組合さったモチーフが、口縁部に展開する浅鉢が出土している。いずれの例も藤内式Ⅱ式から井戸尻Ⅰ式辺りの土器群と出土しており、本遺跡例もⅢ期に位置付けられる可能性もある。本遺跡では住居跡から出土した他の土器群を考慮してⅣ期に位置付けたが、159が伝世していた可能性も残されている。破片レベルでは他の遺跡でも出土しており、さらに変形したものもあり、強い範型下にある土器群の分布域を検討することによって、当時の社会的な交流関係の一端が垣間見えるであろう。

Ⅴ期（166 ～ 233）

勝坂式終末期から加曽利ＥⅠ式前半期とした段階で、中部高地編年では井戸尻Ⅲ式を中心として設定した段階である。いわゆる勝坂式と加曽利Ｅ式土器が様式として共存する段階である。飯能市域では口縁部が発達し、胴部が括れ、屈曲する底部を持ついわゆる多喜窪タイプに類する土器として、仮称加能里タイプ土器が存在する。加能里タイプの土器は飯能市加能里遺跡第20号住居跡（飯能市教委1998）、中郷遺跡第８号住居跡（飯能市教委1998）で、覆土内ではあるが加曽利ＥⅠ式土器との廃棄時の共伴関係が確認されている。また、青梅市駒木野遺跡第26ｂ号住居跡（青梅市遺跡調査会1988）では炉体土器に加曽利ＥⅠ式土器、床面直上に多喜窪タイプの土器２個体が出土しており、明らかな共伴関係として捉えられている。

本遺跡においても第42号住居跡で、炉体土器に210の加能里タイプの土器、覆土から211 ～ 219の勝坂式系土器や220の東関東系土器とともに、221の加曽利ＥⅠ式土器が出土している。廃棄時の共伴関係は明らかであろう。また、第12号住居跡では175、177、178の加能里タイプの土器と、勝坂式系の円筒形土器と共に、南東北系とも東関東系とも判断の難しい182、183の土器が出土している。さらに、第39号住居跡では大木式系の要素を持つ196を炉体土器として、覆土から

は勝坂式系の円筒形土器や、203の加能里タイプの土器、207の東関東系の土器、208の加曽利ＥⅠ式と並行すると考えられる北関東的な地文撚糸文土器が出土している。また、199は４単位の波状口縁を呈し、平出Ⅲａ式系の系譜下に成立した可能性も考えられる。このように、Ⅴ期には多様な系統要素を持つ土器群が共存しており、このような状況下の中で、221のような口縁部に横「Ｓ」字状文を持つ土器が成立するものと思われる。住居跡の構造を見ても、Ⅴ期は同一住居での建て替えが最も多い時期に当たり、集落内で何か大きな変化が起こっていた可能性が想定される。

Ⅴ期は、新地平編年の９ｃ期と10ａ期を含む時期であるが、両時期の土器群が共伴関係にあるとすれば両時期は同一時期となるであろうし、勝坂式系統の土器群が続く地域では加曽利ＥⅠ式的な要素を見出すのが難しく９ｃ期と認識され、加曽利Ｅ式土器が成立する地域では10ａ式と認識されるのではなかろうか。どのような土器を加曽利Ｅ式と認定するか、また、どのような経緯でどの地域で加曽利Ｅ式が成立するかについて明らかにすることが必要である。まさしく芦苅場遺跡はその渦中にある遺跡と言えよう。

Ⅵ期（234 ～ 252）

加曽利ＥⅠ式後半期に当たる段階で、加曽利ＥⅠ式土器が確立する段階である。大木８ｂ式に相当する段階である。芦苅場遺跡で住居跡の環状配置が見られる最後の段階である。口縁部に235は橋状把手、241は箱状把手が付き、隆帯の渦巻文を連結するモチーフを構成する。241の渦巻文は剣先文を伴っている。頸部無文帯を設ける安定した土器群が成立する段階であり、胴部に蛇行隆帯文と隆帯文の懸垂文を垂下するものが多くなる。胴部の地文は大半が撚糸文である。249のような曽利式系の裾曲文系土器や、口縁部文様帯に沈線文を施文する曽利式系の土器（247、248）が伴う。曽利Ⅰ～Ⅱ式にかけての段階である。

Ⅶ期（253 ～ 258）

加曽利Ⅱ式前半段階である。連弧文土器（258）が成立している段階で、口縁部文様帯に渦巻文を施文するキャリパー形深鉢が衰退し、口縁部文様帯が幅狭になり（253）、口縁部に渦巻文を弧状に繋ぐ繋弧文土器（256）が成立する段階である。

この段階から、環状集落の輪は解体する。Ⅵ期との間に、時間的な空白期間がある可能性がある。加曽利ＥⅠ式後半期土器群とⅦ期の土器では、継続性に欠ける部分があり、加曽利ＥⅠ式の最も新しい段階から加曽利ＥⅡ式古段階の曽利Ⅱ式並行の土器群が欠落しているようである。環状集落の非継続性もその観点から検討する必要があろう。

Ⅷ期（259 ～ 266）

加曽利ＥⅡ式後半段階である。加曽利Ｅ式系のキャリパー形土器は衰退し、連弧文土器が盛行する段階である。加曽利Ｅ式系の土器群は、多分に曽利式の影響を受けた土器群となっている。一方、連弧文土器はバリエーションが増えている。

Ⅸ期（267 ～ 275）

加曽利ＥⅢ式前半段階である。加曽利Ｅ式系土器が盛行し、連弧文土器が衰退する段階である。胴部に磨消懸垂文が成立し、東北地方の大木９式と並行する段階である。加曽利Ｅ式土器が復活する段階である。曽利Ⅳ式土器が並行する。

Ⅹ期（276 ～ 280）

加曽利ＥⅢ式後半段階である。口縁部文様帯の文様構成の崩れが進み、胴部には幅広の磨消懸垂文や「Ｈ」状（276）、逆「Ｕ」状の磨消懸垂文を施文するもの（279）が増加する。この時期以降、住居跡等の遺構の構築は行われず、集落は終焉を迎える。

しかし、グリッドからは中津式系土器が出土しており、本来ならば加曽利ＥⅣ式前後の土器群が対応するはずである。中期の終末頃、遺構は残されなかったが、この地に足跡が残されたことは明らかである。

4　縄文時代中期の石器群について

向原A遺跡第4次調査及び芦苅場遺跡第2・3・4次調査で出土した石器の総計は4,636点で、その内訳は次のとおりである（第255、256表）。

向原A遺跡…181点（住居跡：148点　集石土壙：5点　土壙：18点　その他：10点）

芦苅場遺跡…4,455点（住居跡：3,207点　集石土壙：83点　土壙：39点　その他：1,126点）

以上の中から、遺存度の高い資料及び出土点数が少ない器種を中心に抽出し、掲載した。

器種組成について

住居跡の時期変遷に則して住居跡ごとの出土石器の器種組成を概観していく。

第256表のように、芦苅場遺跡では、各時期を通じて打製石斧の占める割合が高い。その一方で、磨石や凹石の出土点数は少ない傾向にある。

一般的に縄文時代中期は磨石や石皿といった脱殻・粉砕に関連する器種が、打製石斧と並んで器種組成の主体を占めると考えられている。この背景として、早期末から前期初頭にかけての最温暖期に照葉樹林が拡大し、前期後葉以降、落葉広葉樹林と照葉樹林の混合樹林が繁茂していたことが挙げられている。

遺跡内から出土した脱殻・粉砕に関連する器種である石皿・磨石・敲石の点数は総計369点であり、打製石斧の総量である1,515点の4分の1程度に過ぎない。組成としては打製石斧の次に比率が高いが、それでも16%程度と割合が低く、脱殻・粉砕といった食料加工技術が芦苅場遺跡における主な生業を担っていたとは言い難い。

打製石斧及び脱殻・粉砕に関連する器種以外はそれぞれ10%未満であり、器種組成の70%近くを占める打製石斧が生業の中心であったと考えられる。

脱殻・粉砕といった食料加工技術は、堅果類を中心に適用されていたと考えられている。一方、打製石斧はその用途の一つとして土掘具が想定されており、食料採集に限定すれば、根菜類の採取を中心に利用されていたと思われる。

想像をたくましくすれば、芦苅場遺跡で暮らしていた人々は、堅果類の粉食に加えて、集石土壙で調理する根菜類に主体を置いた食生活を送っていたのではなかろうか。

5　芦苅場遺跡の集石土壙について

集石土壙は向原A遺跡と芦苅場遺跡を合わせると93基が確認されている。集石土壙は出土土器から勝坂式古段階から加曽利EⅢ式期にかけて確認されており、また、形態も何種類かに分類される。集石土壙の形態については、以下のように分類する。

A類…断面形態が円錐形を呈するもので、開口部が開き、壙底がすぼまるもの。

B類…断面が擂鉢状を呈するもので、開口部が開き、壙底が小さな平底になるもの。

C類…断面形態がタライ状を呈するもので、壙底が広い平底になるもの。

D類…断面形が皿状を呈するもので、壙底から壁が緩やかに立ち上がるもの。

また、規模には径が80cm前後の小形のもの、径が100cm前後の中形のもの、径が150cm前後の大

第255表　遺跡出土石器一覧表

遺跡	総点数	石鏃	スクレイパー	石錐	剥片石器	磨製石斧	打製石斧	礫器	敲石	磨石	石皿	砥石	石核	剥片
向原A	181	6	10	0	0	1	38	1	11	36	20	4	0	54
芦苅場	4455	104	111	19	5	68	1515	35	139	172	58	24	62	2143

第256表　芦苅場遺跡住居跡出土石器一覧表

時期	遺構No.	総点数	石鏃	スクレイパー	石錐	剥片石器	磨製石斧	打製石斧	礫器	敲石	磨石	石皿	砥石	石核	剥片
I	SJ55	14	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	11
I	SJ63	76	0	0	0	0	1	17	0	1	2	0	0	0	55
I	SJ77	26	0	0	0	0	0	22	2	0	1	1	0	0	0
II	SJ21	16	0	0	0	0	0	10	0	1	0	0	0	0	5
II	SJ41	20	0	3	0	0	0	9	0	0	1	0	0	0	7
II	SJ45	15	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	10
II	SJ50	4	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	1
II	SJ54	77	3	1	0	0	2	18	0	2	1	0	0	0	50
II	SJ60	49	1	0	0	0	0	8	0	3	2	0	0	0	35
II	SJ66	7	0	0	0	0	0	4	0	1	0	0	0	0	2
II	SJ67	33	0	0	0	0	0	22	0	0	1	0	0	1	9
II	SJ72	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
III	SJ3	88	2	5	6	0	4	23	0	2	15	2	1	0	28
III	SJ23	30	1	0	0	0	1	16	0	0	0	1	0	0	11
III	SJ31	40	0	3	1	0	0	25	0	2	1	2	1	0	5
III	SJ33	50	1	1	0	0	1	26	0	2	1	0	1	0	17
III	SJ38	5	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3
III	SJ53	179	5	2	0	0	1	48	0	1	7	1	0	1	113
III	SJ57	49	1	1	0	0	0	19	0	0	1	0	0	5	22
III	SJ58	72	2	1	0	0	0	15	0	4	1	1	0	2	46
III	SJ65	30	1	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	21
III	SJ78	3	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
IV	SJ14	5	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	3
IV	SJ27	16	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	8
IV	SJ37	46	0	4	0	0	1	23	1	3	3	0	0	0	11
IV	SJ46	118	1	2	0	0	2	57	0	3	7	2	0	0	44
IV	SJ47	6	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	2
IV	SJ52	98	3	2	0	0	0	20	0	1	1	0	0	3	68
IV	SJ56	99	0	6	0	0	1	29	0	0	2	1	0	3	57
IV	SJ59	57	0	0	0	0	1	21	0	0	3	0	1	0	31
IV	SJ61	92	0	2	0	0	1	23	0	1	4	0	0	0	61
IV	SJ64	53	0	2	0	0	0	22	0	1	2	0	0	2	24
IV	SJ75	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
V	SJ5	164	3	8	0	0	0	48	0	1	4	0	1	4	95
V	SJ11	35	0	1	0	0	1	6	1	1	0	0	0	2	23
V	SJ12	53	1	3	0	0	1	13	0	0	6	1	0	0	28
V	SJ25	117	4	3	0	0	1	36	2	4	4	1	3	1	58
V	SJ26	9	1	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	4
V	SJ29	51	1	1	0	0	0	25	2	1	0	0	2	0	19
V	SJ35	87	0	2	1	0	0	28	2	3	5	1	0	0	45
V	SJ39	106	0	2	0	0	3	52	2	0	8	2	1	5	31
V	SJ42	61	0	0	0	0	0	32	0	1	6	2	0	1	19
V	SJ44	45	1	2	1	0	0	21	1	0	2	0	0	0	17
V	SJ51	38	0	0	0	0	0	9	1	1	2	3	0	0	22
V	SJ80	6	0	0	0	0	0	4	0	0	1	1	0	0	0
VI	SJ20	52	0	4	1	0	1	15	1	1	2	1	2	1	23
VI	SJ22	120	4	3	0	0	3	33	0	2	2	1	0	0	72
VI	SJ30	13	0	2	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	7
VI	SJ32	15	0	0	0	0	0	5	0	1	1	0	1	0	7
VI	SJ62	85	2	0	0	1	2	17	0	0	5	1	2	0	55
VI	SJ68	45	0	1	0	0	2	13	0	0	3	0	0	0	26
VII	SJ1	27	1	3	2	0	0	2	0	0	9	0	0	0	10
VII	SJ15	144	7	3	1	0	4	36	1	1	7	4	2	5	73
VII	SJ16	33	0	0	0	0	1	12	1	0	4	0	0	0	15
VII	SJ34	8	1	0	0	0	1	4	1	0	0	0	0	0	1
VII	SJ2	8	0	0	0	0	0	0	0	2	0	4	0	0	2
VII	SJ7	84	7	10	0	0	0	14	0	4	5	0	2	2	40
VII	SJ8	21	3	3	0	0	0	4	0	2	0	0	0	0	9
VII	SJ36	2	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
IX	SJ4	117	8	4	1	4	2	29	0	2	1	1	1	1	63
IX	SJ6	30	2	2	0	0	0	13	2	0	3	2	0	0	6
IX	SJ10	23	3	0	0	0	1	6	0	1	1	0	0	2	9
IX	SJ13	21	1	1	0	0	0	5	0	0	0	1	0	1	12
IX	SJ19	23	0	1	1	0	1	6	0	1	0	0	0	0	13
IX	SJ24	3	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0
X	SJ17	10	0	2	1	0	0	4	0	0	0	0	0	0	3
X	SJ18	4	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
X	SJ28	6	1	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	1	1
X	SJ40	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
－	SJ9	55	0	3	2	0	1	21	0	2	3	1	0	2	20
－	SJ48	9	0	0	0	0	0	8	0	0	0	1	0	0	0
－	SJ76	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	合計	3207	74	101	18	5	43	1041	20	62	150	39	21	45	1588

形のものがある。覆土中に火を焚いた痕跡としての炭化物層が有るもの、炭化物層の無いものに大きく分類される。時期については、礫に混じって壙中から出土した土器片で判断した。中には小さな土器片で判断したものもあり、確実に構築時期を示しているとは言い難い。

集石土壙についての分類を第257表に、時期ごとの代表的な集石土壙を第683図に示した。

Ⅰ・Ⅱ期の勝坂式古・中段階の集石土壙は、径50cmから110cm程のやや小形の土壙が多く、径100cm弱を主体とする。合わせて22基が検出されているが、炭化物層の有るもの７基、無いものが15基である。炭化物層を持つ土壙ではA・B形態が多く、持たない土壙ではC・D形態が多い。

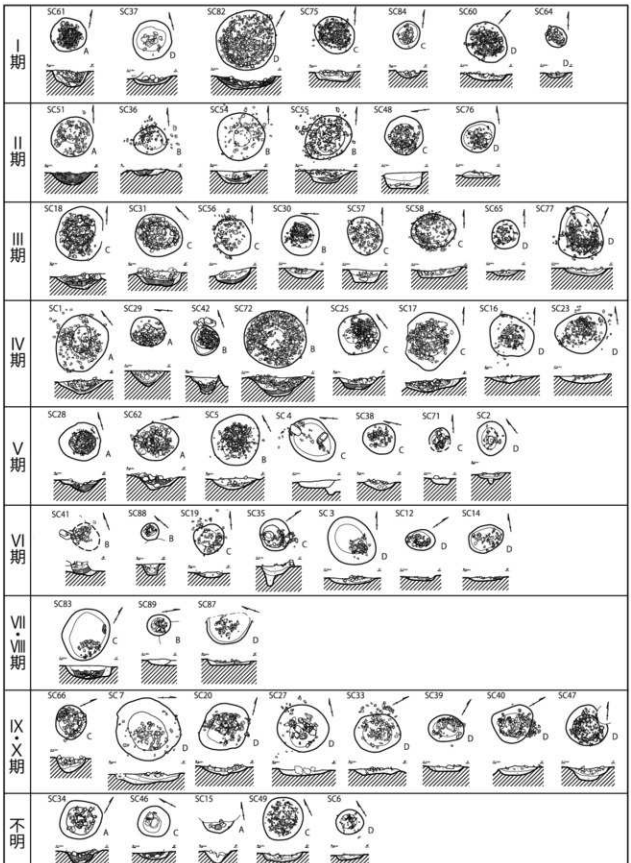
Ⅲ・Ⅳ期の勝坂式中から新段階では、径50cm以下のものから150cmを超すものまであり、100cm前後を主体とするが、大きさにばらつきが見られる。合わせて32基が検出されており、炭化物層の有るものが８基、無いものが24基である。炭化物層の有るものではⅢ期にC類が、Ⅳ期にA～C類がほぼ均等に存在し、持たないものではC・D類が主体を占める。炭化物層を持たない土壙の中に、A・B類が若干存在している。

Ⅴ・Ⅵ期の加曽利ＥⅠ式にかかる時期では、合計14基が検出されている。土壙の規模は少しばらつきがあるが、径100cm弱の大きさを主体とする。炭化物層を有する土壙が３基、炭化物層の無い土壙が11基である。明らかに炭化物層を持つ土壙が急減している。炭化物層の有る土壙はA・B類の形態で、炭化物層の無い土壙はA類が含まれず、C・D類を主体とする。

Ⅶ～Ⅹ期加曽利Ｅ式後半期では、合計13基が検出されている。規模にばらつきがあるが、炭化物層の有る土壙は僅か１基のみで、12基が炭化物層の無い土壙である。炭化物層の有る土壙はC類で、無い土壙はD類が主体となっている。特にⅨ・

第257表　芦苅場遺跡集石土壙分類表

時期	木炭層・有（基数）	基数	木炭層・無（基数）	基数	合計
Ⅰ期	3	A１	11	B１	14
		D２		C３	
				D７	
Ⅱ期	4	A１	4	C２	8
		B３		D２	
Ⅲ期	3		11	A１	14
		C３		B１	
				C２	
				D７	
Ⅳ期	5	A２	13	A１	18
		B１		B１	
		C２		C６	
				D５	
Ⅴ期	2		5	B１	7
		A２		C３	
				D１	
Ⅵ期	1		6	B１	7
		B１		C２	
				D３	
Ⅶ・Ⅷ期	1	C１	2	B１	3
				D１	
Ⅸ・Ⅹ期	0		10	C１	10
				D９	
不明	4	A３	3	A１	7
		C１		C１	
				D１	
合計	23	A９	65	A３	88
		B５		B６	
		C７		C20	
		D２		D36	



第683図　集石土壙変遷図

X期は規模にまとまりがなく、掘り込みの浅いD類が主体となっている。

以上のように、いわゆる炭化物層の有る集石土壙は勝坂式期に主体があり、加曽利E式期ではほとんどなくなるようである。また、炭化物層を有する集石土壙はA・B類形態を主体とし、炭化物層の無い集石土壙は浅い土壙のC・D類形態を主体とする。これは、礫を焼くか焼かないかの機能的な相違があると共に、集石土壙としての用途の違いを反映している可能性がある。また、加曽利E式期では集石土壙そのものは存在するが、礫を焼いた場所は特定できない。集石土壙の通時的な利用の仕方に変化が無いとすれば、加曽利E式期の新しい段階では、どこで礫を焼いていたのであろうか。本遺跡のみに見られる現象であるかも含めて、今後の検討課題としたい。

6　集石土壙の礫分析について

両遺跡における集石土壙は、向原A遺跡が5基、芦苅場遺跡が88基、総じて93基にも及ぶ。

集石土壙に関する研究は、これまでにその機能や用途について論じられてきた（谷口1986）。しかし、重量や大きさ、形状といった、利用された礫の諸属性ついてはあまり論じられてこなかったように思われる。本節では、両遺跡で確認された集石土壙について、どのような礫を遺跡内に持ち込み、使用したのかという点に着目し、検討していく（石村貞・石村光2007）。

なお、検討するにあたり、分析結果の誤差を最小限とするために、以下の方法で外れ値でない範囲（以下、「分析対象範囲」と表記）を算出した。

Q1（第1四分点）－1.5×IQR（Q3-Q1）

～

Q3（第3四分点）＋1.5×IQR（Q3-Q1）

（1）集石土壙に利用された礫について

まず、大まかな傾向を把握するために、検出された集石土壙に用いられた礫のうち、比率の大半を占めるチャートに注目し、遺跡ごとに分析する。

両遺跡において、「分析対象範囲」内の平均値を比較すると、半割礫の平均値は、全礫の平均値の半分以上である（第258・259表）。この平均値が全礫と半割礫の実態をどの程度反映しているのか見てみると、芦苅場遺跡が「分析対象範囲」の礫が押し並べて利用されているのに対し、向原A遺跡は「分析対象範囲」の平均値を境として、全礫と半割礫ともに800～500gと300～100gの2山に分かれる（第684、685図）。

この傾向を念頭に置きつつ、遺構別にどのような礫が利用されているのか検討していく。

向原A遺跡

向原A遺跡は集石土壙が5基と芦苅場遺跡に比べて少なく、全遺構を対象とした。但し、第3号集石土壙のように利用された礫の総数が他に比べて極端に少なく、分析に不向きな遺構も対象としていることを予め断っておく。また、第2号集石土壙については全礫が1点のみで、半割礫については皆無であったため、分析の対象からは除外している。

分析の結果、対象外とした第2号集石土壙を除く、全ての集石土壙で、前項で得られた傾向を追認することができた（第686図）。

芦苅場遺跡

芦苅場遺跡については、検出された集石土壙の数が多く、遺構の規模や利用された礫の総数についてもばらつきがあるため、便宜上、規模が大きく、利用された礫の総数が1,000個以上の遺構を対象とした。

対象とした遺構数は16基である。前述したように、遺構を総じて分析した場合では傾向を把握することは難しかったが、遺構別で分析した結果、向原A遺跡同様、「分析対象範囲」の平均値を境として、全礫と半割礫ともに800～500gと300～

第258表　向原A遺跡の「分析対象範囲」内重量平均値

全礫	Q1	225.0		
	Q3	665.0		
	Q3-Q1	440.0		
	Q3-Q1×1.5	660.0		
	分析対象範囲	-435.00	～	1325.00
	平均値	442.56		

半割礫	Q1	210.0		
	Q3	580.0		
	Q3-Q1	370.0		
	Q3-Q1×1.5	555.00		
	分析対象範囲	-345.00	～	1135.00
	平均値	552.50		

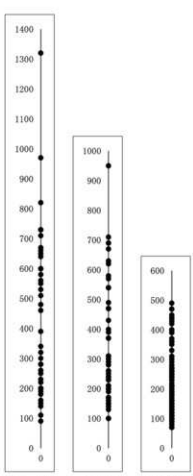
1/4割礫	Q1	130.0		
	Q3	282.5		
	Q3-Q1	152.5		
	Q3-Q1×1.5	228.75		
	分析対象範囲	-98.75	～	511.25
	平均値	226.30		

第259表　芦苅場遺跡の「分析対象範囲」内重量平均値

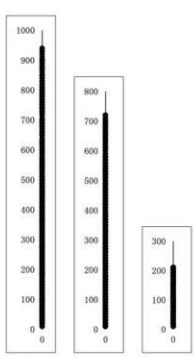
全礫	Q1	120.0		
	Q3	450.0		
	Q3-Q1	330.0		
	Q3-Q1×1.5	495.0		
	分析対象範囲	-375.00	～	945.00
	平均値	572.59		

半割礫	Q1	100.0		
	Q3	350.0		
	Q3-Q1	250.0		
	Q3-Q1×1.5	375.00		
	分析対象範囲	-275.00	～	725.00
	平均値	434.52		

1/4割礫	Q1	100.0		
	Q3	240.0		
	Q3-Q1	140.0		
	Q3-Q1×1.5	210.00		
	分析対象範囲	-110.00	～	210.00
	平均値	155.31		



第684図　向原A遺跡における形状別重量散布図



第685図　芦苅場遺跡における形状別重量散布図

100gの2山に分かれることが分かった（第687～690図）。

以上のことから、集石土壙に利用する礫は、800～500gと300～100gを中心として選別し、重量のある礫については、半割して両遺跡内に持ち込まれた可能性があると思われる。

（2）集石土壙の利用状況について

第260表は、芦苅場遺跡で検出された集石土壙について、「分析対象範囲」外の全礫と半割礫の各個数と遺構内より出土した礫の総数及び総重量を規模の大きい順に示した表である。規模の大きい遺構は礫の総数も比較的多いが、必ずしも礫の総重量が重たいわけではないようである。

このうち、前項で分析した第72号集石土壙から第77号集石土壙までの30基の土壙に主眼を置くと、2つの組を抽出することができた。1つは規模が大きく、重量級の全礫・半割礫が少なく、総数の多いグループ（グループA）である（第261

第260表　芦苅場遺跡における集石土壙データ一覧表

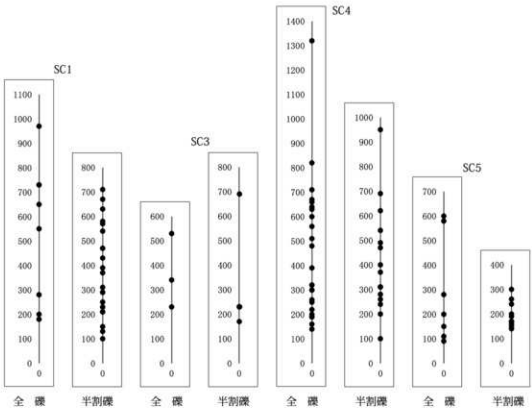
遺構	長径	短径	深さ	規模	全礫	半割礫	礫総数	礫総重量
SC72	1.65	1.49	0.57	1.4013	13	15	4854	409.6
SC09	1.47	1.44	0.65	1.2701	0	0	727	37.5
SC52	1.61	1.43	0.45	1.0360	2	1	2741	127.2
SC79	2.14	1.61	0.29	0.9992	2	3	1186	81.5
SC82	1.67	1.56	0.35	0.9118	10	10	3026	219.4
SC39	1.53	1.42	0.37	0.8039	3	0	1581	100.4
SC07	1.76	1.58	0.27	0.7508	4	3	72	21.1
SC53	1.46	1.25	0.41	0.7483	3	0	2247	146.2
SC01	1.50	1.32	0.33	0.6534	4	3	1319	119.1
SC17	1.53	1.40	0.30	0.6426	13	12	1958	199.1
SC18	1.42	1.21	0.36	0.6186	4	10	1855	134.0
SC83	1.40	1.17	0.35	0.5733	4	1	740	55.7
SC54	1.28	1.25	0.35	0.5600	0	1	1348	70.6
SC05	1.34	1.25	0.31	0.5193	6	2	576	58.9
SC31	1.26	1.12	0.36	0.5080	16	16	701	164.4
SC55	1.32	1.07	0.35	0.4943	0	0	1894	102.3
SC34	1.17	1.06	0.37	0.4589	13	1	173	54.1
SC62	1.19	1.00	0.35	0.4165	16	15	486	108.0
SC20	1.42	1.21	0.24	0.4124	10	4	350	65.3
SC47	1.10	1.07	0.35	0.4120	6	3	432	60.4
SC78	1.53	1.12	0.24	0.4113	0	1	304	17.5
SC08	1.85	1.10	0.20	0.4070	0	0	205	17.6
SC48	0.98	0.97	0.40	0.3802	2	2	463	46.0
SC51	1.12	1.03	0.32	0.3692	0	1	1369	68.8
SC25	1.09	1.04	0.31	0.3514	2	4	1052	70.0
SC28	1.08	1.00	0.32	0.3456	0	1	563	32.9
SC56	1.07	0.96	0.33	0.3390	7	10	1733	141.4
SC61	0.94	0.90	0.40	0.3384	3	2	1065	87.6
SC35	0.85	0.77	0.51	0.3338	0	0	122	12.2
SC77	1.39	1.18	0.20	0.3280	1	1	1122	56.0
SC66	0.90	0.88	0.40	0.3168	4	5	661	83.7
SC23	1.39	1.08	0.20	0.3002	0	0	561	26.6
SC37	1.02	0.90	0.32	0.2938	2	1	442	39.2
SC49	1.13	1.05	0.24	0.2848	0	0	485	16.2
SC68	1.46	0.99	0.19	0.2746	2	0	143	17.0
SC29	0.91	0.77	0.39	0.2733	4	7	453	67.0
SC04	1.33	1.00	0.20	0.2660	0	0	105	6.8
SC11	1.35	1.12	0.17	0.2570	0	0	489	22.1
SC27	1.36	1.24	0.15	0.2530	1	0	79	34.0
SC42	0.75	0.74	0.45	0.2498	0	0	393	41.7
SC30	1.05	0.99	0.24	0.2495	1	0	382	17.9
SC75	1.07	0.94	0.24	0.2414	0	2	1184	64.0
SC40	1.10	0.95	0.23	0.2404	0	1	177	18.8
SC03	1.37	1.16	0.15	0.2384	0	0	131	14.0
SC24	1.23	0.94	0.20	0.2312	0	0	316	13.8
SC60	1.16	1.10	0.18	0.2297	1	2	786	40.4
SC58	1.20	0.90	0.20	0.2160	0	0	1689	101.4
SC86	1.26	0.90	0.19	0.2155	1	2	60	15.4
SC57	1.02	1.02	0.18	0.1873	1	1	207	16.5
SC02	0.90	0.75	0.27	0.1823	0	0	218	10.1
SC69	1.10	0.93	0.17	0.1739	0	0	283	33.5
SC33	1.23	0.99	0.14	0.1705	1	0	317	35.6
SC85	0.86	0.83	0.22	0.1570	0	0	30	2.6
SC10	1.06	0.98	0.15	0.1558	0	0	175	11.5
SC22	1.00	0.75	0.20	0.1500	0	0	326	12.9
SC87	1.18	0.78	0.16	0.1473	0	0	123	8.1
SC73	1.37	1.06	0.10	0.1452	1	0	191	13.4
SC38	0.86	0.80	0.21	0.1445	1	2	171	19.6
SC21	0.86	0.80	0.20	0.1376	0	0	143	6.9
SC74	1.38	0.94	0.10	0.1297	0	0	63	3.8
SC41	0.78	0.65	0.25	0.1268	1	2	164	24.9
SC67	0.85	0.71	0.20	0.1207	1	3	151	19.2
SC46	0.85	0.80	0.17	0.1156	0	0	11	0.6
SC84	0.74	0.69	0.20	0.1023	2	1	63	13.5
SC44	1.39	1.03	0.07	0.1002	0	0	143	17.9
SC19	0.85	0.80	0.14	0.0952	1	1	197	18.4
SC26	0.84	0.71	0.15	0.0895	1	2	99	15.6
SC80	0.92	0.60	0.16	0.0883	1	0	100	5.4
SC39	0.94	0.71	0.13	0.0868	1	2	76	18.5
SC43	0.85	0.84	0.11	0.0785	0	1	93	10.1
SC06	0.74	0.66	0.15	0.0733	0	0	77	3.5
SC65	0.77	0.72	0.13	0.0721	0	0	164	8.0
SC15	0.78	0.27	0.33	0.0695	1	0	9	4.9
SC45	0.82	0.78	0.10	0.0640	0	0	47	4.7
SC76	0.99	0.79	0.07	0.0547	1	0	154	12.6
SC36	0.88	0.75	0.08	0.0528	0	0	262	12.7
SC14	0.93	0.70	0.08	0.0521	0	1	187	10.2
SC12	0.78	0.55	0.12	0.0515	1	1	105	9.7
SC64	0.59	0.51	0.12	0.0361	3	0	43	11.6
SC71	0.55	0.36	0.15	0.0297	2	2	32	7.9
SC70	0.66	0.34	0.10	0.0224	0	2	7	3.5
SC63	0.55	0.30	0.12	0.0198	1	2	40	6.5
SC13	0.50	0.40	0.08	0.0160	0	2	20	5.0
SC16	1.25	0.06	0.16	0.0120	0	0	441	17.7

第261表　グループAにおける集石土壙データ一覧表

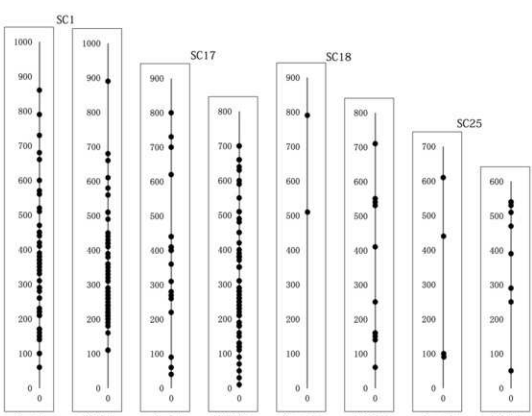
遺構	長径	短径	深さ	規模	全礫	半割礫	礫総数	礫総重量
SC72	1.65	1.49	0.57	1.4013	13	15	4854	409.6
SC52	1.61	1.43	0.45	1.0360	2	1	2741	127.2
SC79	2.14	1.61	0.29	0.9992	2	3	1186	81.5
SC82	1.67	1.56	0.35	0.9118	10	10	3026	219.4
SC39	1.53	1.42	0.37	0.8039	3	0	1581	100.4
SC53	1.46	1.25	0.41	0.7483	3	0	2247	146.2
SC01	1.50	1.32	0.33	0.6534	4	3	1319	119.1
SC17	1.53	1.40	0.30	0.6426	13	12	1958	199.1
SC18	1.42	1.21	0.36	0.6186	4	10	1855	134.0
SC54	1.28	1.25	0.35	0.5600	0	1	1348	70.6
SC55	1.32	1.07	0.35	0.4943	0	0	1894	102.3
SC51	1.12	1.03	0.32	0.3692	0	1	1369	68.8
SC25	1.09	1.04	0.31	0.3514	2	4	1052	70.0
SC56	1.07	0.96	0.33	0.3390	7	10	1733	141.4
SC61	0.94	0.90	0.40	0.3384	3	2	1065	87.6
SC77	1.39	1.18	0.20	0.3280	1	1	1122	56.0

第262表　グループBにおける集石土壙データ一覧表

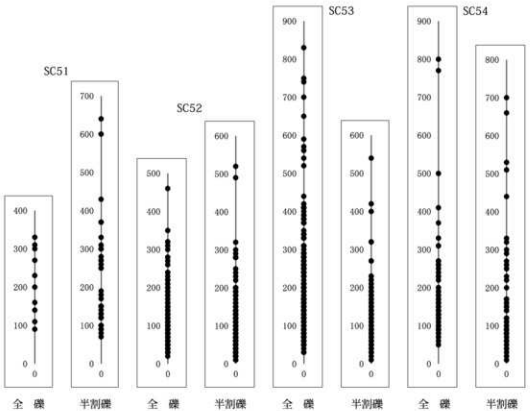
遺構	長径	短径	深さ	規模	全礫	半割礫	礫総数	礫総重量
SC31	1.26	1.12	0.36	0.5080	16	16	701	164.4
SC34	1.17	1.06	0.37	0.4589	13	1	173	54.1
SC62	1.19	1.00	0.35	0.4165	16	15	486	108.0
SC20	1.42	1.21	0.24	0.4124	10	4	350	65.3



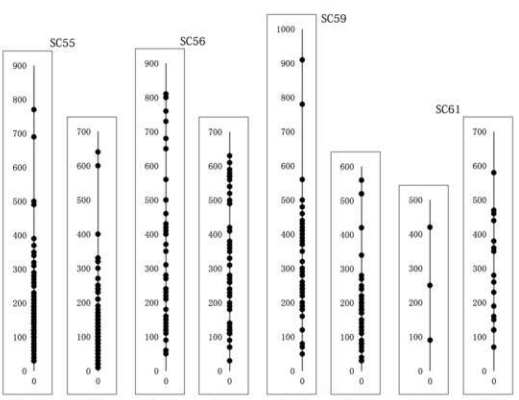
第686図　向原A遺跡における各集石土壙の形状別重量散布図



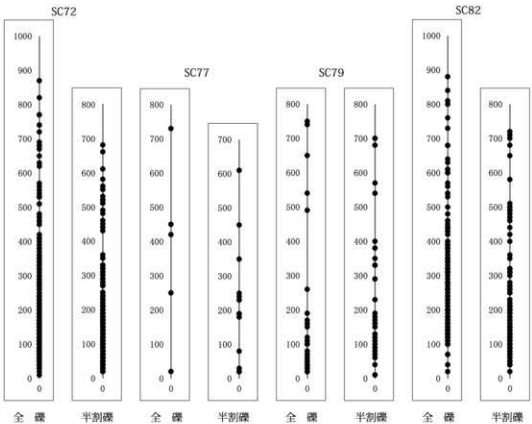
第687図　芦苅場遺跡における各集石土壙の形状別重量散布図（1）



第688図　芦苅場遺跡における各集石土壙の形状別重量散布図（2）



第689図　芦苅場遺跡における各集石土壙の形状別重量散布図（3）



第690図　芦苅場遺跡における各集石土壙の形状別重量散布図（4）

表）。もう一つは規模が大きく、重量級の全礫・半割礫も多く、総数の少ないグループ（グループB）である（第262表）。

各遺構における被熱の痕跡の有無と、第586～591図、第611～616図における集石分析図を加味すると、第77号集石土壙や第79号集石土壙のような例があるものの、グループAは、使用頻度が高い一群ではなかろうか。使用回数が増えるにつれ、被熱の影響により大形の礫が破砕し、小礫化していったものと思われる。一方のグループBは、使用頻度の低い一群ではなかろうか。火の痕跡が認められなかったのは、第20号集石土壙のみであるが、使用回数が少なく、大形の礫が被熱により破砕している過程のものと思われる。

以上、集石土壙に利用された礫の諸属性に主眼を置いて分析を行った結果、使用する礫を選択して遺跡内に持ち込んでいる可能性を指摘できよう。また、大形の礫が被熱の影響により小礫化している様相も捉えられた。

しかし、こうした事象は、集石土壙の一側面であり、遺構の形態や時期など、多角的な視点からの分析が必要であろう。今後の課題としたい。

引用・参考文献

安孫子昭二・谷口康浩　1988「勝坂式土器様式」『縄文土器大観　2』

石村貞夫・石村光次郎　2007『入門はじめての多変量解析』東京図書

今福利恵　2011「縄文土器の文様生成構造の研究」『未完成考古学叢書　8』

今福利恵　2019「勝坂式土器における動物文様と人体表現」『研究紀要』35　山梨県埋蔵文財センター

青梅市遺跡調査会　1988『駒木野遺跡発掘調査報告書』

金子直行　2006「縄文中期型環状集落解体への序章－「時（クロノス）」としての土器から見た「場（トポス）」としての集落変遷－」『ムラと地域の考古学』

清瀬市郷土博物館　1995「塩野外山遺跡」

清瀬市郷土博物館　2003「塩野前原遺跡群」

小薬一夫　2003「『柱間溝』覚書き」『法政考古』30

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1986「中矢下・夕日ノ沢・上前原沢・芝口ヲネ・後山北谷・滝尾塚」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第57集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2001「まま上遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第242集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2014「諏訪野遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第410集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2016「諏訪野遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第421集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2017「中井遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第433集

さいたま市遺跡調査会　2005「椚谷遺跡（第15次）・南方遺跡（第９次）」さいたま市遺跡調査会報告書　第37集

狭山市遺跡調査会　2003「丸山遺跡」狭山市遺跡調査会報告書　第13集

狭山市遺跡調査会　2017「稲荷上遺跡　第６次調査」狭山市遺跡調査会報告書　第26集

縄文研究の地平グループ　2017「研究集会　縄文研究の地平2017－土器から探る勝坂式と加曽利Ｅ式の間－　発表要旨・資料集」

世田谷区教育委員会　2008「桜木遺跡Ⅰ」桜木遺跡調査会

谷口康浩　1986「縄文時代集石遺構に関する試論－関東中部地方における早・前・中期の焼礫集積遺構を中心として」『東京考古』　4

谷口康浩　2018「環状集落の分節構造と異系統家屋」国立歴史民俗博物館研究報告　第208集

東京都埋蔵文化財センター　1982「№３遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和56年度－』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第２集

所沢市教育委員会　2003「第二椿峰遺跡群　海谷遺跡第１～９・12・13・16～18次」所沢市埋蔵文化財センター

飯能市遺跡調査会　1999「大日向遺跡・八王子遺跡」

飯能市遺跡調査会　2001「落合上の台遺跡」

飯能市遺跡調査会　2016「加能里遺跡　第42・43次調査」岩沢北部土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書２

飯能市教育委員会　1979「芦刈場遺跡」

飯能市教育委員会　1998「加能里遺跡第16・20・21次調査」『飯能の遺跡（25）』

飯能市教育委員会　1998「中郷遺跡第１～３次調査」『飯能の遺跡（26）』

飯能市教育委員会　2015「加能里遺跡　第41次調査」『飯能の遺跡（42）』

飯能市教育委員会　2018「芋久保遺跡第６次調査」『飯能の遺跡（44）』

飯能市教育委員会　2019「横道下遺跡　第１～５次調査」『飯能の遺跡（45）』

飯能市史編集委員会　1988『飯能市史　通史編』飯能市

富士見町教育委員会　2011「藤内」

堀口萬吉　1980「埼玉県の地形と地質」『埼玉県市町村誌』第20巻　埼玉県教育委員会

横浜市教育委員会　2000「大熊仲町遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告　26

報告書抄録

ふりがな	むかいはらえー/あしかりば
書名	向原A／芦苅場
副書名	株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第465集
編著者名	金子直行　宮井英一　入江直毅　吉留頌平
編集機関	公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１　　TEL　0493-39-3955
発行年月日	西暦2020（令和２）年12月23日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
向原A遺跡（第４次）	埼玉県飯能市大字芦苅場字久保57－１他	11209	004	35° 52′ 06″	139° 22′ 13″	20180101～20180331	1,250	土地造成
芦苅場遺跡（第2・3・4次）	埼玉県飯能市大字芦苅場字久保12－１他	11209	003	35° 52′ 08″	139° 22′ 16″	20180101～20181109	14,750	土地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向原A遺跡（第４次）	集落跡	縄文時代	住居跡　９軒 集石土壙　５基	土器・土製品・石器・石製品	
		中・近世	地下式坑　３基 土壙　６基 ピット　９基	陶磁器・在地産土器・石製品	
芦苅場遺跡（第2・3・4次）	集落跡	縄文時代	住居跡　80軒 集石土壙　88基 土壙　61基 特殊遺構　２基	土器・土製品・石器・石製品	
		中・近世	地下式坑　３基 土壙　37基 井戸跡　１基 溝跡　３条 ピット　109基	陶磁器・在地産土器・銭貨・石製品・鉄製品	

要約

向原A遺跡と芦苅場遺跡は、南小畔川右岸の台地上で東西に並ぶ遺跡である。向原A遺跡は縄文時代中期の後葉である加曽利E式期の連弧文土器を主体にする時期の集落で、芦苅場遺跡の西側に寄った地区でも同時期の住居跡が検出されている。両遺跡を明確に区分するのは難しく、一体となって集落を構成していた可能性が高い。また、芦苅場遺跡は外径約180m、中央部に径約100mの広場を有する縄文時代中期の環状集落で、中期中葉の勝坂式期から加曽利E Ⅲ式期にかけての住居跡80軒が、いくつかのブロックに分かれて検出された。勝坂式期の住居跡は、覆土かいわゆる吹上パターン状態に多量の土器、石器が出土しており、同時期の信州系の土器や東北系、東関東系の土器群も出土している。勝坂式期から加曽利ＥⅠ式期への移行期の住居跡が存在する点は注目される。他に、焼礫を利用した蒸し焼き料理の屋外調理施設と考えられている集石土壙も88基検出されており、土掘り具である打製石斧が多量に出土していることとの関連も注目される。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第465集

向原A／芦苅場

株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る
埋蔵文化財発掘調査報告
（第２分冊）

令和２年12月13日　印刷
令和２年12月23日　発行

発行／公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　熊谷市船木台４丁目４番地１
0493（39）3955
https://www.saimaibun.or.jp
印刷／山進社印刷株式会社